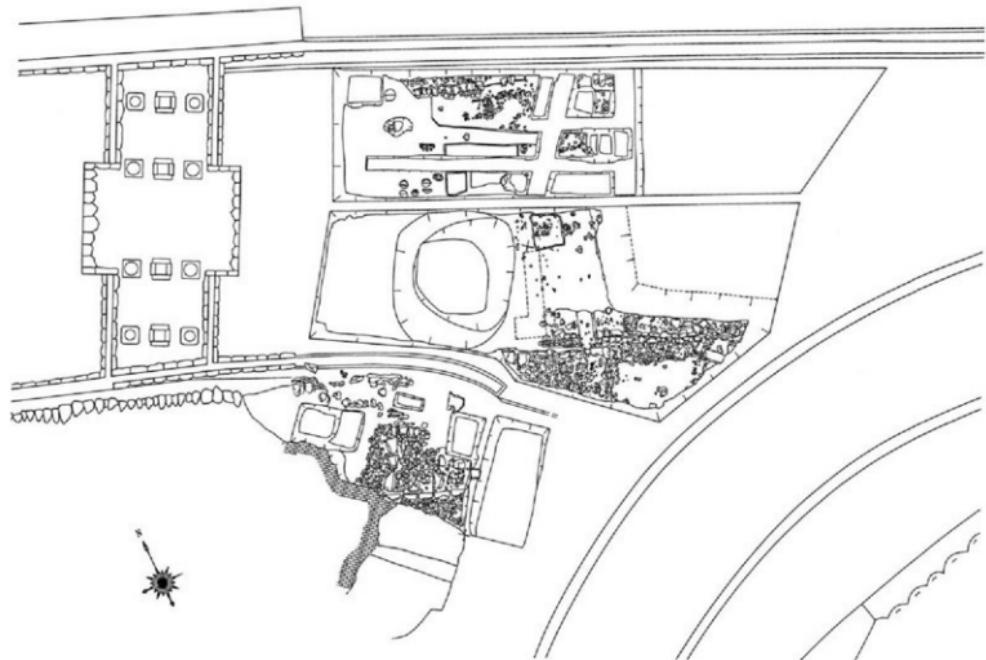


首里城跡・真珠道跡

—首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書—



平成 21(2009)年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡・真珠道跡

—首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書—

平成 21(2009)年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県が昭和63年度に策定した『首里城公園基本設計』に基づく、首里城公園県営区域（約14ha）内の復元整備に伴う遺構確認を目的としたものであり、平成18・19年度に実施した発掘調査の成果を網羅したものです。

真珠道地区の発掘調査については、平成15年度が県道49号の歩道部分を中心に調査を行いました。平成16年度は県道49号の道路部分を中心に実施し、平成17年度より守礼門南東脇にあった真珠湊碑文台座の位置確認の調査を行いました。その結果、1522年に建立された真珠湊碑文の台座跡の一部が検出されました。なお、真珠湊碑文台座跡については、引き続き平成18年度に台座跡の基礎及び周辺部の調査を実施しました。その成果については、平成20年3月に刊行した『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書(Ⅲ)－』で報告しました。

国指定史跡首里城跡守礼門東地区の発掘調査は、当該地域が史跡指定地内にあることから文化庁への現状変更申請の手続きを経て、平成18年度から守礼門南東地区の調査を行いました。この調査で綾門大道南側石積みの延長部分にあたる位置から石積みの根石や排水溝が検出されると共に真珠道跡の起点部分が確認されました。

平成19年度も引き続き守礼門北東側地区の発掘調査を実施し、最下層より14世紀終末～15世紀前半頃に位置付けられる樋建柱の住居跡や炉跡が検出されました。さらに綾門大道を普請する際に地鎮具とみられる銘入りの青銅鏡や鍍金された菊花文の入った金物が出土しました。更に綾門大道跡の北側排水溝も検出されました。

今回の報告では、真珠道起点部分が検出されたことから綾門大道南側石積みの延長にあたる石積みの根石や排水溝、そして、真珠湊碑文台座跡の平面図を再度掲載することによって、これらの遺構の平面での位置関係が容易に把握できるように配慮をしました。これも将来の県営首里城公園の復元整備が円滑に実施できるように掲載しました。

ところで真珠道については、1522年（尚真王46年）に守礼門の東南隣接地を起点に、金城坂（首里金城町石疊道）、諫名坂、真玉橋、石火矢橋、豊見城城下の東北側を廻って小禄の丘陵中腹をとおって那覇港南岸垣花の屋良座森グスクまでの約9kmにわたる琉球王国の主要な軍用道路でもありました。「眞珠湊碑文」は、真珠道の完成を記念して建立された記念碑でしたが、太平洋戦争末期（1941～45年）におこった沖縄戦で砲弾の直撃を受けて碑文が破壊され、その残片は現在、沖縄県立博物館に保管されています。このような状況もあって、平成18年度の調査で真珠道跡の起点部分が発見されたことは、真珠湊碑文台座跡と共に大きな成果であります。

守礼門西側地域の発掘調査については、平成10年度から平成12年度までの三ヵ年間に亘って実施されています。この成果については、平成15年3月刊行の『綾門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－』に網羅されています。この報告書によると綾門大道跡の造成整備の時期が古くは15世紀前半に位置付けられていましたが、平成19年度の調査においても、この時代を示す出土品が出土したことにより、前回の報告のとおり造成整備の時期が15世紀前半と、これを裏打ちすることができました。

平成18・19年度の発掘調査で出土した遺物には、中国産陶磁器、本土産陶磁器、タイ産褐釉陶器壺やタイ産の半纏（土器）、沖縄産陶器及び土器などの他に、高麗系古瓦、骨製ナイコロなども出土しています。

本報告書が、首里城公園復元整備の基礎資料として、また沖縄県の歴史と文化を理解する資料として広く活用していただければ幸いです。

末尾ながら事業実施にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位に深く感謝を申し上げます。

2009年（平成21）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長名嘉政修



巻頭図版 1 首里城航空写真（1944 年）の米軍撮影

（①首里城跡、②真玉橋、③豊見城グスク、④御物グスク、⑤屋良座森グスク、⑥三重グスク、⑦硫黄グスク）



卷頭図版2 1945年4月2日米軍撮影(CV20-103-63)の首里城周辺
(財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室所蔵)



巻頭図版3 首里城跡（1993年撮影の航空写真）



卷頭図版4 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝と真珠道起点(左側)部分の検出
状況（東側より望む）
下段：同上の遺構を西側より望む



卷頭図版5 上段：平成18年度 検出された真珠湊碑文台座跡を東側より望む
下段：同上の遺構を西側より望む



卷頭図版6 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝と真珠道起点（手前）の検出状況
を南側より望む
下段：同上の遺構を西側より望む



卷頭図版7 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝（手前）及び真珠道起点部分（左側）の検出状況を北側より望む
下段：同上の遺構の拡大。中央より左寄りが真珠道の排水溝



卷頭図版8 平成18年度 主要出土遺物など

上段：首里城跡守礼門正面（西側より望む） 中段左：首里城跡守礼門降棟の鳥衾瓦と鬼板瓦
中段右：出土した昭和12年修理の鳥衾瓦と鬼板瓦 下段左：重修「真珠湊碑文」（1522年建立）
の拓影と出土した碑文破片の位置 下段右：出土した碑文破片



卷頭図版9 上段：平成19年度 首里城跡守礼門正面と発掘調査区（左側フェンス囲い）
下段：発掘調査の状況を東側より望む



卷頭図版 10 上段：検出された遺構を東側より望む
下段：同上遺構を西側より望む（左：排水溝、中央～右：掘建柱住居跡と炉跡）



卷頭図版11 上段：北側より排水溝（手前）と掘建柱住居跡西半分と炉跡を望む
下段：北側より排水溝（左下）と掘建柱住居跡東半分（中央～右）を望む



卷頭図版 12 平成 19 年度 主要遺物など

上段左:鍍金された菊花文金物 上段右:青銅鏡「為善最樂」銘入

中段左上:骨製のサイコロ 中段右上:骨製の円盤状遊具 中段:青磁の束口碗(龍泉窯:14世紀)

下段:《参考資料》首里城二階殿跡出土の青磁碗および同碗の高台

例　言

- 1 本報告書は、平成18・19年度の二ヵ年間実施した県営首里城公園内の守礼門東地区（守礼門から世界遺産南比屋武御嶽石門近くまでの区間）の発掘調査の成果を整理して報告したものである。
- 2 本事業は県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の教育庁文化課が行い、発掘調査及び事業事務を沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図を使用した。
- 4 本報告書で使用したカラーの航空写真は、国土地理院の93OKINAWA-49-12を複写した。白黒の航空写真は、財團法人沖縄県文化振興会公文書保管部史料編集室所蔵の1945年4月2日米軍撮影 (CV20-103-63) を複写した。
- 5 沖縄県立博物館・美術館所蔵の『冠船之時御座構之図』中「冊封御規式之図」、及び明治27年に査定烈作製の『沖縄縣琉球國首里城之圖』については、同館収蔵品の複写及び掲載の許可を得て本報告書で使用した。
- 6 平成20年度出土遺物の同定は、下記の方々に御協力をいただいた。各年度の出土遺物の同定は、第2節に記した。明記して謝意を表します。

金属製品・・・元国立歴史民俗博物館 情報資料研究系 教授 宇田川 武久
陶磁器・・・元佐賀県立九州陶磁文化館 館長 大橋 康二
熊本大学 文学部 考古学研究室 教授 木下 尚子
石器・石質・・・金城町石疊地質研究所 所長 神谷 厚昭
瓦・・・・・・・沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 教授 上原 静

- 7 本報告書は、金城亀信を中心に、又吉純子ほかの協力を得て、編集を行った。各節の執筆者は以下に示すとおりである。

金城 亀信 第1章～第4章、第5章（第13節2・第18節・第20節～第22節）、第6章
新垣 力 第5章（第1節・第4節・第8節・第11節）
知念 隆博 第5章（第2節・第3節・第5節・第9節2・第14節・第15節）、（16節1）
仲村 純 第5章（第6節・第7節）
天願 瑞笑 第5章（第9節1・第10節・第12節）
上原 静 第5章（第13節1・3）
大朏 鮎平 第5章（第16節2・第17節）
音原 広史 第5章（第19節）

- 8 本報告書に掲載された現場の写真撮影は、金城亀信が中心に、伊藤由希・大願瑞笑でおこなった。掲載した出土遺物の撮影及び現像・焼付けは矢舟章浩・伊禮若菜がおこなった。
- 9 発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序

巻頭図版

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の概要	16
第1節 調査経過	16
第2節 調査区の設定	16
第4章 遺構と層序	23
第1節 平成18年度	23
第2節 平成19年度	32
第5章 出土遺物	39
第1節 青磁	39
第2節 白磁	44
第3節 染付	45
第4節 褐釉陶器	45
第5節 その他の輸入磁器	48
第6節 本土産陶磁器	48
第7節 沖縄産施釉陶器	50
第8節 沖縄産無釉陶器	53
第9節 土器・タイ産半練土器	56
第10節 陶質土器	57
第11節 瓦質土器	58
第12節 円盤状製品	59
第13節 屋瓦、漆喰、埠瓦・煉瓦	59
第14節 青銅製品・錢貨	74
第15節 鉄製品・坩埚	76
第16節 石製品	78
第17節 不明石造製品・石材	79
第18節 加工痕のある木片・木製加工材・ 擦り繩	85
第19節 骨製品	88
第20節 ゴム製品	88
第21節 貝類遺存体	89
第22節 脊椎動物遺存体	95
第6章 結語	97
第7章 自然科学分析	105
附編 琉球王国・首里城関係年表	180

参考文献

報告書抄録

図 目 次

第1図	沖縄県の位置と周辺諸国	4	第28図	本土童色繪	49
第2図	首里城跡の位置	6	第29図	本土産陶器	49
第3図	首里城及び守礼門直下に構築された旧陸軍司令部壕の位置及び1950年頃の米軍作成の壕平面図	7	第30図	沖縄産施釉陶器	52
第4図	首里城跡地下に構築された1950年頃の米軍が作成した旧陸軍司令部壕の各坑道の位置断面図	8	第31図	沖縄産無釉陶器1	55
第5図	明治初年の那覇	9	第32図	沖縄産無釉陶器2	56
第6図	首里古地図	11	第33図	土器	57
第7図	首里古地図拡大	13	第34図	タイ産半練土器	57
第8図	冊封御規之時守礼門并御城御座之図1	14	第35図	陶質土器	58
第9図	冊封御規之時守礼門并御城御座之図2	15	第36図	瓦質土器	58
第10図	首里城平面図(昭和6年頃)に調査区と真珠道を表示	18	第37図	円盤状製品	59
第11図	昭和11年10月~12年5月に作製された守礼門解体修理時の周辺状況図面	20	第38図	屋瓦1	62
第12図	グリッド配置図及び年度別発掘調査区域	21	第39図	屋瓦2	63
第13図	平成18年度遺構平面及び砲弾炸裂痕断面	25	第40図	屋瓦3	64
第14図	平成18年度遺構の平面及び断面と漆喰溜りの北壁層序	27	第41図	屋瓦4	65
第15図	平成18年度調査区内の層序	29	第42図	屋瓦5	66
第16図	平成18年度調査区内の層序を基に推定復元を試みた真珠道起点部分	31	第43図	屋瓦6	67
第17図	平成19年度遺構の平面及び断面	33	第44図	屋瓦7	68
第18図	平成19年度調査区内の層序	37	第45図	漆喰	71
第19図	青磁1	42	第46図	埠瓦・煉瓦	73
第20図	青磁2	43	第47図	青銅製品・錢貨	75
第21図	青磁3	44	第48図	鉄製品・坩堝	77
第22図	白磁	44	第49図	硯	78
第23図	染付	45	第50図	擦石	79
第24図	褐釉陶器	47	第51図	石柱	83
第25図	天目	48	第52図	挟み石・石碑	84
第26図	瑠璃釉	48	第53図	加工痕のある木片、木製加工材	86
第27図	本土産染付	49	第54図	木製加工材、撚り繩	87
			第55図	骨製品	88
			第56図	ゴム製品	88
			第57図	平成17~19年度の遺構と眞珠湊碑文及び国王頌徳碑の位置関係	99
			第58図	脂肪酸(左側)・ステロール(右側)	108
			組成	108	
			第59図	赤外線吸収スペクトル(IRスペクトル)	109
				109
			第60図	眞珠道跡出土の漆のFT-IR(赤外線吸収)スペクトル	118
			第61図	首里城跡・守礼門東側・眞珠道跡出土の漆喰試料のX線回折図	119

図版目次

- 卷頭図版 1 首里城航空写真(1944年)の米軍撮影
- 卷頭図版 2 1945年4月2日米軍撮影(CV20-103-63)の首里城周辺
- 卷頭図版 3 首里城跡(1993年撮影の航空写真)
- 卷頭図版 4 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝と真珠道起点(左側)部分の
検出状況を東側より望む
下段：同上の遺構を西側より望む
- 卷頭図版 5 上段：平成18年度 検出された真珠湊碑文台座跡を東側より望む
下段：同上の遺構を西側より望む
- 卷頭図版 6 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝と真珠道起点(手前)の検出
状況を南側より望む
下段：同上の遺構を西側より望む
- 卷頭図版 7 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝(手前)及び真珠道起点部分
(左側)の検出状況を北側より望む
下段：同上の遺構の拡大。中央より左寄りが真珠道の排水溝
- 卷頭図版 8 平成18年度 主要出土遺物など
上段：首里城跡守礼門正面
中段左：首里城跡守礼門降棟の鳥食瓦と鬼板瓦
中段右：出土した昭和12年修理の鳥食瓦と鬼板瓦
下段左：重修「真珠湊碑文」(1522年建立)の拓影と出土した碑文破片の位置
下段右：出土した碑文破片
- 卷頭図版 9 上段：平成19年度首里城跡守礼門正面と発掘調査区
下段：発掘調査の状況を東側より望む
- 卷頭図版10 上段：検出された遺構を東側より望む
下段：同上遺構を西側より望む
- 卷頭図版11 上段：北側より排水溝(手前)と掘建柱住居跡西半分と炉跡を望む
下段：北側より排水溝(左下)と掘建柱住居跡東半分(中央～右)を望む
- 卷頭図版12 平成19年度 主要遺物など
上段左：鍍金された菊花文金物 上段右：青銅鏡「爲善最樂」銘入
中段左上：骨製のサイニロ 中段右上：骨製の円盤状遊具
中段：青磁の束口碗(龍泉窯：14世紀)
下段：《参考資料》首里城二階殿跡出土の青磁碗および同碗の高台

- 図版 1 平成18・19年度の発掘調査によって
検出された遺構の遠近景……………17
- 図版 2 上段：「首里旧城之図」査丕烈 筆明
治27年頃作成
下段：首里城復元期成会刊行の『國
王頌德碑・真珠湊碑文復元事
業報告書』(2006年2月)収録
の「昭和7、8年頃の國王頌
德碑・真珠湊碑文」を許可後
に複写掲載……………19
- 図版 3 上段：平成18年度 綾門大道南側石積
み延伸部分の排水溝と真珠道
の起点(左側)部分の検出状況
下段：同上の遺構を西側より望む

……………26

- 図版 4 上段：平成19年度 綾門大道跡北側排
水溝の延伸部分(右側)と掘建
柱住居跡・炉跡を東側より望む
下段：同上の遺構の一部を北側より
望む……………35
- 図版 5 平成18年度 調査前の状況……………125
- 図版 6 平成18年度 調査前の花壇移設、仮囲
い、アスファルト撤去等……………126
- 図版 7 平成18年度 調査区内の除草及び発掘
状況……………127
- 図版 8 平成18年度 調査状況……………128
- 図版 9 平成18年度 調査区内の埋め戻しと調
査区の遠景……………129
- 図版10 平成18年度 調査区内の各壁面
……………130～132

図版11	平成18年度 調査区内検出の真珠漆碑 文台座跡	133
図版12	平成18年度 調査区内検出遺構を西側 より望む	134
図版13	平成18年度 調査区内の遺構検出状況	135
図版14	平成18年度 調査区内の遺構検出状況	136
図版15	平成18年度 遺構検出状況	137
図版16	平成18年度 調査区内の遺構等の検出 状況	138
図版17	復元された国王頌徳碑及び真珠漆碑 文と碑文解説	139
図版18	平成19年度 調査前の状況と夜間作業 (アラシタ-移設・仮囲い)の状況	140
図版19	平成19年度 調査前の安全対策状況	141
図版20	平成19年度 調査前の状況	142
図版21	平成19年度 調査区内外の作業状況	143
図版22	平成19年度 調査区の各壁面	144～146
図版23	平成19年度 調査区内の遺構検出状況	147
図版24	平成19年度 調査区内の遺構及び試掘 坑の状況	148
図版25	平成19年度 調査区内の遺構等を南側 より望む	149
図版26	平成19年度 調査区北壁近くで検出さ れた綾門大道排水溝延伸部分の縁石 と壁面	150
図版27	平成19年度 調査区と11グリットより 検出された遺構	151
図版28	平成19年度 調査区シ-11より検出さ れた遺構	152
図版29	平成19年度 調査区シ-11グリット検 出の炉跡の半裁状況	153
図版30	平成19年度 調査区遺構等の状況	154
図版31	平成19年度 調査区遺物出土状況①	155
図版32	平成19年度 調査区遺物出土状況②	156
図版33	平成19年度 調査区遺物出土状況③	157
図版34	平成19年度 調査区遺物出土状況④	158
図版35	青磁 1	159
図版36	青磁 2	160
図版37	上：青磁 3 下左：白磁 下右：染付	161
図版38	上：褐釉陶器 下：本土産染付	162
図版39	天目	162
図版40	瑠璃釉	162
図版41	本土産色絵	162
図版42	本土産陶器	162
図版43	沖縄産施釉陶器	163
図版44	沖縄産無釉陶器 1	164
図版45	上：沖縄産無釉陶器 2 下左：陶質土器 下右：瓦質土器	165
図版46	土器	165
図版47	タイ産半練土器	165
図版48	円盤状製品	165
図版49	屋瓦 1	166
図版50	屋瓦 2	167
図版51	屋瓦 3	168
図版52	屋瓦 4	169
図版53	屋瓦 5	170
図版54	屋瓦 6	171
図版55	漆喰	171
図版56	埠瓦・煉瓦	172
図版57	上：青銅製品・銭貨 下：鉄製品	173
図版58	上：硯 下：石柱・挟み石・石碑	174
図版59	擦石	174
図版60	球状石製品	174
図版61	加工痕のある木片・木製加工材	175
図版62	木製加工材・燃り繩	176
図版63	骨製品	176
図版64	ゴム製品	176
図版65	貝類遺存体 1	177
図版66	貝類遺存体 2	178
図版67	脊椎動物遺存体 1	179
図版68	花粉化石	110
図版69	植物珪酸体	111
図版70	蛍光X線分析試料	120
図版71	漆喰試料の薄片写真	121
図版72	繩	122

表 目 次

第1表	平成18年度調査区の層序観察一覧	28	第23表	貝類遺存体出土状況(二枚貝)	93
第2表	平成19年度調査区の層序観察一覧	36	第24表	メジロザメ出土一覧	96
第3表	青磁観察一覧	39	第25表	魚骨出土一覧	96
第4表	青磁出土状況	41	第26表	ニワトリ出土一覧	96
第5表	褐釉陶器出土状況	46	第27表	ウマ出土一覧	96
第6表	褐釉陶器観察一覧	46	第28表	ブタ出土一覧	96
第7表	沖縄産施釉陶器出土状況	51	第29表	ウシ出土一覧	96
第8表	沖縄産無釉陶器出土状況	53	第30表	種不明出土一覧	96
第9表	沖縄産無釉陶器観察一覧	54	第31表	遺物出土状況	102
第10表	土器観察一覧	56	第32表	分析試料一覧	105
第11表	陶質土器観察一覧	57	第33表	花粉分析結果	106
第12表	円盤状製品観察一覧	59	第34表	植物珪酸体分析結果	106
第13表	屋瓦観察一覧	60	第35表	蛍光X線分析装置の測定条件	113
第14表	屋瓦出土状況	69	第36表	真珠道跡出土の硯および沖縄産施釉 陶器の蛍光X線分析結果(科学組 成)	113
第15表	埠瓦・煉瓦出土状況	72	第37表	真珠道跡出土のガラス製品の蛍光X 線分析結果(科学組成)	114
第16表	埠瓦・煉瓦観察一覧	72	第38表	守礼門東側出土の銅製品の蛍光X線 分析結果	114
第17表	青銅製品・銅製品・錢貨出土状況	74	第39表	守礼門東側出土の銅製装飾品金箔部の 元素定性分析結果	114
第18表	鉄製品と不明品出土状況	76			
第19表	石材出土状況	81			
第20表	木製品等の出土状況	87			
第21表	貝類生息場所類型表	89			
第22表	貝類遺存体出土状況(巻貝)	90			

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

沖縄県（第1図）の県庁所在地である那覇市の東側丘陵地には、約550年間琉球王国の政治・経済・文化の中核であった首里城（第2図）があった。首里城は歴代の国王によって、当時の琉球十国の大木・建築技術などの粹を集めて築城されたグスクであった。グスク内には正殿、北殿、南殿などの多くの建造物が存在し、その幾つかは国家として1925年に指定されたが、1945年のアジア太平洋戦争末期に起きた沖縄戦で、首里城地下に日本軍の沖縄総司令部壕が構築（第3・4図）されたことにより米軍の集中砲火を浴びて国宝であった首里城正殿をはじめとする首里城内に入る第二の坊門であった国宝「守礼門」（俗称：上の綾門。1527年～1555年創建）、『真珠珠碑文』（註1）などの多くの貴重な文化財が消失・破壊された。首里城の第一の坊門であった「中山門」（俗称：下の綾門。1428創建）から「守礼門」までの区間を「綾門大道」と称し、琉球王国第一の道路であった。「綾門大道」の整備時期は不明であるが、『球陽』（註2）では1428年に国門（中山門）を創建したとある。また、平成10～12年度に実施された「綾門大道」跡の発掘調査（註3）から北側の土留め石積みの控え部分から検出されたSA01遺構内から出土した高麗系瓦、大和系瓦、青磁などから15世紀前半頃に「綾門大道」の整備造成が開始されたようである。

今回の発掘調査は首里城公園（約17.8ha）の内、国宮沖縄記念公園首里城地区の約4haを除いた県宮首里城公園（約14ha）の整備に伴うものであり、平成18・19年度に引き続き首里城跡守礼門東地区（調査範囲は、概ね守礼門より東に2.5mから19mの範囲内を対象とした。丁度、世界遺産園比屋武御嶽右門前の約10m手前）の園路部分を対象とした。この園路は首里城内に入る観光客の主要な動線であったため、園路を閉鎖することができないように園路を南北に分割して、二カ年に亘って実施した。

註文献

註1. 沖縄県文化財調査報告書第69集「全文文・歴史資料調査報告書V-」沖縄県教育委員会 1985年3月。

註2. 沖縄文化史料集成5『球陽（読み下し編）』球陽研究会 角川書店1974年3月。

『球陽（読み下し編）』には次のように掲載されている。「尚巴志王7年、国門を創建す。傍ら曰く、中山と（旧記に曰く、中山の二字は内宮柴山進めて以て額と為すと）」。

註3. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第13集「綾門大道跡」沖縄県立埋蔵文化財センター2003年3月。

第2節 調査体制

発掘調査は、平成18・19年度に実施し、資料整理及び報告書作成は平成18～20年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが以下の体制でおこなった。

平成18（2006）年度

事業主体

沖縄県教育委員会

教育長 仲宗根 用英

教育次長 仲村 守和（事業担当）

事業所管課

沖縄県教育庁文化課

課長 岸木良 労範

課長補佐 島袋 洋（事業担当）

記念物係（事業担当）主幹兼係長 盛本 煉、専門員 新垣 力、専門員 知念 隆博

文化係（事務担当）主幹兼係長 城田 久嗣、主任 神谷 リカ

事業統括・事業事務

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　田場 清志
副所長兼庶務課長　瑞慶覧 康博
庶務課 主査　玉奇 秀人
調査課 課長　岸本 義彦、主任専門員 金城 龜信（調査担当）、専門員 中山 晋
専門員　伊勢 由希（臨の任用専門員）、専門員 仲村 敏（臨の任用専門員）
文化財調査嘱託員
岸本 竹美・光嶋 香・金城 友香・上原 留美
埋蔵文化財資料整理嘱託員
石嶺 真由美・上原 圭子・我那堀 悠子・城間 千鶴子・仲宗根 二枝子・外間 瞳・真栄城 和美
山下 美也子・喜屋武 朋子・金城 敏子・崎原 美智子・野村 知子・山川 由美子・仲地 明
資料整理作業員
本郷 裕太・又吉 扶・村古 亮・仲宗根めぐみ・喜納ひとみ・志良堂 恵・渡嘉敷 敏子・上間 智美
資料整理出土品解釈・坊言等
京都国立博物館工芸室 工芸室長 久保 智康
おきなわワールド（玉泉洞）博物館顧問 大城 逸郎
国立歴史民俗博物館 奈古研究部 研究連携センター長 小野 正敏
有田町教育委員会 有田町歴史民俗資料館 文化財調査員 野上 建紀
沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 助教授 上原 静
有限会社榮用窯 取締役 新垣 栄（壺屋焼荒焼陶工）
壺屋焼やちむん家陶工 新垣 栄一（土焼皿・土焼壺）、壺屋焼陶工 新垣 光雄（荒焼）
調査協力機関等
財團法人海洋博覧会記念公園管理財團 首里城公園管理センター事業課 管理課 管理係長 瑞慶覧 聰
管理係 技師 島袋 林博、技師 比嘉 正亮
沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課 公園緑地長 茂上 圭弘、主任 前原 信一
沖縄県土木建築部南薩土木事務所 街路公園班長 安里 辰夫、主幹 屋良 一洋、主任技師 上間 秀一
沖縄県教育庁保健体育課 課長補佐 新垣 悅男

平成19（2007）年度

事業主体
沖縄県教育委員会
教育長　仲村 守和
教育指導統括官　金武 正八郎

事業所管課
沖縄県教育庁文化課
課長　千木良 労範
副参事　比嘉 敏子
記念物班 班長　島袋 洋（事業担当）、専門員 新垣 力、専門員 濱戸 哲也
文化班 班長　識名 厚（予算担当）、主任 仲間ひろみ

事業統括・事業事務
沖縄県立埋蔵文化財センター
理事長　名嘉 政修
副所長兼庶務課長　瑞慶覧 康博
庶務課 主事　村吉 由美子
調査班 班長　岸本 義彦、主任専門員 金城 龜信（調査担当者）、主任 中山 晋
文化財調査嘱託員
伊勢 由希・天願 璇笑・岸本 竹美・小橋川 刚・大城 歩・伊集ゆきの
埋蔵文化財資料整理嘱託員

赤嶺 雅子・池原 直美・石瀬 旗山美・金城 克子・金城 友香・瑞慶覧 尚美・高良 三千代
友利映子・玉城 忠美利・玉寄 智恵子・仲地 明・仲地 和美・比嘉なおみ・吉村 綾子
発掘調査作業員

伊志嶺 亮・翁長 博明・翁長 涼子・樂山 盛吉・高江渕 君子・仲宗根 孝・比嘉 党・久田 健子
又吉 康和・安村 重保

資料整理作業員

池原 恵江・桑江恭子・玉城 幸子・仲宗根めぐみ・宮城 端紀・中山まり・與古田 愛
資料整理出土品解釈・助言等

国立歴史民俗館 情報資料研究系 教授 宇田川 武久

沖縄国際大学総合文化学部 助教授 上原 静

調査協力機関等

財団法人海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター長 上原 勝信

管理課 课長補佐 仲木 博律・管理係長 瑞慶覧 聰・管理係 技師 島袋 林博、技師 比嘉 正亮

県土木建築部都市計画・モノレール課 公園緑地班長 茂上 圭弘・主任技師 水田 貴之・主任 上原 善彦
県土木建築部南部土木事務所 街路公園班長 安田 駿夫・王幹 久高 将祐・主任技師 上間 秀一

平成20(2008)年度

事業主体

沖縄県教育委員会

教育長 仲村 守和

教育指導統括官 金武正八郎

事業所管課

沖縄県教育庁文化課

課長 千木良 芳純

記念物班 班長 島袋 洋(事業担当)・主任 濱戸 哲也

文化班 班長 誠名厚(予算担当)・主任 緑田 卓也

事業総括・事業事務

沖縄県立埋蔵文化財センター

参事兼所長 名島 政修

総務班 班長 嘉手苅 効・主事 村吉 由美子

調査班 班長 岸本 義彦・主幹 金城 雅信・主任 上地 博

文化財調査嘱託員

天嶺 瑞笑・本村 麻里衣・伊波 直樹

埋蔵文化財資料整理嘱託員

新垣 利代・上原 美穂子・大村 由美子・金城 克子・金城 友香・久保田 有美・瑞慶覧 尚美

平良 貴子・玉城 照美・知念愛(旧姓 與古田)・土田智恵美・仲地 明・中山 まり・仲宗根 めぐみ

比嘉なおみ・又吉 純子・矢貳 章浩・山川 由美子

資料整理作業員

新垣 桂子・砂川 博紀・玉城 実子・永井栄 美香・宮里 宗彦・宮城 あきの・森屋 明子

資料整理協力者

荻堂 さやか・崎原 美智子・比嘉 孝子・比嘉 登美子・諸久村 泰子

資料整理出土品解釈・助言等

元佐賀県立九州陶磁文化館長 大橋 康二

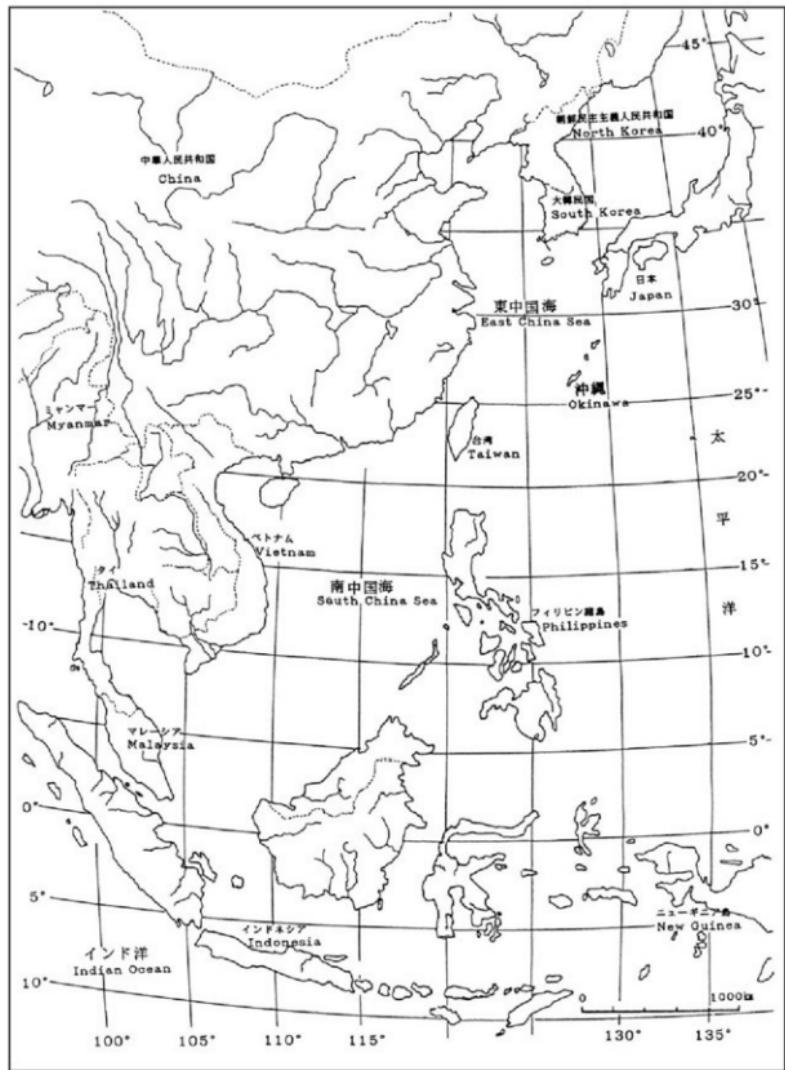
熊本大学 文学部 考古学研修室 教授 木下 尚子

金城町石晉地質研究所長 神谷 厚昭

沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 教授 上原 静

調査協力機関等

県土木建築部都市計画・モノレール課 公園緑地班長 嶺井 秋夫・主任技師 水田 貴之・主任 赤嶺 涼一



第1図 沖縄県の位置と周辺諸国

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

首里城跡（第2図）の所在する県都である那覇市の総面積は、平成19年（2007年2月）の那覇市推計によると39.23km²となっている。参考までに12年前の平成7年（1995）は、総面積が38.74km²であった。平成20年10月末現在の那覇市の総人口は、316,322人で世帯数132,685世帯（平成8年10月1日現在：300,809人。105,638世帯）である。12年間で人口が15,513人増加し、世帯数も27,047世帯の増加が窺える。

沖縄気象台の資料によると平成19年度の那覇市の平均気温は23.5℃（最高気温34.5℃、最低気温10.9℃）で平均湿度が72%であった。因みに平成16年度の那覇市の平均気温は23.4℃（最高気温33.9℃、最低気温9.9℃）で平均湿度69%であった。気候は亜熱帯性気候に属している。

国指定史跡首里城跡が所在する那覇市首里当蔵町は、首里台地（標高100～135m）と称される第四紀層の琉球石灰岩上に形成された県内最大級のグスクである。16401 とうりやま

遺跡を囲む環境は、北に西森（標高102m）や虎頭山（標高280m）、北東に弁ヶ嶽（標高165.6m）などの丘陵部、河川では北側にやが西へ流れている。南側は安里川の浸食により窪地となっているなど自然地形を巧みに利用した位置に占地がなされている。

首里城跡及び周辺の地層は、上層が琉球石灰岩、下層に基盤である第二紀島尻層群（シルト質泥岩）となっている。上層の琉球石灰岩上に降り注いだ雨水は、透水層である琉球石灰岩を時間をかけて透過しながら不透水層である島尻層群（シルト質泥岩及びその風化土）との境から湧き出すような地質的構造となっている。その為、首里城跡を含む首里一帯は豊富な湧泉が多数所在する。

参考文献

- ・沖縄県統計協会『2006 県民手帳』2006年度版。
- ・木崎甲四郎編著『琉球弧の地質史』沖縄タイムス社 1985年
- ・沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年5月30日。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集『真珠道跡・首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（1）』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年3月。
- ・沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書・真珠道・末吉宮参拝道』 1984年3月。

第2節 歴史的環境

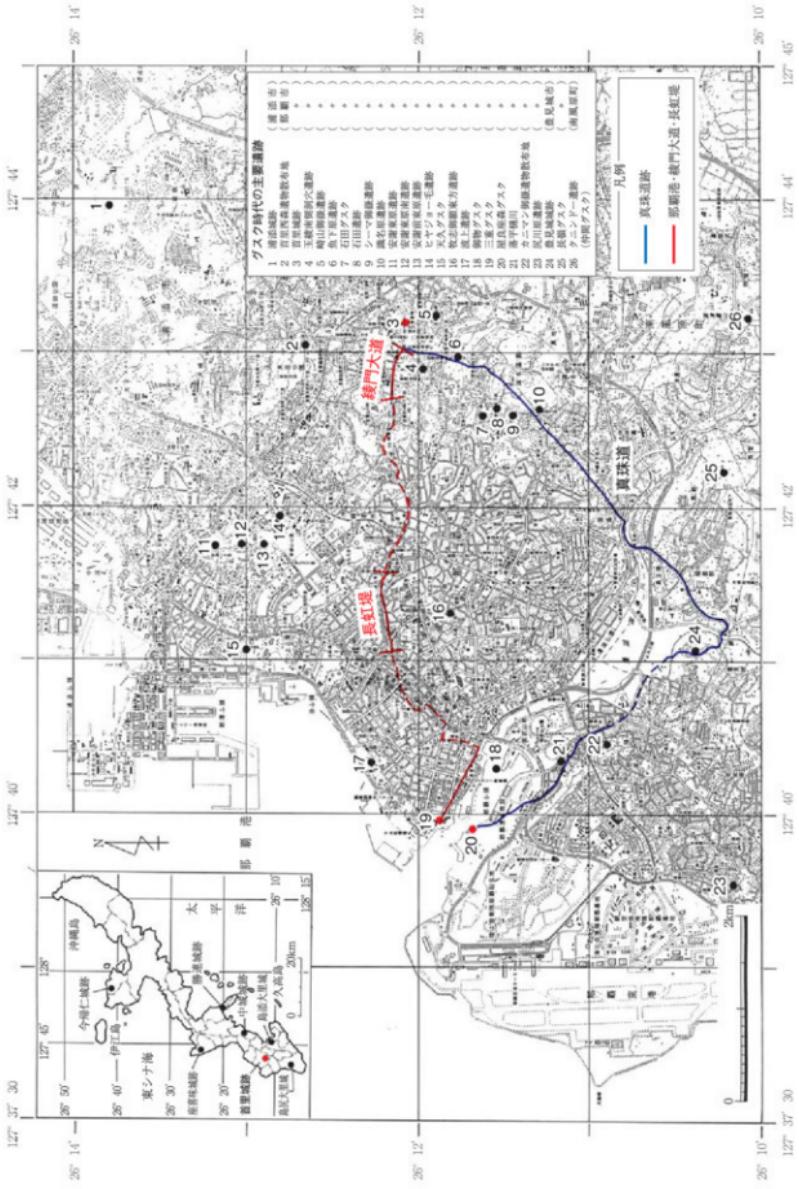
首里城の築城された年代は不詳であるが、首里城正殿跡の発掘調査成果（註1）によると14世紀代には正殿が存在したようである。また、首里城の西側（現在の首里杜館～首里城公園管理センター）一带にあった天界寺跡（註2）の発掘調査では14世紀後半から15世紀前半までの集落跡の存在が確認されているようである。

更に1612年に設置された其括奉行所（御細工所）が、守礼門の北側にある城西小学校敷地内へ17世紀前半頃（註3）に移転したようである。

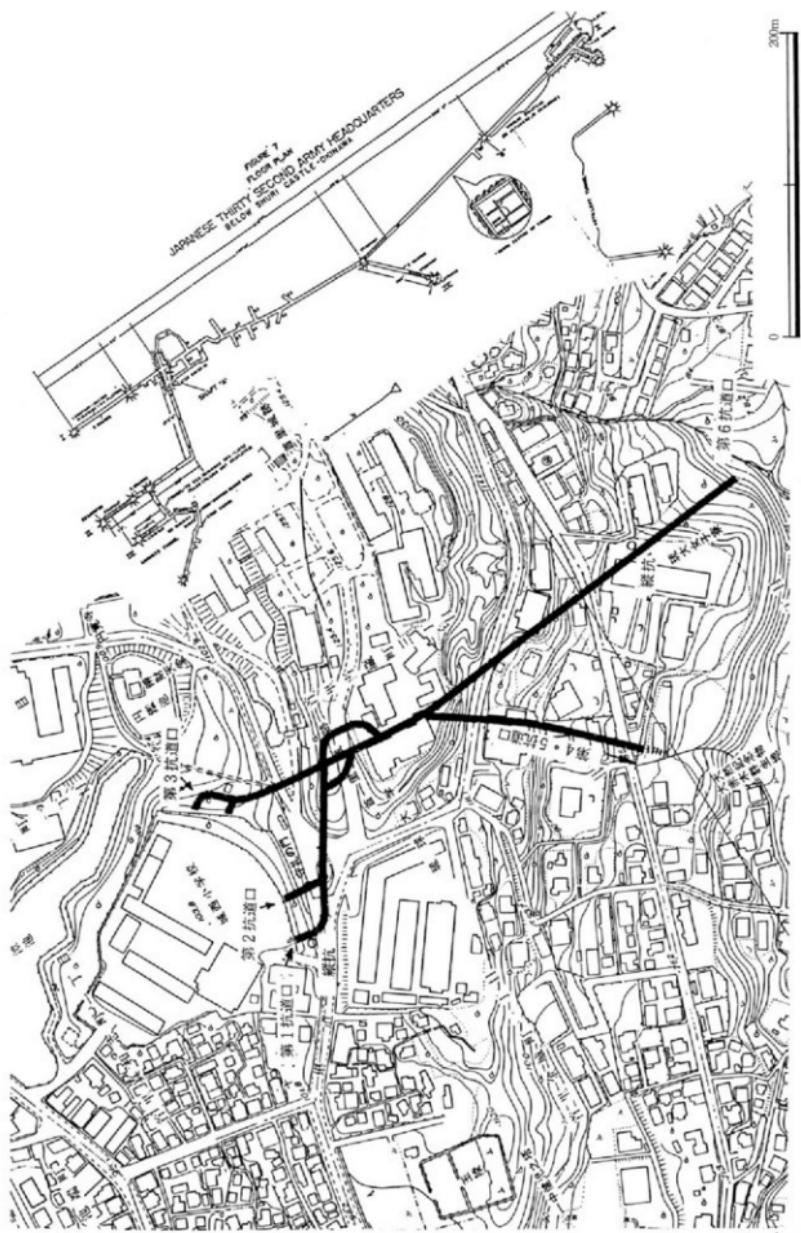
沖縄最古の金石文とされている「安国山樹莖木之記傳」（1427年建立）によると第一尚氏の尚巴志王代（1422～1439年）に安国山（ハンタン山。園比屋武御廬後方の山）の北側に池（「龍淵」）を堀り、安国山に松柏をはじめとする花果、葉木などの樹木を植えて整備をおこなったことが確認されている。その他、綾門大道の西側起点となつた第一の坊門（俗称：「下の鳥居」或いは「下の綾門」）が1428年に創建されている事から1428年頃までは尚巴志によって首里城の基本的な形が完成したものと考えられている。

次の首里城城郭郭張などの時期は、第二尚氏王統の尚真王代（1477～1526年）に首里城の北側外郭と欽会門及び久慶門の整備、そして主要な軍用道路であった「真珠道」が1522年に整備された。（第5～7図）

真珠道跡は、首里城の第二坊門であった守礼門（1528年創建。俗称：「上の鳥居」・「上の綾門」）南東側を起点とする道路で、北側には園比屋武御塚石門がある。真珠道の起点部分の東西両脇には、1522年に建立された「国王頒德碑」（真珠道の東側に位置することから、俗称で「石門之東之碑文」とも称す）と

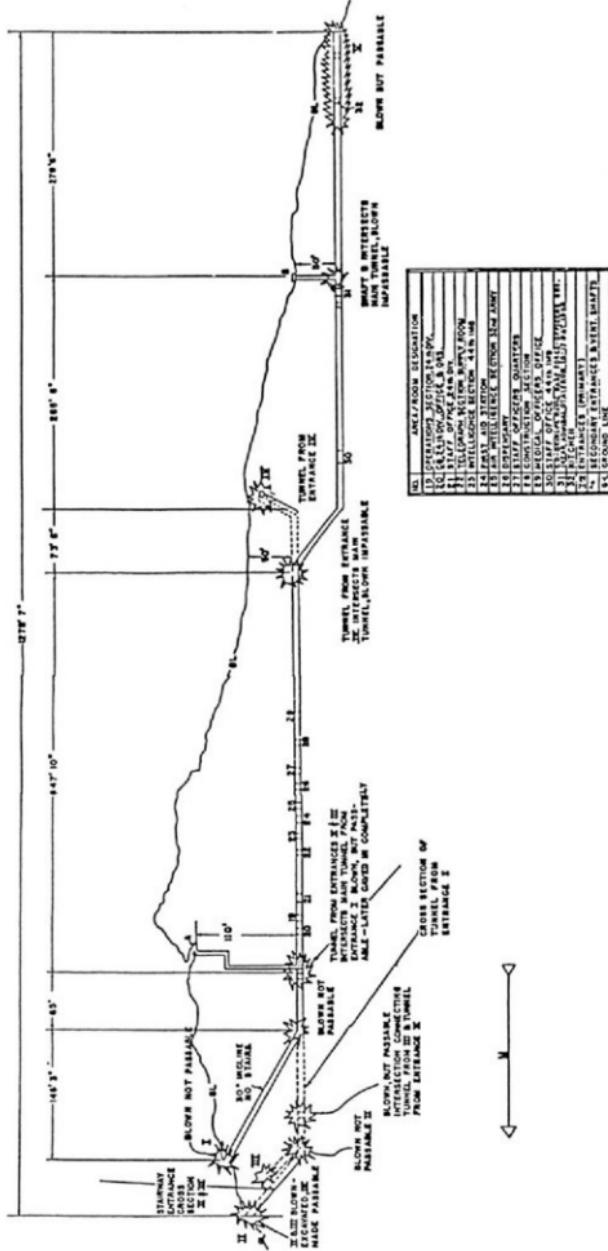


第2図 首里城跡（真珠道路・綾門大道～那霸港の道程）の位置



第3図 首里城及び守礼門直下に構築された旧陸軍司令部壕の位置及び1950年頃の米軍作成の壕平面図
〔『首里城公園基本計画調査報告書』1984年9月より複写〕

FIGURE 8
CROSS SECTION
JAPANESE THIRTY SECOND ARMY HEADQUARTERS
BELOW SHURI CASTLE OKINAWA

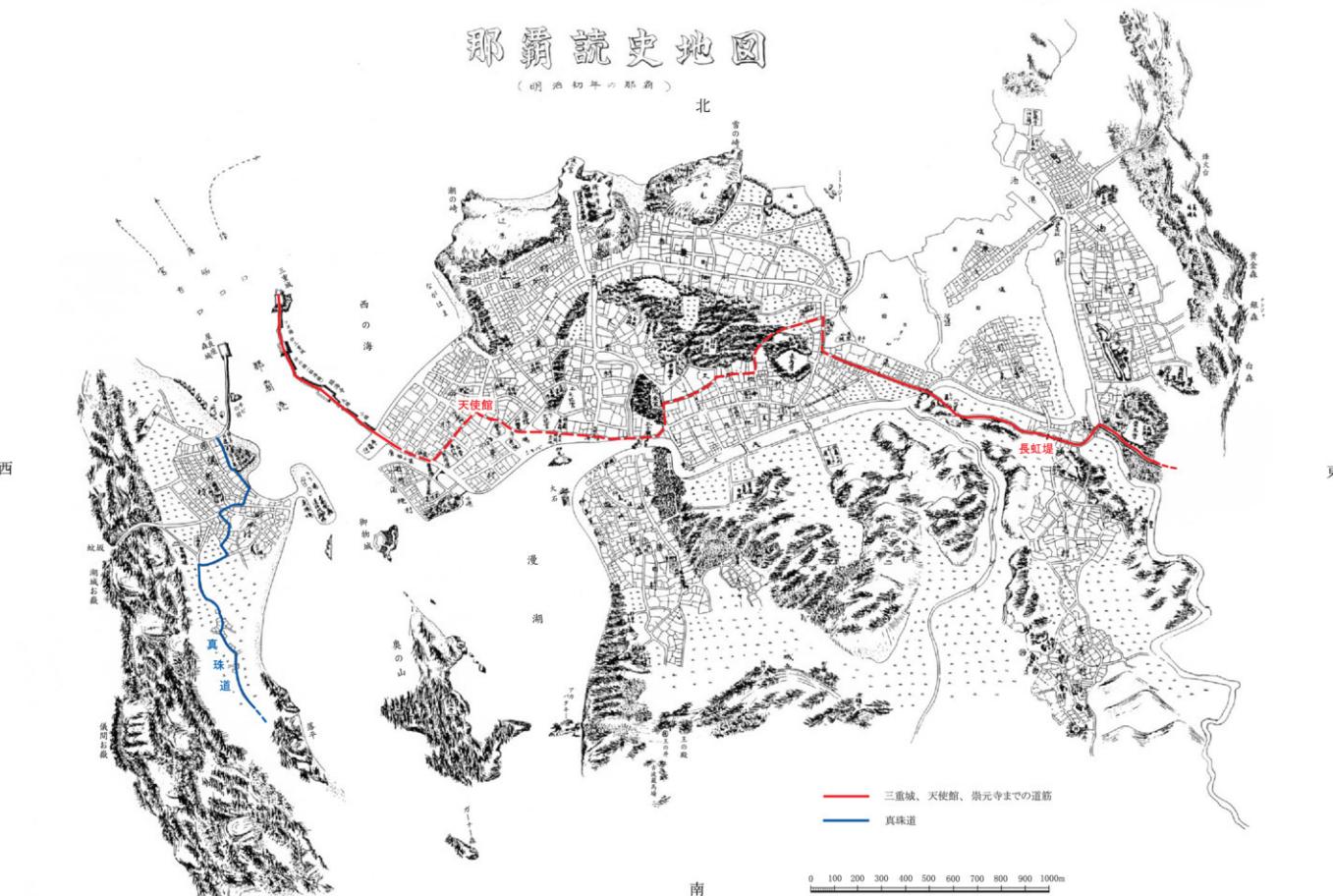


第4図 首里城跡地下に構築された1950年頃の米軍が作成した旧陸軍司令部壕の各坑道の位置断面図
〔首里城公園基本計画調査報告書〕1980年9月より撮影)

那覇読史地図

(明治初年の那覇)

北

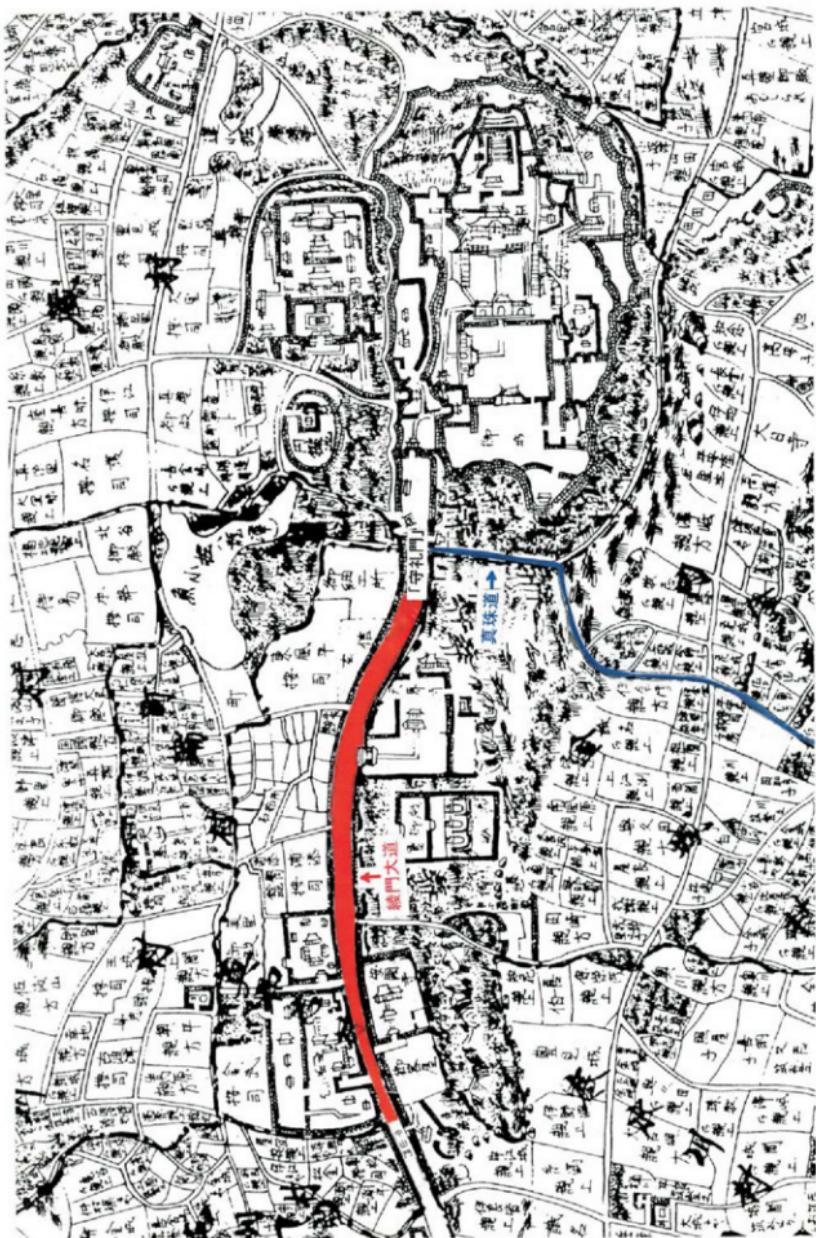


第5図 明治初年の那覇（嘉手納宗徳氏作成の『那覇読史地図』に那覇港までの道程を加筆）

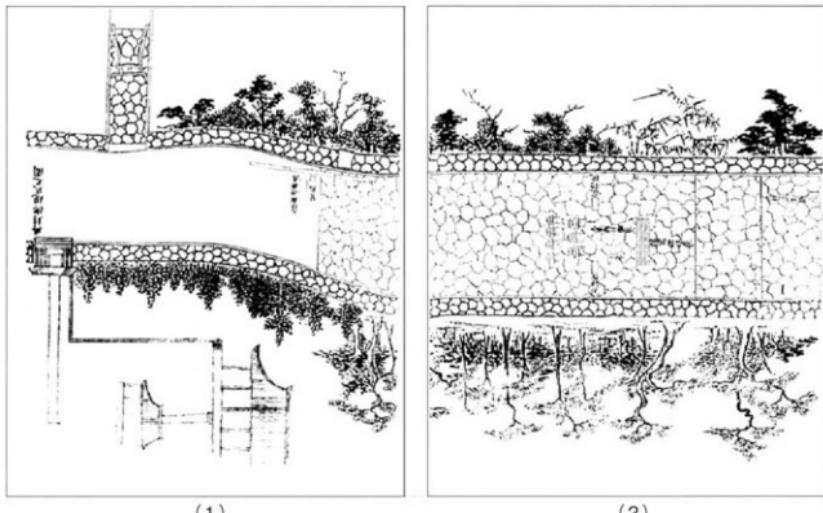
※凡例のスケールは、平成8年3月の那覇市都市計画部都市計画課製作の「那覇市全國(1/10000)」より、三重城～浮橋の縫(崇元寺の右下)の直線距離 2730mを基本とした。



第6図 首里古地図 ※首里古地図（嘉手納宗徳氏製作）に掲示した凡例のスケールは、平成8年3月の那覇市都市計画部都市計画課製作の「那覇市全図（1/10,000）」より、
弁ヶ嶽入口～現在の茶湯崎橋（指幅橋）までの直線距離 2840mを基本とした。



第7図 首里古地図（嘉手納宗徳氏製作）拡大



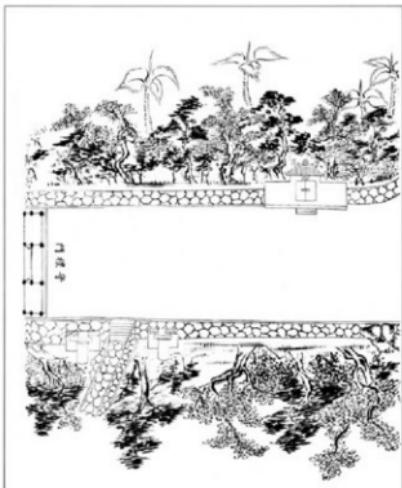
第8図 冊封御規之時守禮門并御城御座之図1（沖縄県立博物館・美術館収蔵）

まだまみなどひもん
「真珠淡碑文」（眞珠道の西側に建立されたため、「石門の内のひもん」とも称す）があった。起点部分からいしもん　いのり
南へ首里城木戸門及び西のアザナから西に40～60m程度、下った場所を「眞珠道」が通り、首里金城町の石畳道、眞玉淡（国場川の河口、那覇港）までの約4kmの石畳道建設と眞玉橋架橋が1522年に整備されたことが「眞珠淡碑文」に記されている。戦前に採取された「眞珠淡碑文」の拓影から、その内容を一部抜粋すると「首里の工おきやかもいかなし天のみ御ミ事にはま玉ミなどのミちつくりはしわたし申候時のひもん　嘉靖元年ミつのへむまのとし四月九日きとのとりのへに（中略）このはし八くにのあんしけずのため又世の御さうせのためにねたてひかわ又とよくくす此　くすぐとミつかくこのために一はんのさとぬしへあくかへはへはらしまおぞい大きと　ちねんさしきわま玉はしおわたり下しましりともにかきのはなしにせいそろい（以下省略）」と記録されている。碑文内容の主旨からすると、眞珠道及び眞玉橋架橋は、一般の交通の利便に供するほかに、陸上防衛のため命により建設されたものであり、いったん事が起きた時は、首里の一隊と南風原・島尻大里・知念・佐敷の軍勢と合流し眞玉橋を渡り、島尻大里と共に那覇港南岸の垣花の地に勢揃いして外敵の侵入に備えたことが窺える。

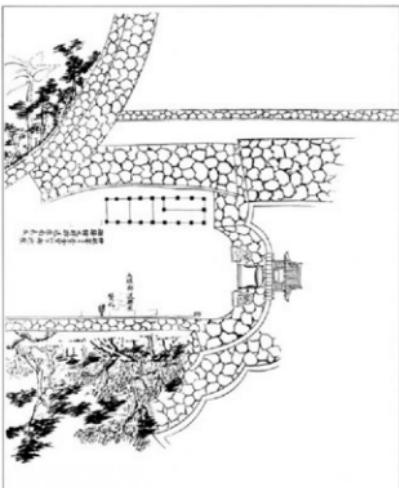
この眞珠道の終点は、1522年以後から1553年までの間は那覇港南岸の垣花であったが、1553年に「グスク」が普請されたことにより、「屋良座森グスク」まで眞珠道が延伸された。眞珠道の起点と終点の屋良座森グスクまで総延長は、約10kmの道のりとなった。

次に尚真王の後を継いだ尚清王代（1527～1555年）には南側外郭及び緒世門の整備と共に1553年に那覇港口の重要な防禦拠点であった「屋良座森グスク」が築城された。

琉球王国の重要な交易の拠点であった那覇港（眞珠淡）内には、公庫であった御物グスク〔築城年代不詳〕、15世紀中頃の琉球国図〔『海東諸国記』申叔舟 李氏朝鮮 1471年成立〕、16世紀初頭刊行に『寶庫』と記載〕、そして中国との貿易品の中でも重要品目であった磁器を貯蔵した磁器グスク〔築城年代不詳〕、屋良座森グスクの後詰として築城〕や豊見城グスクなどがあり、倭寇などの外敵から那覇港内への侵攻を阻止する必要があった。眞珠道の主な目的は、那覇港の守備にあり、倭寇対策の一環で整備された軍用道路として考えられて



(3)



(4)

第9図 冊封御規之時守礼門井御城御座之図2（沖縄県立博物館・美術館収蔵）

いる。

那覇港北岸（第5図）への道については、1451年に尚金福士によって安里橋（崇元寺橋）から那覇・久茂地普島地と若狭町新村浜の接点であったイビガマまでの約1kmの海中に石橋7座と長い堤を築き「浮道（長虹堤）」と呼ばれた海中道路を完成させた。また、那覇港南岸の屋良座森グスク（1553年）築城後に北岸には三重グスクが普請され、両グスク（砲台）の完成により琉球王国の生命線ともいえる那覇港口の防禦がより強固となつた。

この那覇港北岸への道筋は、中国明王朝の皇帝の使者であった冊封使が首里城に登城する際のルートとして考えられ（第2・5・6図）、冊封使が崇元寺前の道から大道・坂下を経由して中山門、そして守礼門を通って首里城に入場したものと考えられるようである。冊封使を迎える際には、新しく琉球王国の国王が守礼門前での儀式を執り行つたようである（第8・9図）。

首里城の第一の坊門である「中山門」から第二の坊門「守礼門」までの約450mの区間を綾門大道（幅員約12m）と称し、道の両脇には高い石垣（石積み）が連なつてゐるようである。また、道路の路面には、琉球石灰岩の石粉とネナシカヅラの汁を揉いて敷き詰めて固めたり、或いは香粉（線香の原料となるタブノキの皮を粉にしたものを石粉に混ぜるなどの特殊な材料を石粉に混ぜた舗装材を使用したと伝えられている。舗装材に“香粉”を使用した為、綾門大道を別名“香粉道”とも称された。正に綾門大道は琉球王國第一の道路であった。

注文献

註1. 當眞嗣一・上原静「首里城正殿の調査」『文化課紀要』第4号 沖縄県教育委員会 1987年3月。

註2-a. 那覇市文化財調査報告書 第42集『天界寺跡・首里城経路事業に伴う緊急発掘調査』1999年3月。

b. 那覇市文化財調査報告書 第43集『天界寺跡・首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査』2000年3月。

註3. 那覇市文化財調査報告書 第18集『御趣上所』1991年3月。

第3章 調査の概要

第1節 調査経過

真珠道路の発掘調査は、平成15・16年度が首里城西のアザナから西側へ40～50m下った斜面地及び県道49号の歩道と道路部分の調査を実施した。平成17年度より、綾門大道南側石塙延長部分及び真珠道の起点部分に所在した「眞珠湊碑文」台座跡の位置確認を目的に実施し調査の結果、台座跡が確認された。

平成18年度より守礼門の東側から園比屋武御嶽までの未調査地区を複数年度（平成18・19年度）で発掘調査を実施することで、県土木建築部都市計画・モノレール課、県教育庁文化課、県立埋蔵文化財センターの三者間での調整を終えた。当該地域は、守礼門より東側の園路部分が国指定史跡首里城跡の指定地内にあることから国（文化庁）への現状変更申請の手続きを必要としたため、県立埋蔵文化財センター所長名で当該年度と平成19年度調査予定地に含めた形で申請をおこない、文化庁内部での慎重な審議・審査を経て、同年7月21日付で現状変更申請の認可が下りてから実施した。

平成18年度の調査は、守礼門南東側の園路南半分と過年度に検出された「眞珠湊碑文」台座跡及び周辺の試掘調査を実施した。事前準備（プランターの移設・仮掘い）を含めて7月20日から10月3日（実勤日数50日）まで実施した。調査の結果、綾門大道南側石塙の延長部分で石塙の根石と、これに附属する排水溝が検出されたこの石塙の根石や排水溝に擦り付くような形で南北方向に直角に折れるような状態で真珠道の起点部分が検出された。真珠道の舗装面とみられた石敷き（石畳）の大半は戦災により既に破壊されていた。

平成19年度の守礼門北東側の園路北半分の調査は、平成19年7月2日から9月26日（実勤日数62日）まで実施した。この調査では最下層より掘建柱住居跡や綾門大道を整備前に埋納めた地鎮具とみられる青銅製鏡などが発見された。

第2節 調査区の設定

調査区の設定は、平成10（1998）年～平成12（2000）年度の三カ年間に亘って発掘調査を実施した綾門大道跡の残存するグリット鉄（測量鉄）であるスー20・セー17を確認しながら当時作製したグリット入りの地形測量図を基本にしながら測量光波測量（トランシット）で守礼門手前のシーアー13を復元したが、シーアー12のグリットを設定する段階でシーライン上に守礼門の二番目の支柱を標準化した為、グリットの設定が困難となった。これにより再度、平成10年度のグリット設定図を基にして遺跡東側の首里城歓会門よりのスー10の復元を行ってから調査区の中心にスー11を復元し、新たにスー12、セー11のグリットを設定した（第12図）。水準高及び座標系は、平成16年度に測量委託を行った成果から調査区に近いシーアー10に仮座標と、水準点を調査区内のスー11にも仮座標を設定後に、歩道西側縁石に設置されていた「都市再生街区基本調査 国土交通省」の金属鉄にも座標を設置した。平成19年度に上記、グリットの座標や標高について再確認兼ねた測量を実施した結果、シーアー10（X=24,174.815, Y=21,691,292, H=112,730m）、スー11（X=24,171,999, Y=21,677,434, H=113,419m）、都市再生街区基本調査 国土交通省 の金属鉄（X=24,172,078, Y=21,685,118, H=113,164m）となった。グリット名は、東から西方向に算用数字の9・10・11・・・を、北から南にはカタカナのサ・シ・ス・セ・・を冠した。グリットの標記方法はサー9、シーアー10などとした。なお、グリットの規模は10m×10m四方である。

参考及び引用文献

- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第13集『綾門大道跡・首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター2003年3月。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集『真珠道路・首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（1）』沖縄県立埋蔵文化財センター2006年3月。
- ・金城亀信「眞珠湊碑文跡の発掘調査概要・首里城公園発掘調査綾門大道地区・」「首里城復元期成会会報」第24号2006年7月10日。
- ・金城亀信「眞珠湊碑文台座跡と真珠道路の発掘調査概要・首里城公園発掘調査真珠道・綾門大道地区・」「首里城復元期成会会報」第25号2007年7月10日。



平成 19 年度 調査区近景

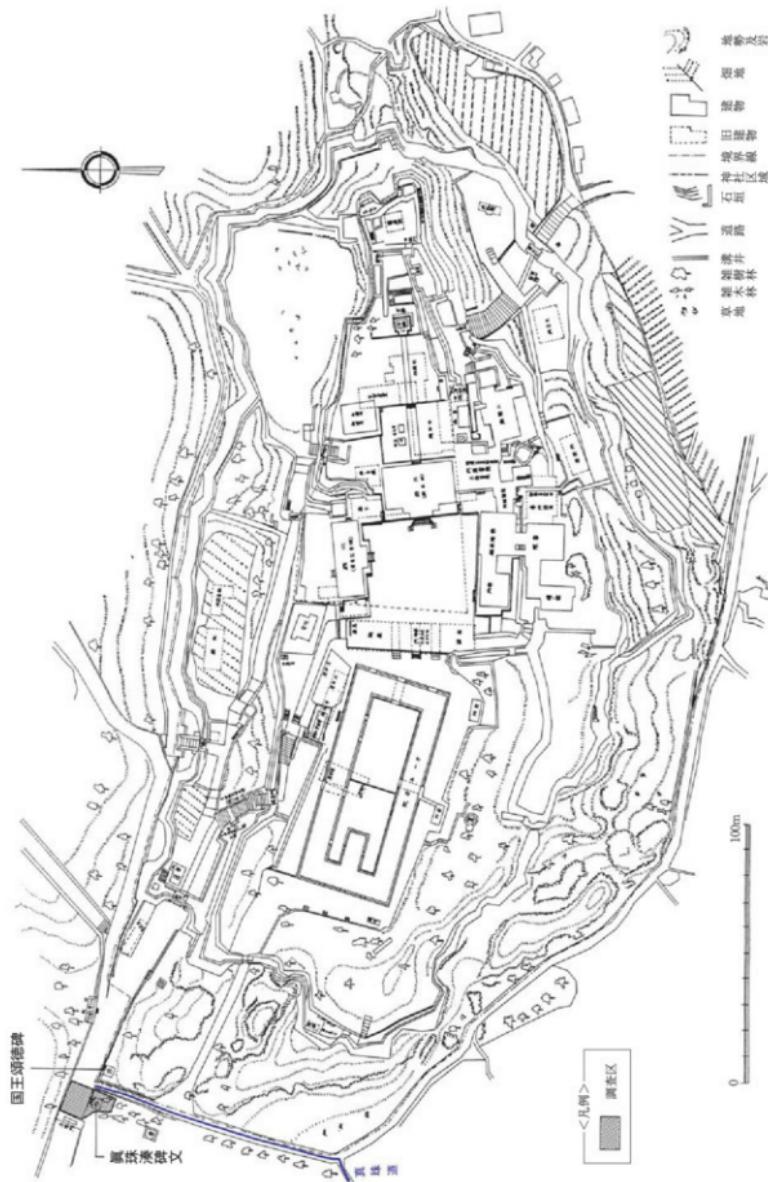


平成 18 年度 調査区遠景

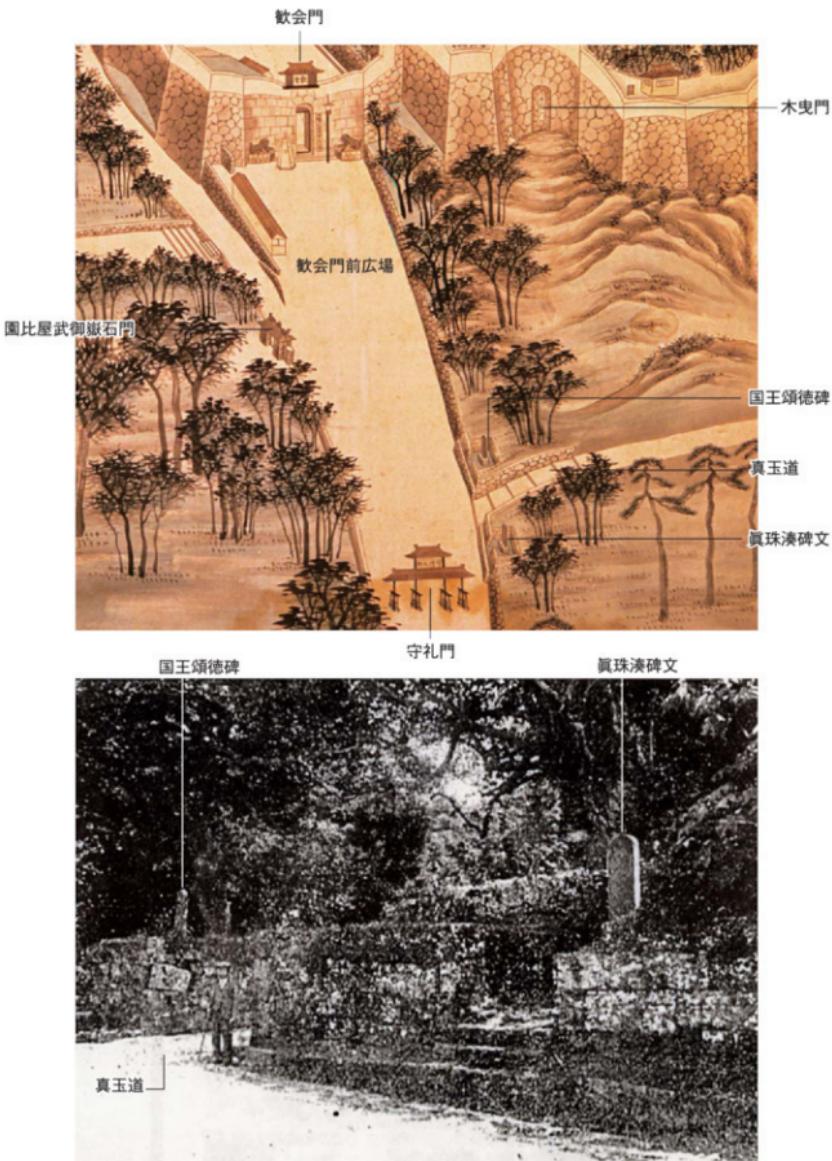


平成 18 年度 真珠漆碑文台座跡近景

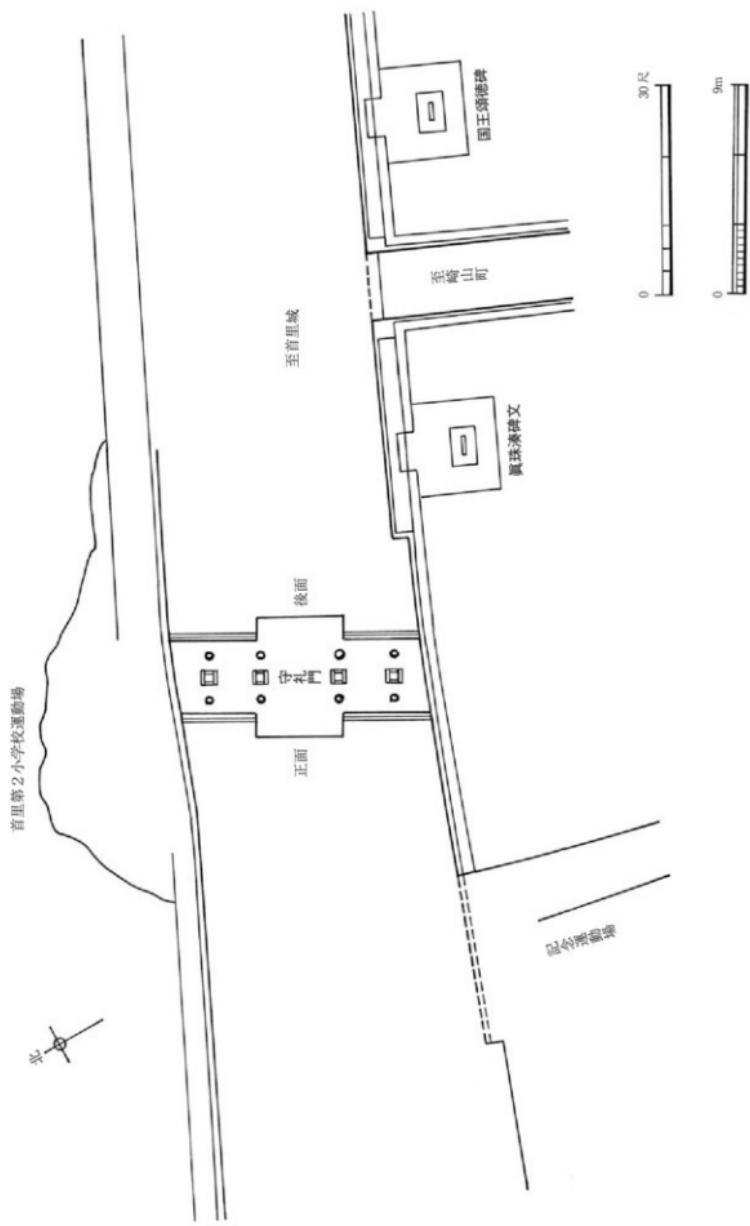
図版 1 平成 18・19 年度の発掘調査によって検出された遺構の遠近景



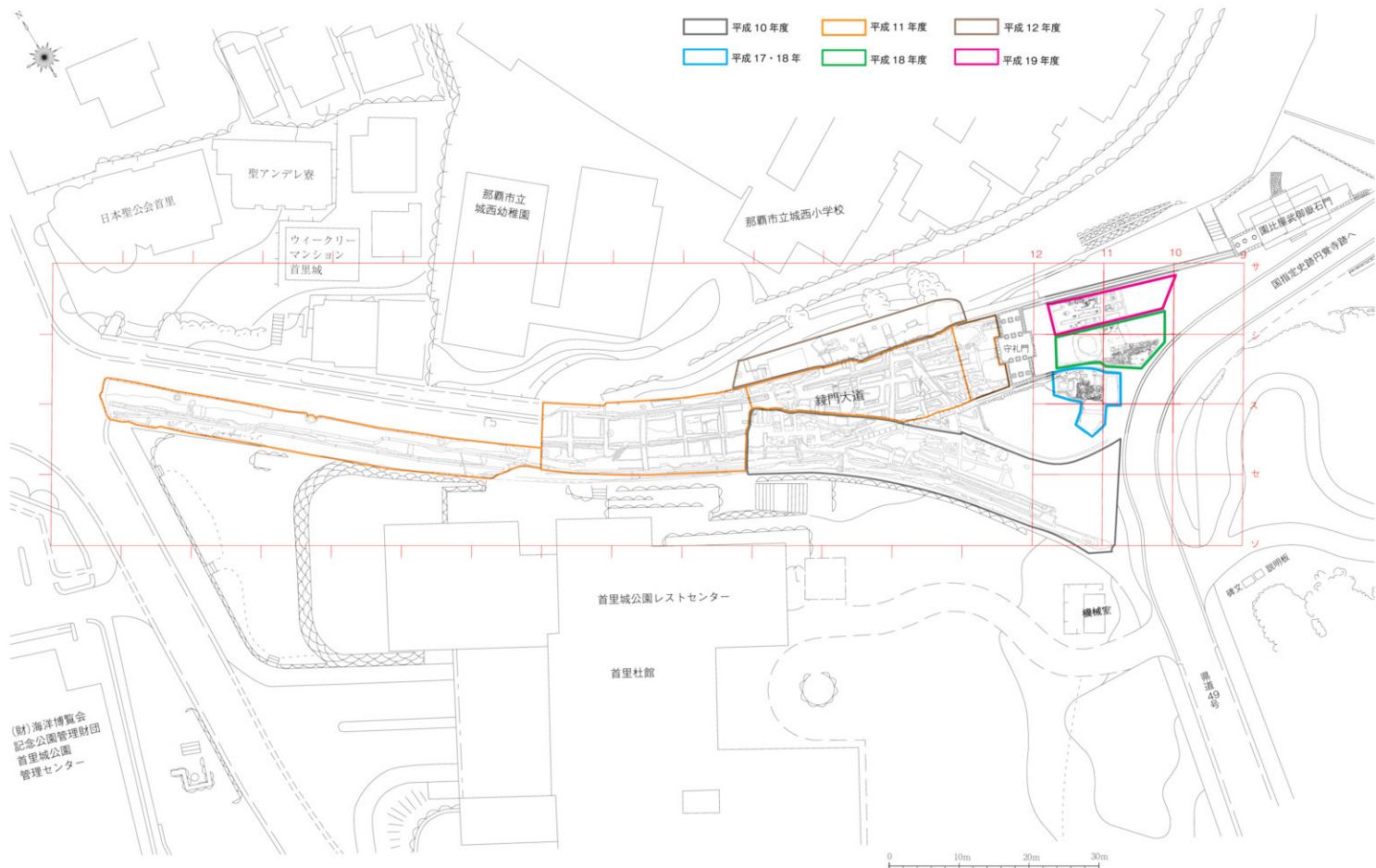
第10図 首里城平面図（昭和6年頃）に調査区と真珠道を表示



国版2 上段：「首里旧城之図」査丕烈 筆明治27年頃作製（沖縄県立博物館所蔵）
下段：首里城復元期生会刊行の「国王頌徳碑・真珠湊碑文復元事業報告書」(2006年2月) 収録の「昭和7、8年頃の国王頌徳碑・真珠湊碑文」を許可後に複写掲載。



第11図 昭和11年10月～12年5月に作製された守礼門解体修理時の周辺状況図面
 (「沖縄県有形文化財 旧首里城守礼門保存修理工事報告書」沖縄県教育委員会 1993年より)に加筆。



第12図 グリッド配置図及び年度別発掘調査区域

第4章 遺構と層序

第1節 平成18年度

a. 遺構

平成17年度にスー11グリット内で発見された「真珠漢碑文」台座跡（半分弱）に設けた上層観察用の駐を平成18年度に畦の除去や台座跡周辺への試掘場を設定して発掘調査を実施した。その成果については、既に報告書が刊行されているので参照されたい。

ここでは守礼門南東側（南路南半分）で確認された遺構（第12・13図）について、その概要を記す。

スー10グリット内から綾門大道南側石塙の延長部分から琉球石灰岩製の石塙の根石及び栗石と、これに附属する排水溝が検出された。これらの石塙の根石と排水溝（残存最長7m、溝幅14cm～25cm、深さ20cm）に擦り付けられるように東南方向に直角に折れるような形で真珠道の起点部分が検出されている。真珠道跡の幅員は、残存する両脇の縁石間が340cm（二間弱）を計測した。確認された真珠道は、現在の南路上より深さ1m前後の位置から検出されている。真珠道起点部分の舗装面であった石疊（綾門大道に附属する排水溝と真珠道の西側排水溝の縁石や底石などが残存）の大部分が既に戦災で破壊されていたが、真珠道の起点部分は、地山のシルト質泥岩及びその風化土壤を緩やかな傾斜を付けて形成し、その後に石灰岩疊を敷いて、その上から敷石を置いて傾斜のある石疊として施工したものとして考えられた。

次にシ-10グリット内からは綾門大道の舗装面と同じ漆喰溜りがトレーンチ^❶から検出された。舗装面そのものは検出されていないが、舗装面の漆喰が砕けて一篇所にまとまった状態のものとして考えられた。

その他にス・シ-11グリット内から砲弾炸裂痕、いわゆる“艦砲の穴”が発見された。その規模は、東西が4m10cm、南北4m80cm、深さ1m10cmを測った。この艦砲の穴は、米軍が首里城地下や守礼門の周辺に構築した旧日本陸軍の32軍司令部壕（第3・4図）を集中的に攻撃したことを示す重要な構造とも解釈できる。

この位置に艦砲射撃によって発射された砲弾が着弾し、近くにあった「真珠漢碑文」が爆発の際の爆風や砲弾片により四方へ飛び散って破壊されたものとして考えられた。

この艦砲の穴は一時期、米軍が首里城を占領後に日常排水を流した穴であることが調査の結果判明した。これは発掘された綾門大道の南側石塙に付随する排水溝直上から水道管が検出された事と排水溝内から出土したレンガには、陰刻で上段に「A」、下段は「T K」と印刻されたものが確認された事による。

b. 層序

平成18年度の調査区であるシ・スー10・11グリッド内で確認された層序（第15図・第1表）は、大半が砲弾炸裂痕や戦後の道路整備などの擾乱を受けていて不安定な層が多い。安定した層位は、スー10グリット内の中東側の下位で辛うじて、綾門大道南側石塙の延長部分から琉球石灰岩製の石塙の根石及び栗石、石塙に附属する排水溝、真珠道起点部分が確認されている。その他、僅ながらシ-10グリット内からは綾門大道の舗装面と同じ漆喰溜りが確認されている。

調査区内のシ・スー11グリッドは、遺構の項でも記したようにアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦で米軍艦船の艦砲射撃によって発射された砲弾が着弾・爆破した砲弾炸裂痕が確認されている。この砲弾炸裂痕からは、米軍が廃棄したドラム缶や守礼門の屋根瓦（琉球王国王家の家紋である「三巴紋（俗称：「左御紋」）」が入った鳥糞瓦、昭和十二年銘入り鬼板瓦など）及び建築部材、守礼門の礎石、「真珠漢碑文」の一部などが混在し、擾乱を受けていた。

層序については、隣接する平成19年度の層序との整合性を図る必要があった。基本的に両調査区の大部分が過去の路盤造成や戦時中の砲弾炸裂などで擾乱を受けてはいるが、両調査区の層序の検討と整理をおこなった結果を第1表と第2表に示した。なお、平成18・19年度の層序の色調や特徴などについては、前述の表中及び第15・16・18図に示した。

ここでは両地区的層序を便宜的に層位を整理する目的で、各壁面より確認並びに観察された路盤材や客土などを基にして綾門大道の整備時期から現代までの造成時期を暫定的に第I期から第IX期までの9時期に暫

定的に整理を試みた。今後、近接地域内での発掘調査によっては時期の変動は否めないが、将来の発掘調査に備えての標準層序、或いは指針や参考資料となるように作成した。その概略を以下に記す。

第Ⅰ期（2000年以降～2007年）：

九州・沖縄サミット閉会後の2000（平成12）年7月23日以降から2007（平成19）年現在までの園路整備に伴う造成路盤及び舗装路面の時期。

第Ⅱ期（1986年以降～2000年頃）：

1986（昭和61）年11月28日付けで「沖縄復帰記念事業として行う都市公園の整備」（沖縄の本土復帰を記念する事業の一環として、首里城跡地の約4haの区域を沖縄記念公園首里城地区として整備する）について閣議決定がなされた1986年以降から2000（平成12）年7月21日（金）～23日（日）までの三日間に亘って開催された九州・沖縄サミットまでの時期。なお、九州・沖縄サミットに出席したドイツのゲアハルト・シュレーダー首相への配慮として首里杜館北側に接する練門大道から園比屋武御嶽までの園路の勾配を緩やかにするための嵩上げ工事と首里城跡の西のアザナに木製の階段とストローブが取り付けられた。

第Ⅲ期（1972年以降～1986年頃）：

1972（昭和47）年5月15日付けで沖縄県が本土に復帰した日以降から1986（昭和61）年11月28日付けで「沖縄復帰記念事業として行う都市公園の整備」について閣議決定をおこなった時期。

第Ⅳ期（1958年以降～1972年頃）：

1957（昭和32）年8月1日起工し、1958（昭和33）年10月15日に竣工した首里城守礼門復元以降から沖縄県が本土に復帰した1972（昭和47）年頃までの時期。

第Ⅴ期（1945年以降～1958年切）：

アジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦（1945年3月26日の鹿良間諸島への米軍上陸から琉球列島を守備する全日本軍が無条件降伏文書への調印をおこなった9月7日までの時期）終結の1945年9月7日以降から首里城守礼門復元された1958年頃までの時期。

第Ⅵ期（1522年以降～1945年切）：

琉球国王尚真王（1465年～1526年）が国場下流域及び那覇湊を倭寇などの外敵から守備する目的で守礼門脇の真珠道の整備と真玉橋の橋架を記念した記念碑である「真珠湊碑文」を建立した1522年以降から沖縄戦が終結した1945年9月7日までの時期。

第Ⅶ期（1519年以降～1522年頃）：

尚真王（1465年～1526年）の土命を受けた八重山竹富島出身の役人であった西塘が1519年に築造した園比屋武御嶽石門の創建時期から「真珠湊碑文」が建立された1522年までの時期。

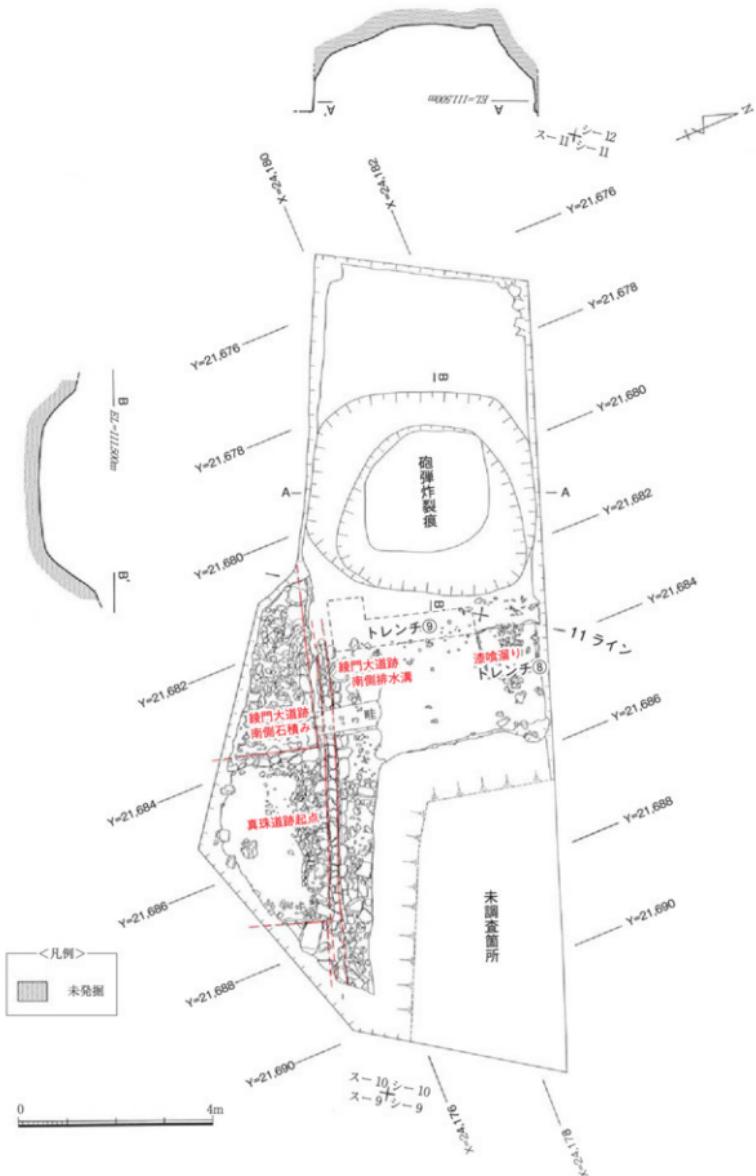
第Ⅷ期（1428年以降～1519年頃）：

琉球国工尚巴志（1372年～1439年）が1428年に首里城第一の坊門であった中山門を創建した時期から園比屋武御嶽石門が創建された1519年までの時期。

第Ⅸ期（1390年代以降～1428年頃）：

平成19（2007）年度の発掘調査で下層より検出された掘建柱住居跡に伴う屋内炉から出土した陶磁器類が廃棄された14世紀終末時期から中山門が創建された1428年までの時期。

次に真珠道跡の起点部分が調査区スー10南東隅から真珠道跡の残存する石敷き（石登）の一部や排水溝の繊石及び底石などを参考にして、層序で確認された壁面にみられる地山の第7層（シルト質泥岩の風化土壌。俗称：クチャ）が南側を頂点に北方向へ緩やかな傾斜を付けた切土と判断された状況と地山直上に残存する石敷き（石登）の一部からある程度は、真珠道の起点部分が復元が可能となった。



第13図 平成18年度遺構平面及び砲弾炸裂面



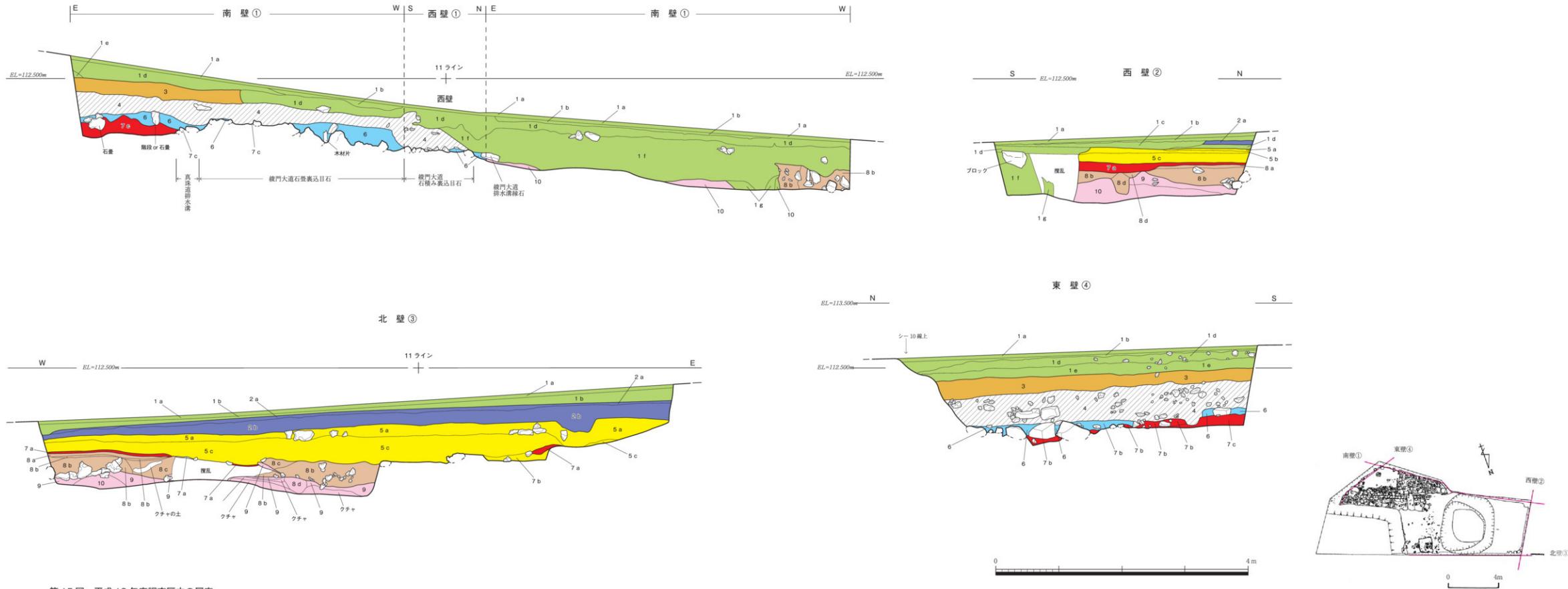
図版3 上段：平成18年度 綾門大道南側石積み延伸部分の排水溝と真珠道の起点（左側）部分の
検出状況（東側より望む）
下段：同上の遺構を西側より望む



第 14 図 平成 18 年度遺構の平面及び断面と漆喰溜りの北壁層序

第1表 平成18年度調査区の層序観察一覧

	時期	層序	土色	備考
I期	2007年現在	1a	灰色のアスファルト	舗装面
		1b	小礫(本部石灰岩)混じりのセメント	造成路盤
		1c	黄色混練土層	
		1d	赤色混練土層 褐色混土層 黄色混土層 黄色混練土層	
		1e	褐色混土層	
	2000年以降	1f	灰褐色粘質土層	砂、礫が少しまじる
		1g	灰褐色土層	擾乱(一部、白砂が四角く堆積)
		2a	黄色白色のアスファルト	サミット 舗装面
II期	2000年 (G8沖縄サミット) ↓	2b	黄色混土層	小~拳大の礫が混じる
		2c	黄白色混土層	造成路盤
	1986年以降	3	黄白色混土層	
III期	1986年頃 ↓	4	茶褐色混練土層	
	1972年以降			
III期とIV期の間				
IV期	1972年頃 (本土復帰) ↓	5a	灰白色混土層	造成土
		5b	灰白色混土層	細かい礫混じり
	1955年以降	5c	茶褐色~灰褐色混土層	小礫が混じる
V期	1958年頃 ↓ 1945年以降	6	茶色混砂土層	小さい礫まじり 面取りされた人頭大の礫を含む
		7a	黄褐色混土層	小礫の混じる層・コーラル層 H19年度と同様に黄色混土層を →『灰褐色混土層』に変更
VI期	1945年(終戦)頃	7b	青灰色混土層	青味が強いクチャで、 ほとんどの礫がここに入る
		7c	地山:青灰色粘質土層	固めで、橙色を呈する純粋なクチャ
		8a	灰褐色珊瑚土層	(擾乱と爆弾で一部切られている)
	1522年以降 (1522年:真珠添石碑建立) ↓ 1519年以降 (1519年:園比屋武御嶽 石門創建以降)	8b	赤褐色混土層	粘質性のある本来の赤土・拳頭混入および 10~20cm大のやや大きめの礫を含む
		8c	赤褐色混土層	部分的に堆積・後世の擾乱
		8d	橙褐色混土層	やわらかい砂混じりの土
			暗褐色土層	ピット。含土。
VII期	1519年頃 (1519年:園比屋武御嶽 石門創建以降) ↓	9	茶褐色混土層	
			灰黄色土層	シルトのブロック混じり
	1428年以降 (1428年:建國門 (中山門)を創建以降)	10	茶褐色粘質土層	シルトのブロック混じり 南壁②に見られる③層は、後世の擾乱かと思われる
VIII期	1428年以降 (1428年:建國門 (中山門)を創建以降) ↓ 1390年代	—		※VIII期は平成18年度の層序には確認できなかった
新生代	新第3紀・中新世 (5万年前) ↓ 第四紀・更新世 (1万7千年頃)	11	地山:灰褐色粘質土層	シルト質泥岩の風化土壌。 部分的にシルトのブロックが混入。



第15図 平成18年度調査区内の層序

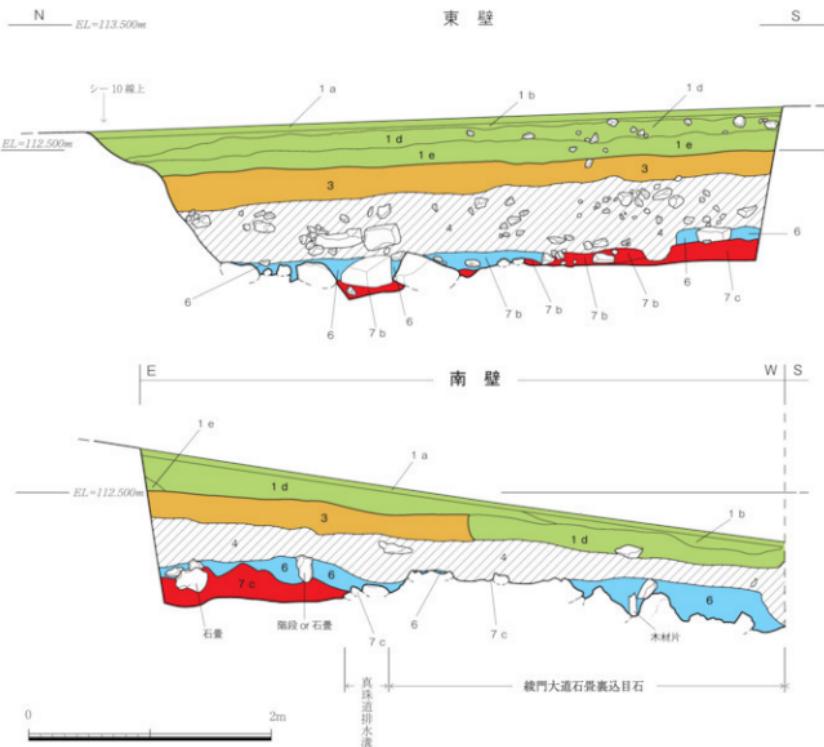
真珠道起点部分の復元に際しては、沖縄県立博物館・美術館収蔵の1894（明治27）年頃に森玉烈が描いた図版2の『沖縄縣琉球國首里舊城之圖』や沖縄県教育委員会1993（平成5）年3月刊行の『沖縄県有形文化財田首里城守門保存修理工事報告書』（註1）に掲載された第11図などを参考にして第16図を作製した。

真珠道起点部分の傾斜角度をスー10の東壁（第16図）から求めるに6度と緩やかな傾斜である。この緩やかなスロープは、『沖縄縣琉球國首里舊城之圖』に描かれているように階段が6段取り付けられたようである。傾斜に階段を取り付ける例は、首里城歓会門から漏刻門に至る石段や奉神門に入る石段、そして離世門に入る石段などがあり、沖縄独特の技法として考えられている。真珠道のスロープ付きの石段も1936年～37（昭和11・12）年に守礼門解体修理された時点で文部技官・森 政三氏によって作製された平面図（第11図）には石段が描かれていない事から石段は1894年以降～1936年までの42年間の時期に消失しているようである。

註文献及び参考文献

註1. 沖縄県教育委員会「沖縄県有形文化財田首里城守門保存修理工事報告書」1993（平成5）年3月。

- ・外務省ホームページ「外交政策、沖縄／サミット関連情報（首脳会合）、G8九州・沖縄サミット、首脳会合日程」外務省ホームページ2008年12月21日現在。
- ・内閣府 沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所ホームページ「国営沖縄記念公園／首里城公園／公園の整備／専用サイト／国営沖縄記念公園首里城地区」2008年12月22日現在。



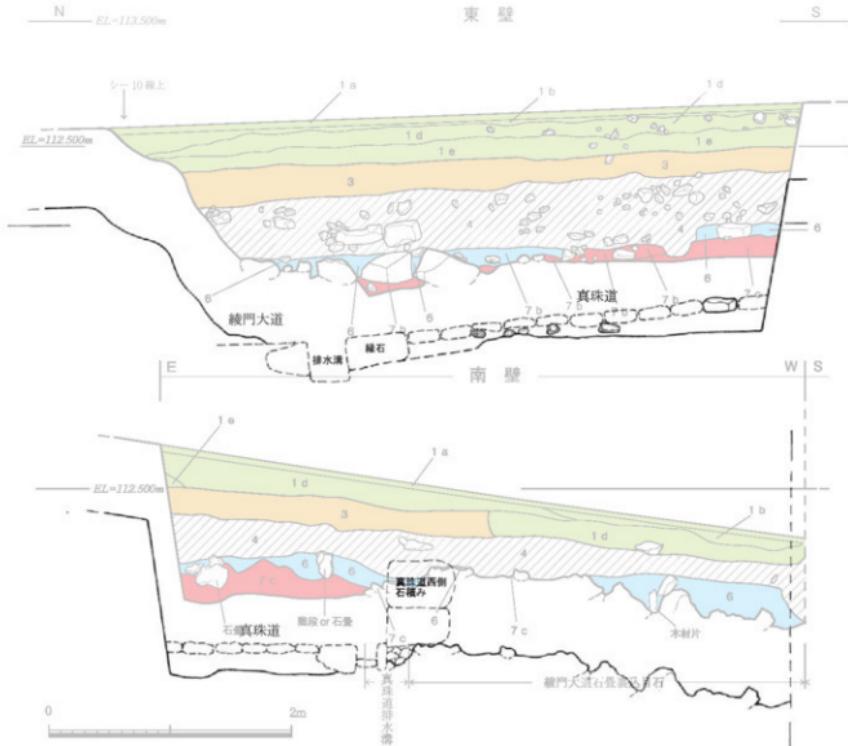
第16図 平成18年度調査区内の層序を基に推定復元を試みた真珠道起点部分

真珠道起点部分の復元に際しては、沖縄県立博物館・美術館収蔵の1894（明治27）年頃に査査が描いた図版2の「沖縄縣琉球國首里城之圖」や沖縄県教育委員会1993（平成5）年3月刊行の「沖縄県有形文化財旧首里城守礼門保存修理工事報告書」(註1)に掲載された第11図などを参考にして第16図を作製した。

真珠道起点部分の傾斜角度をスー10の東壁（第16図）から求めると6度と緩やかな傾斜である。この緩やかなスロープは、「沖縄縣琉球國首里城之圖」に描かれているように階段が6段取り付けられたようである。傾斜に階段を取り付ける例は、首里城歓会門から淵刻門に至る石段や奉神門に入る石段、そして御世門に入る石段などがあり、沖縄独特の技法として考えられている。真珠道のスロープ付きの石段も1936年～37（昭和11、12）年に守礼門解体修理された時点で文部技官 森政三氏によって作製された平面図（第11図）には石段が描かれていない事から石段は1894年以降～1936年までの42年間の時期に消失しているようである。

註文献及び参考文献

- 註1. 沖縄県教育委員会『沖縄県有形文化財旧首里城守礼門保存修理工事報告書』1993（平成5）年3月。
- ・外務省ホームページ「外交政策、沖縄／サミット関連情報（首脳会合）、G8九州・沖縄サミット、首脳会合日程」外務省ホームページ2008年12月21日現在。
- ・内閣府 沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所ホームページ「国営沖縄記念公園／首里城公園／公園の盛り／専用サイト／国営沖縄記念公園首里城地区」2008年12月22日現在。



第16図 平成18年度調査区内の層序を基に推定復元を試みた真珠道起点部分

第2節 平成19年度

a. 遺構

平成19年度の守礼門北東側（園路北半分）で検出された遺構（第12・17図）について、その概要を記すが、調査開始直後の路盤材除去作業中に調査区の北西隅から「L」状に折れながら調査区の中央をとおる鉄物製の水道管（直径25cm）が深さ1m～1m50cmの範囲内から露出してきたため、那覇市教育委員会経由で那覇市水道部へ水道管の取扱について現地確認を依頼した。

那覇市水道部職員による確認調査の結果、当該水道管は現在使用していない上水道管であることが判明し、鉄物製の水道管を切断して廃棄処理することになった。水道管の撤去と水道管敷設の際に使用した客土（石灰岩のコラル）やコンクリート（主に水道管を「L」字状に削曲させた部分で使用）を撤去した為、調査区中央部が深さ1m～1m50cmの範囲内で水道管敷設時の搅乱を受けている。

シーアー11グリットの下層にある第13層a-1面より掘建柱住居跡1棟（根固め石のある柱穴2基、石灰岩柱を利用した礎石1基）と住居跡に伴う炉跡7基、屋外炉1基が検出されている。掘建柱住居跡の根固め石のある柱穴2基の内、1基は調査区の西壁近くで検出されている。他の1基は調査区東側の11ライン近くで確認されている。この根固め石のある柱穴間の桁行の長さが4m60cm（二間半強）を測り、両者の中間に粗雑な琉球石灰岩棟を利用した礎石を配置している。この礎石の位置関係は、東側の根固め石のある柱穴から1m95cm（一間強）、西側の根固め石のある柱穴から2m65cm（一間半弱）にあたることから礎行を併用した二間半強の住居跡が推定できた。更に、この礎石より西半分の住居内部から礎跡が7基検出されている。掘建柱住居の東西軸については把握できたが、南北軸の南側への展開するであろう位置には既に艦砲射撃などによる砲弾の着弾と爆発によって尖われていた。当該遺構は、屋内炉跡内に廃棄された青磁片などから14世紀終末期～15世紀前半頃が推定される。この掘建柱住居跡内の東半分の床面から土色の異なる層が検出された為、検出された順にSK01～SK03までの三箇所を確認しが完掘の結果、地滑りなどによって落ち込んだ窪地を整地した事が判明した。地滑りなどの痕跡を示す部分は、第18図の11ライン南壁の東側（第13層a-1上面が50cm程度下方にずれている）と試掘坑3～4の東壁（第13層a-1上面が北側に深さ60cm程度下がっている）などで確認している。地滑りの可能性がでてきたため、調査区内の壁面や遺構検出面（掘建柱住居跡の柱穴1・2及び屋内炉跡2の検出面と屋内炉3～8の検出面の差が20cm程度ずついる）などを検討したところ全体的に北側へ傾斜し、特に調査区の北東側で地滑りによる陥没があったのではないかと推定された。

その他の遺構として、住居跡の検出面より上の層で綾門大道から東に延びる排水溝が第11層a-3から検出されている。この排水溝は、東西方向に途切れながらシーアー11グリットまで延びていて、検出された長さは6m50cmを測った。検出された排水溝と平成18年度の守礼門南東側の排水溝を比較すると、両者はほぼ平行して守礼門より東に延び、軸線も一致するが排水溝に使用された縁石の仕上げ成形が異なっていた。守礼門南東側の縁石は、概して切石の仕上げ成形が比較的丁寧に面取りがなされている。縁石は、切石の加工面が外側の長軸となるように外側を意識して溝と平行に設置したため、控えが短くなっている。北東側の縁石は、石灰岩棟を荒削りしたような粗雑な成形であり、外側の成形も難である。排水溝の縁石として設置する際は、溝と直角になるように控えの長い方を溝の内側にして設置したため、外側が短い。

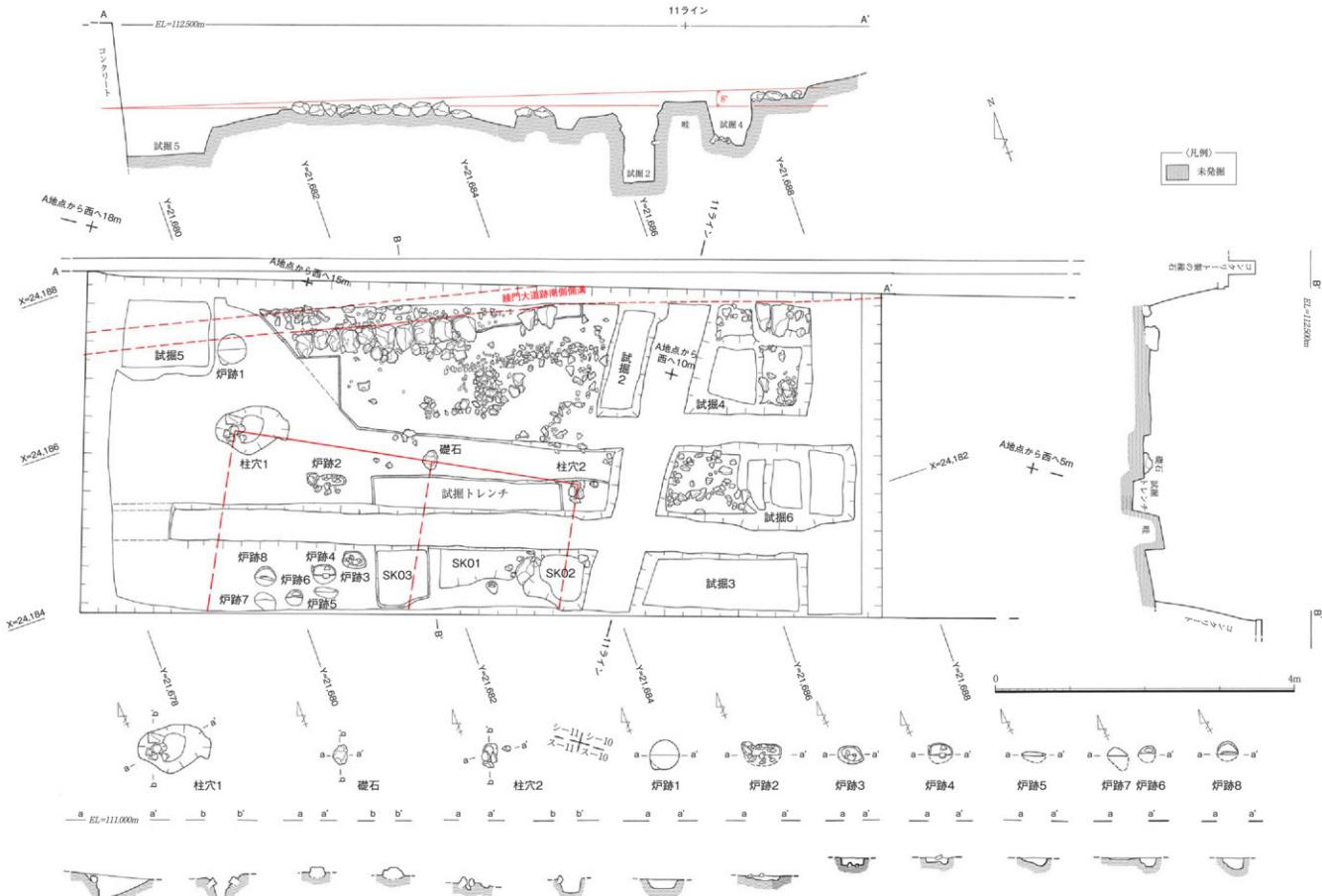
以上のような状況からすると排水溝の縁石の成形や縁石の設置方法の違いは、道替請の時期差に起因するようである。両排水溝の内側縁石間の直線距離（幅）を求めたところ5間～5間弱（8m50cm～9m）を測った。守礼門南東側検出の排水溝は、現地での位置確認をおこなったところ、排水溝の軸線が首里城歓会門脇の排水溝と接がっていくことが判明した。

参考及び引用文献

- ・全城島信「真珠湊碑文跡の発掘調査概要 -首里城公園発掘調査綾門大道地区-」『首里城復元期成会会報』第24号 2006年7月10日。

b. 層序

平成19年度の層序の色調や特徴などについては、第2表に呈示したので参照されたい。



第17図 平成19年度遺構の平面及び断面

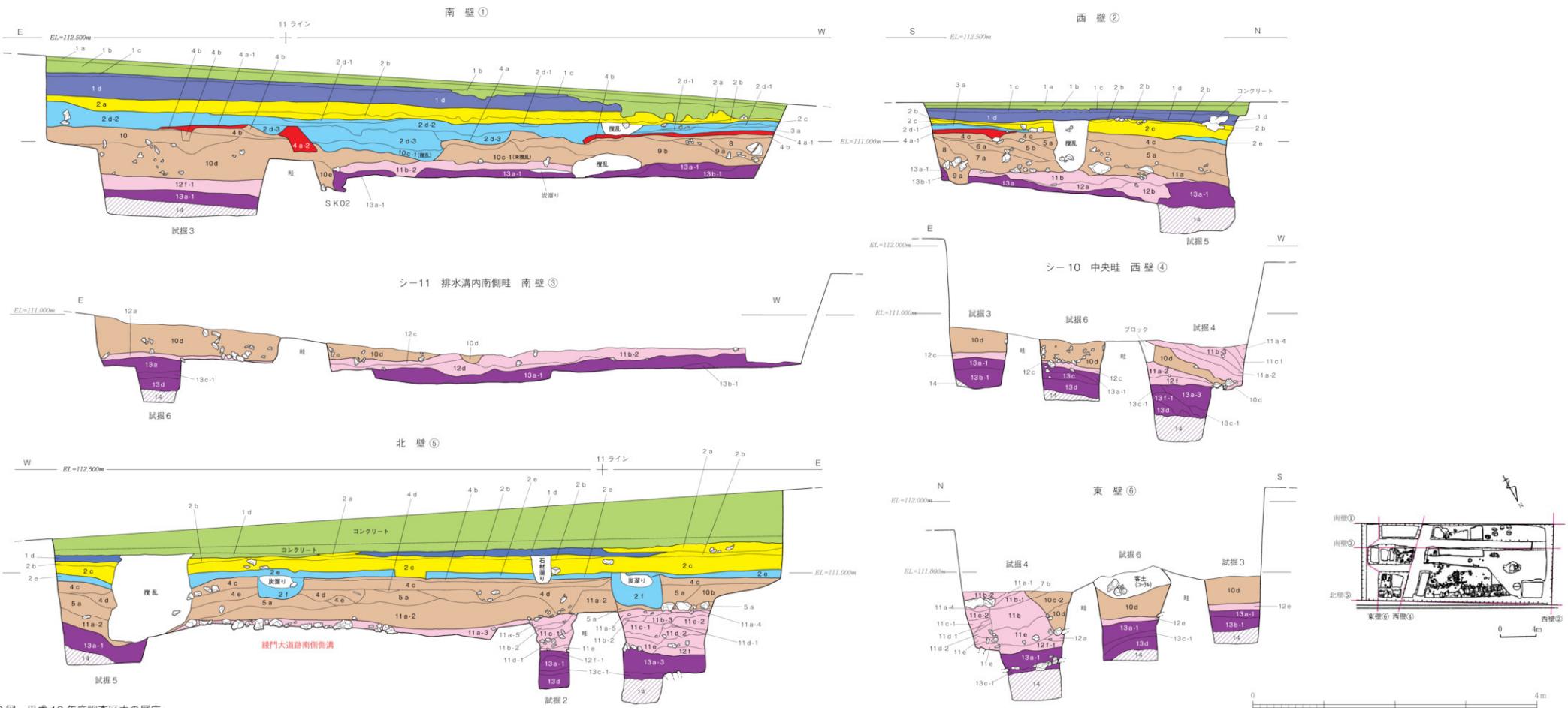
※柱穴・炉跡の断面図のレベルは、EL=111,000で統一した。



図版4 上段：平成19年度 綾門大道跡北側排水溝の延伸部分（右側）と掘建柱住居跡・炉跡を
東側より望む
下段：同上の遺構の一部を北側より望む

第2表 平成19年度調査区の層序観察一覧

	時期	層序	土色	説明
Ⅰ期	2007年現在 1	1a	アスファルト	舗装面。
	2000年以降 1	1b	小標(本部石灰岩)混じりのセメント	舗装路盤。
Ⅱ期	2000年 (古沖縄サモット) 1	1c	アスファルト	サモット時の舗装面。
	1988年以前 1	1d	黄白色混土層	造成路盤。
Ⅲ期	1988年以前 1		—	平成18年度の守礼門南東側に堆積。
	1972年以前 1		—	—
Ⅳ期	1972年以前 (本土化前) 1	2a	黄白色混土層	◆大津辺人、舗装面。
		2b	暗褐色土層	—
Ⅴ期	1958年以前 1	2c	灰褐色土層	小標。
		2d-1	褐色土層	造成。
Ⅵ期	1958年以前 1	2d-2	黒褐色混土層	細かい櫻。
		2d-3	赤褐色土層	シルトのブロック混入。
Ⅶ期	1945年以前 1	2e	泥炭化土層	シルトのブロック混入。
		2f	灰褐色土層	シルトのブロック混入。
Ⅷ期	1945年(昭和)以前 1	2g	泥炭化土層	細かい櫻。一部が鈍底状に堆積。
	1932年(昭和) 眞珠港石碑建立以前	3a	灰褐色土層	細かい櫻。
Ⅸ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3b	灰褐色表面層	土砂が混入。舗装面。
		3c	灰褐色土層	—
Ⅹ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3d	明黄色土層	砂質・細かい赤土ブロック混入。
		3e	赤褐色土層	赤土ブロック混入。
Ⅺ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3f	赤褐色土層	赤土ブロック混入。
		3g	黄褐色土層	—
Ⅻ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3h	黄褐色土層	細層。
		3i	黄褐色土層	粗粒。
Ⅼ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3j	黄褐色土層	—
		3k	黄褐色土層	—
Ⅽ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3l	黄褐色土層	—
		3m	黄褐色土層	—
Ⅾ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3n	黄褐色土層	—
		3o	黄褐色土層	—
Ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3p	黄褐色土層	—
		3q	黄褐色土層	—
ⅰ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3r	黄褐色土層	—
		3s	黄褐色土層	—
ⅲ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3t	黄褐色土層	シルトのブロック混入。
		3u	赤褐色土層	◆大津辺人。
ⅳ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3v	赤褐色土層	赤土ブロック混入。
		3w	赤褐色土層	シルトのブロック混入。
ⅴ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3x	赤褐色土層	石炭岩の破片が多く混入。
		3y	赤褐色土層	—
ⅵ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3z	赤褐色土層	人頭大津辺混入。
		3aa	赤褐色土層	—
ⅶ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3ab	赤褐色土層	—
		3ac	赤褐色土層	—
ⅷ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3ad	赤褐色土層	板岩下の土壁材。舗装土質相当。
		3ae	赤褐色土層	舗装土質相当。
ⅸ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3af	赤褐色土層	シルトのブロック混入。細層。
		3ag	赤褐色土層	カーボンシルトのブロック混入。道面。
ⅹ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3ah	赤褐色土層	等厚。
		3ai	赤褐色土層	等厚。
ⅻ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3aj	赤褐色土層	等厚。
		3ak	赤褐色土層	等厚。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3al	赤褐色土層	等厚。等厚。
		3am	赤褐色土層	シルト質の粘土層。等厚。
ⅾ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3an	赤褐色土層	シルト質の粘土層。等厚。
		3ao	赤褐色土層	シルト質の粘土層。等厚。
ⅽ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3ap	赤褐色土層	シルト質の粘土層。等厚。
		3aq	赤褐色土層	シルト質の粘土層。等厚。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3ar	赤褐色土層	シルト質の粘土層。等厚。
		3as	赤褐色土層	試験で確認。等厚。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3at	黄褐色土層	粘質・透水性弱い柱立柱。住居出面。
		3au	淡赤色土層	シルト質・灰泥人は僅か。開墾。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3av	黄褐色混土層	シルト質・開墾。
		3aw	綠褐色土層	粘質。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3ax	淡赤色土層	—。細間色土層がブロック状
		3ay	淡赤色土層	柱立柱。シルト質の粘土層。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3az	淡赤色土層	粘土質。
		3ba	黃土色土層	粘土質。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3bb	淡赤色土層	粘土質。
		3bc	黃土色土層	粘土質。
ⅿ期	1932年以前 (1932年:眞珠港石碑建立)	3bd	淡赤色土層	シルト質・灰泥の風化した土。
		3be	淡赤色土層	—
新世代	新第三紀・中新世 (5万年前) 第四紀・更新世 (1万7千年前)	14	地山・青灰色粘土層	シルト質泥岩の風化土層。



第18図 平成19年度調査区内の層序

第5章 出土遺物

平成18・19（2006・2007）年度の首里城跡守礼門東地区・真珠道跡起点及び周辺地区の発掘調査により出土した遺物は、第31表に示したように中国産陶磁器を主体にタイ産褐釉陶器及び半線（タイ産土器）、本土産陶磁器、沖縄産の土器及び陶器など、各地域の多様な陶磁器類と土器片が出土している。

その他、骨製のサイコロ、「為善最榮」と銘の入った青銅製鏡、沖縄戦で破壊された守礼門の屋根瓦（烏金瓦、「昭和十二年」銘入り鬼板瓦など）と建染部材及び碇石、「真珠淡闇文」破片、近・現代の磁器やガラス製品などの遺物も出土している。

本章では、上記の出土遺物を分類・整理して、各節毎に報告を行った。

第1節 青磁

中国産の青磁は総数93点の出土で、時期的には14世紀後半～15世紀前半頃に位置付けられる龍泉窯及び龍泉窯系の製品が大半を占める。器種は碗・小碗・皿・盤・水注・壺などが確認されているが、碗の出土量が圧倒的に多い。以下には各器種の分類概念を記し、個々の観察所見は第3表に呈示した。

1. 碗（第19、20図）

1は束口碗で、首里城跡では二階殿地区（沖縄県立埋文センター2005）に類例がある。2は砧青磁系とも称される薄手の直口碗で、外面に鶴彌弁文を描く。3～6は2に比して厚手の直口碗で、外面に鶴のない蓮弁文を描く。7～22は口縁部が外反するもので、口唇部は舌状を呈するものが多いが、玉縁状に肥厚するもの（8、15）もある。文様は体部両面に唐草文などを描くもの（9、10）、内面胴部に文様を描くもの（8、13）、内底に印花文を施すもの（7、14、21）などがある。

2. 小碗（第21図24）

腰部に丸みを持つ直口口縁の小碗で、底部形態は葵筒底と推定される。

3. 皿（第21図23、25）

23は口折皿又は外反皿の底部で、内底に印花文を施す。25は外反皿の口縁部である。

4. 盤（第21図26～28）

口縁部を外側に折り曲げる器形で、鶴彌口縁の端部を摘み上げるもの（26、27）と、口唇部を葵花状に成形するもの（28）がある。27は内面に範形りの蓮弁文を描く。

5. 水注（第21図29）

把手の基部が得られている。外面に兔書きの文様がみられる。

第3表 青磁観察一覧a

単位:cm

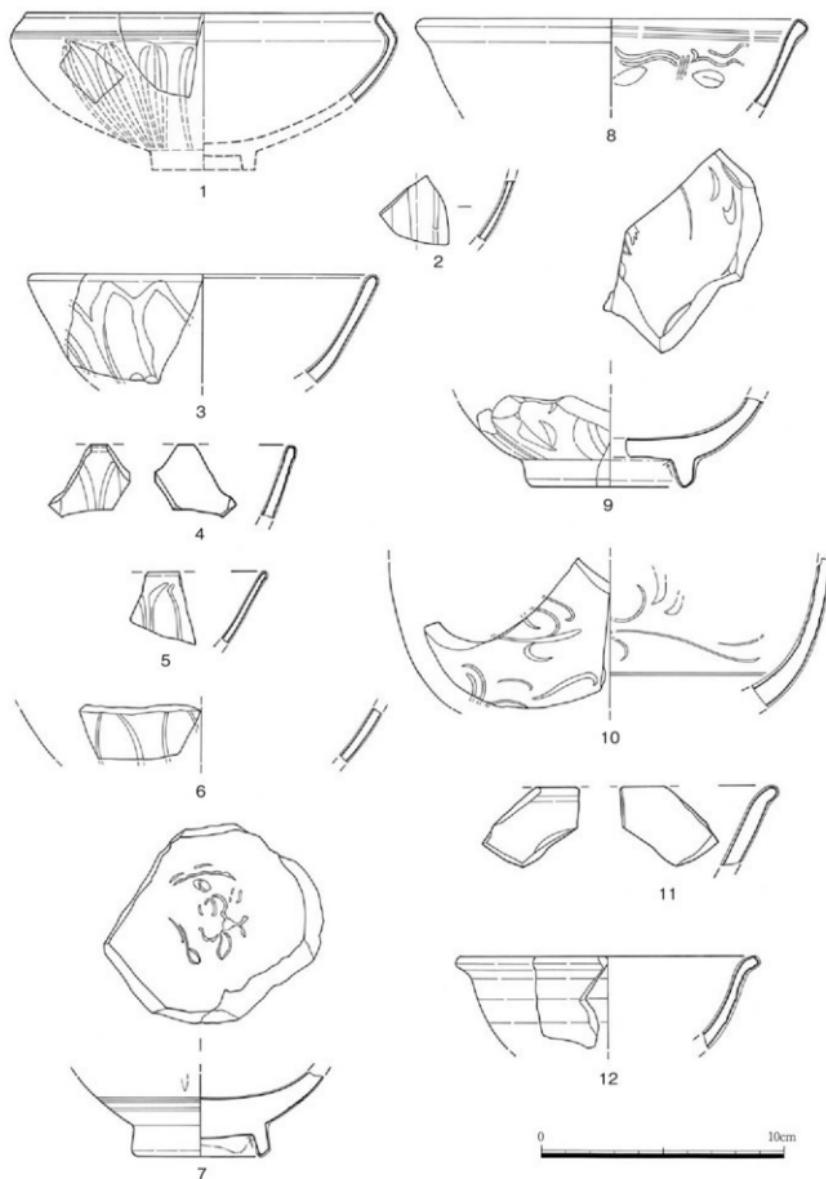
団	番号	器種	部位	口径	器高	底径	文様・成形	素地・混入物	釉色・施釉状況	年代	出土地
第19 回 ・ 回 35	1	磁	口縁部	14.6	—	—	外面に陰彌縁が数条あり、その下に鶴彌弁文を描く(開弁なし)。	灰白色の微粒子で緻密。	明緑灰色の釉薬を両面に施釉。	14c代	平成19 シ-11 南側 13層a
	2		胴部	—	—	—	外面に陰彌縁で鶴彌弁文を描くが、施釉が厚く不明瞭。	灰白色の微粒子で緻密。	緑灰色の釉薬を両面に施釉。	14c代	平成19シ-10 排水溝 毗南壁 11層b
	3		口縁部	14.4	—	—	外面に陰彌縁で蓮弁文を描く。外面に粗い貫入あり。	灰白色の微粒子で緻密。	緑灰色の釉薬を両面に施釉するが、全体的に灰が被る。	14c後半～ 15世紀前半	平成18 ス-10 トレン9
	4		口縁部	—	—	—	外面に陰彌縁が1条あり、その下に片切り彌で蓮弁文を描く。	灰白色の微粒子で緻密。	オリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～ 15世紀中葉	平成19 シ-11 炉跡1北側
	5		口縁部	—	—	—	外面に陰彌縁で蓮弁文を描く。両面に粗い貫入あり。	灰黄色の細粒子で緻密。	オリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～ 15世紀中葉	平成19 シ-11 2層d-3
	6		胴部	—	—	—	外面に陰彌縁で蓮弁文を描く。外面に石灰？、内面に茶褐色の溶着痕あり。	灰白色の細粒子で緻密。	オリーブ灰色の釉薬を両面に施釉するが、全般的に薄く灰が被る。	14c後半	平成18 ス-10 側溝内

第3表 青磁観察一覧b

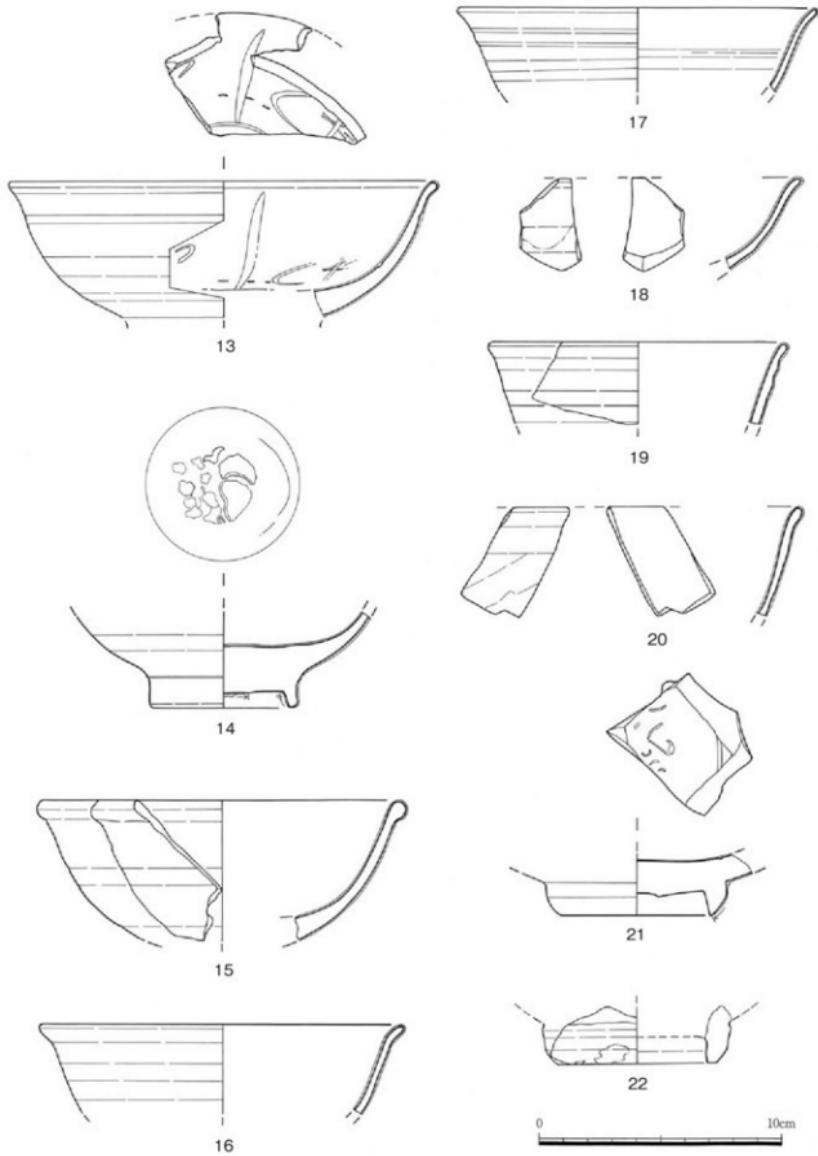
単位:cm

団	番号	器種	部位	口径	器高	底径	文様・成形	素地・混入物	釉色・施釉状況	年代	出土地
第 19 回 ・ 図 版 35	7	瓶	底部	—	—	5.2	内底に印花文(牡丹?)を施す。両面に細かい貫入あり。外底に焼台が一部付着。	灰白色の織粒子で微密。	灰オリーブ色の釉薬を内底から譽付まで施す。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-11 壁面 層位不明
	8		口縁部	16.0	—	—	内面に陰彫線が2条廻り、その下に型押しでマツ式蓮弁文を描く。両面に粗い貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	灰オリーブ色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-11 南側 灰塗94
	9	瓶	底部	—	—	6.3	外面上に片切の廻りのラマ式蓮弁文、内面上に片切の廻りの唐草文を描く。	灰白色の織粒子で微密。	灰黄緑色の釉薬を全面に施釉後、高台内面を蛇の目釉割ぎ。	14c後半～15世紀前半	平成19 シ-11 表剥ぎ
	10		胴部	—	—	—	両面に陰彫りの唐草文を描き、内面下位に陰彫線が1条廻る。両面に細かい貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	灰黄緑色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 北側 12層b
	11		口縁部	—	—	—	両面に石灰?が付着。	灰白色の織粒子で微密。	灰黄緑色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 北側 12層f-1
	12		口縁部	12.5	—	—	外面上に輪轉底が残る。両面に細かい貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	灰黄緑色の釉薬を両面に施釉。	14c後半	平成19 シ-11 排水溝内 11層b
第 20 回 ・ 図 版 36	13	瓶	口縁部	17.6	—	—	外面上に陰彫線が1条廻り、内面上に片切の刻花文を描く。外面上に輪轉底が残る。両面に粗い貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	灰黄緑色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成18 シ-10 レンジ9
	14		底部	—	—	6.1	内底に陰彫線が1条廻り、中央に印花文(牡丹?)を施す。外底に焼台が一部付着。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を全面に施釉後、高台内面を蛇の目釉割ぎ。	15世紀	平成19 シ-11 北側 11層a
	15	瓶	口縁部	15.2	—	—	両面に細かい貫入あり。	錦黄褐色の織粒子でやや微密。	灰オリーブ色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 排水溝内 南壁 13層a
	16		口縁部	15.0	—	—	外面上に輪轉底が残る。両面に細かい貫入あり。	灰白色の織粒子でやや微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 排水溝内 掘乱
	17		口縁部	14.8	—	—	両面に輪轉底が残る。両面に細かい貫入あり。	灰色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 13層a
	18	瓶	口縁部	—	—	—	外面上に輪轉底が残る。両面に細かい貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ黄色の釉薬を両面に施釉。外面上に釉割れあり。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 排水溝内 11層b
	19		口縁部	12.3	—	—	外面上に輪轉底が残る。	灰白色の織粒子で微密。	灰オリーブ色の釉薬を両面に施釉するが、全体的に灰が被る。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 南側 12層f-1
	20		口縁部	—	—	—	外面上に輪轉底が残る。両面に細かい貫入あり。	灰褐色の織粒子でやや微密。	灰オリーブ色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成18 ス-10 レンジ9
	21		底部	—	—	6.1	内底に陰彫線が1条廻り、中央に印花文を施す。両面に細かい貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を全面に施釉後、高台内面を釉割ぎ。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 排水溝内 掘乱
	22		底部	—	—	6.4	譽付両端を面取りする。	錦褐色の織粒子で軟質。	灰オリーブ色の釉薬を施釉後、譽付を釉割ぎ。	不明	平成19 シ-11 南側 13層a
第 21 回 ・ 図 版 37	23	皿	底部	—	—	8.0	内底に陽彫線が1条廻り、中央に印花文(蓮花)を施す。両面に粗い貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	灰黄緑色の釉薬を全面に施釉後、高台内面を蛇の目釉割ぎ。	14c後半～15世紀前半	平成18 ス-10 側溝 埋土
	24	小碗	口縁部	8.4	—	—	外面上に輪轉底が残る。両面に粗い貫入あり。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-11 勾跡2 排水溝内
	25	皿	口縁部	13.0	—	—	内面上に陰彫線が2条廻る。両面に細かい貫入。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-11 南側 峠 12層f-1
	26	盤	口縁部	—	—	—	小破片のため詳細は不明。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉するが、全体的に灰が被る。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 排水溝 墓 南側
	27		胴部	—	—	—	内面上に陰彫りの蓮弁文を描く。	灰白色の織粒子で微密。	灰オリーブ色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 北壁 層位不明
	28		口縁部	—	—	—	両面上に輪轉底?が残る。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉するが、全体的に灰が被る。	14c後半～15世紀中葉	平成18 ス-10 レンジ9
	29	水注	胴部	—	—	—	内面上に陰彫りの文様を描く。両面上に輪轉底が残る。	灰白色の織粒子で微密。	オーリーブ灰色の釉薬を両面に施釉。	14c後半～15世紀中葉	平成19 シ-10 南側 10層d

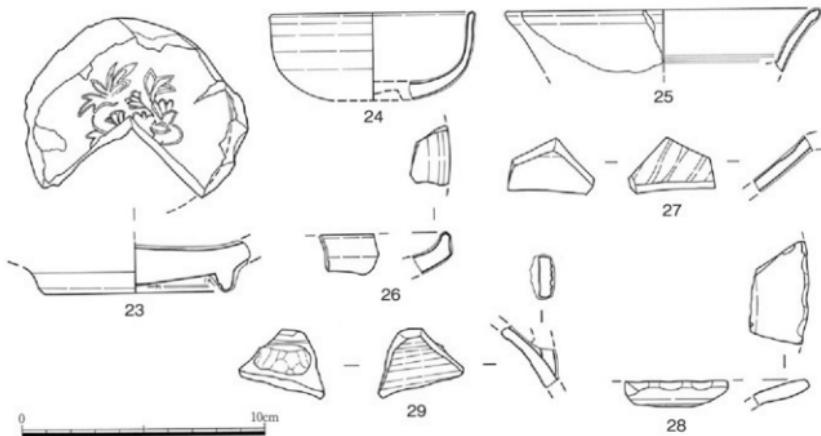
注:法量の項[—]は測定不可



第19図 青磁1 碗(1~12)



第20図 青磁2 碗(13~22)



第21図 青磁3 小碗(24)、皿(23・25)、盤(26~28)、水注(29)

第2節 白磁

白磁は、碗、皿、小皿、小杯及び瓶の器種9点が検出されており、そのうち5点を図化した。

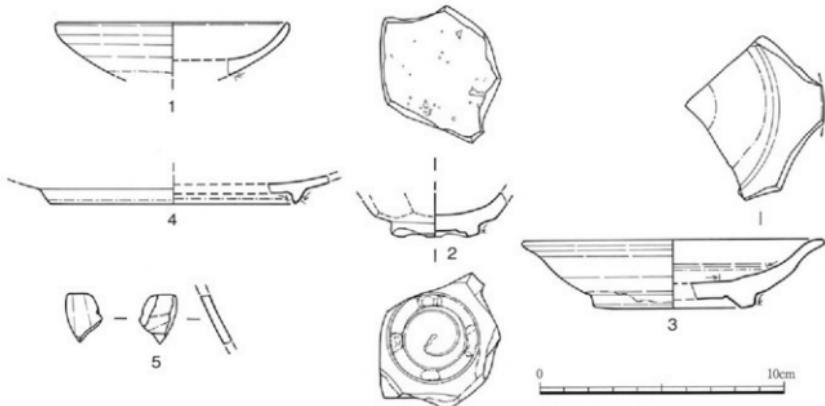
1は、皿の口縁部であり、口唇は僅かに舌状となる。素地は乳白色。釉は白色で内外面に細かい貫入が入る。福建系。口径9.6cm。(平成19 シー11 北側 11層 a)

2は八角杯であり、高台は抉入高台である。見込みに砂が付着する。素地は灰白色。釉は透明。(平成19 シー11 表土剥ぎ)

3は皿の外反する口縁部である。素地は白色。釉は透明な灰色で、外面は疊付けから露胎とし、内面は見込みを蛇の目釉剥ぎとする。福建系。口径12.4cm、器高2.8cm、底径6.6cm。(平成18 シー10・11 客土)

4は皿の底部であり、疊付け外側を斜めに形成している。素地は白色。釉は灰白色。疊付けは露胎とする。景德鎮窯系。底径10cm。(平成19 シー10 北壁 層位不明)

5は瓶の頸部である。素地は白色。釉は白色。(平成19 シー11 南壁 層位不明)



第22図 白磁 皿(1・3・4)、八角杯(2)、瓶(5)

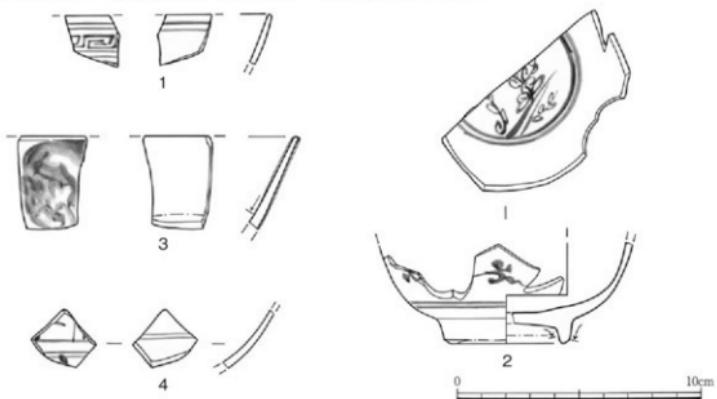
第3節 染付

染付は碗と皿のみで5点検出しており、そのうち特徴的な4点を実測した。1は、碗の口縁部であり、外面に雷文舟、内面に團線を巡らす。素地は白色。景德鎮窯系。(平成19 シー-10 北側10層 b)

2は碗の底部であり、外面胴部に草花文、内面見込みに梅樹文を施す。盤付けは露胎。素地は白色。釉は青味を帯びる。景德鎮窯系。底径4.6cm。(平成19 シー-11 北側 11層 a)

3は碗の口縁部であり、外面に丸文を施す。素地は白色。釉は青味を帯びる。福建系。(平成19 シー-11 壁面層位不明)

4は碗の胸部であり、外面に施すが小破片のため不明。内面は團線を巡らす。吳須の発色は弱い。素地は灰白色。釉は渦る。景德鎮窯系。(平成19 シー-10 排水構内 11層 b)



第23図 染付 碗

第4節 褐釉陶器

褐釉陶器は89点出土している。器種は壺・鉢などが確認されているが、壺が圧倒的に多い。全形が窺えるような資料に恵まれないため、特徴的な標品を第24図に図示した。ここでは器種別の分類概念を記し、詳細は観察一覧に譲る。

1. 壺(第24図1~7)

1と2は口縁部が玉縁状を呈し、胴部が卵型に膨らむ四耳壺で、第24図Aに示した新里村遺跡出土品(沖縄県教委1990)が類例になると考えられる。1は紐状の横耳で、2は底部資料である。3~5は胴部に龍文が貼付される大型の多耳壺で、第24図Bに示した首里城跡京の内SK01出土品(沖縄県教委1998)が類例になると考えられる。3と4は胴部、5は底部資料である。6と7は短頸で肩が大きく張る大型の無耳壺である。当該製品は首里城跡及びその周辺から最も多く出土しており、類例としては第24図Cに示した首里城跡京の内SK01出土品(沖縄県教委1998)が好資料である。6は口縁部の断面形状が方形を呈するもので、7は底面が上げ底を呈する。

2. 鉢(第24図8)

鉢の底部になると想われる資料が1点得られている。胴部から口縁部の形態は判然としないが、類例としては第24図Dに示した新里村遺跡出土品(沖縄県教委1990)が考えられる。

3. 器種不明(第24図9)

胴部外面に形成時の痕跡が残る。小破片のため器種は不明。

第5表 褐釉陶器出土状況

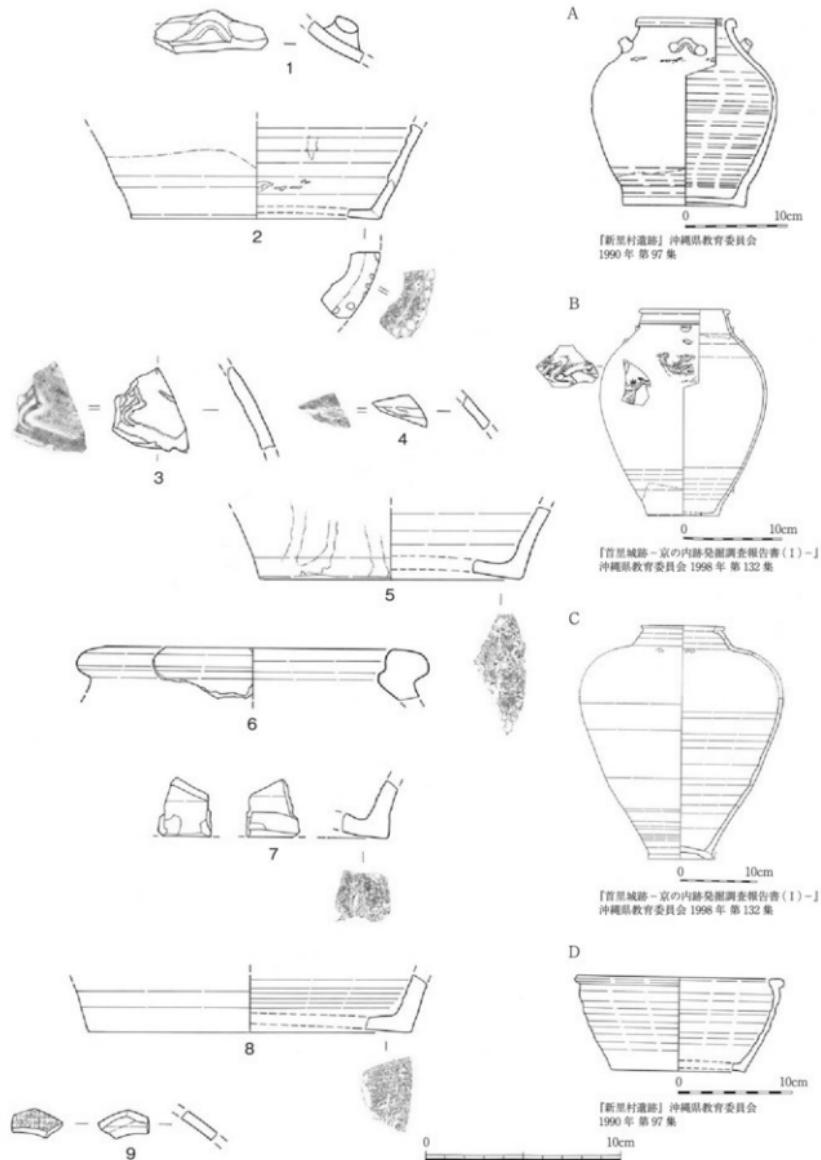
出土地	器種	蓋				蓋 白釉陶器	小蓋 胴部	鉢 底部	器種不明 胴部	合計					
		口縁部	胴部	底部	耳										
平成18年度	シ-11	複乱		7						7					
		東側 例溝内		1						1					
		東側 例溝内 複乱		1						1					
		西側 例溝		2						2					
		西側 例溝 例溝埋土		1						1					
		側溝内		1						1					
		側溝 埋土		1						1					
		側溝内 複乱		2						2					
		家土		5						5					
		客土	1	12	1	1			1	16					
		平成18年度 合計	1	33	1	1	0	0	0	37					
平成19年度	シ-10	北壁 層位不明				1				1					
		南側 12層f-1		1			3			4					
		北側 10層b		1						1					
		北側 11層a		2			1			3					
		北側 12層f-1				1				1					
		中央 12層f-1				1				1					
		中央 14層直上		1						1					
		排水溝内 11層b			1					1					
		10層d		1						1					
		11層a						1		1					
平成19年度	シ-11	西壁 5層a		1						1					
		南壁		2						2					
		北壁 11層b		1						1					
		北側 トレンチ2 12層e		1						1					
		北側 11層a		1						1					
		北側 床面 11層a		1						1					
		南側 11層b		1						1					
		南側 13層a		4						4					
		南側 14層直上		1						1					
		排水溝内 11層b		2			1			3					
平成19年度	SK01	排水溝	2層d-3				1			1					
		排水溝 南壁 11層b		1						1					
		SD01 内	北側 11層a		1					1					
		SK01 排水溝内		2						2					
		床面 9層b		1						1					
		表土剝ぎ		11						11					
		グリッド・層位不明		2			1			3					
		平成19年度 合計	0	41	2	0	1	8	1	54					
		合計	1	74	3	1	1	8	1	91					

第6表 褐釉陶器観察一覧

単位:cm

辨認番号 図版番号	番号	器種	部位	口径	器高	底径	器形・成形・調整	素地・混入物	釉色・施釉状況	出土地
第24回 図版38	1	蓋	把手	-	-	-	肩部に貼付される紐状の模様である。	灰黄色の微粒子。白色鉱物を含む。	黒褐色の釉薬を施釉。	平成18 ス-10・11客土
	2		底部	-	-	12.8	外面部に輪縫痕が残る。	褐色の細粒子。白色鉱物を含む。	全体的に釉剥げが著しく、詳細は不明。	平成18 ス-10・11客土
	3		胴部	-	-	-	外面部に難文が貼付される。	灰褐色の細粒子。白色鉱物を含む。	灰褐色の釉薬を外面部に施釉。	平成19 シ-11 排水溝内 11層b
	4		胴部	-	-	-	外面部に輪縫痕が残る。	灰白色の細粒子。	暗褐色の釉薬を施釉。	平成19 シ-11 北側 トレンチ2 12層e
	5		底部	-	-	13.6	外面部に輪縫痕が残る。	純黃褐色の細粒子。	黒褐色の釉薬を施釉。	平成19 シ-11 SD01内 北側 11層a
	6	器形部	口縁部	18.0	-	-	外面部に輪縫痕が残る。	灰黃色の細粒子。白色鉱物を含む。	灰褐色の釉薬を外面部に施釉。	平成19 シ-11 ス-10・11客土
	7		底部	-	-	-	内面部に調整痕?が残る。	褐灰色の細粒子。白色鉱物を含む。	暗褐色の釉薬を施釉。	平成19 シ-10 排水溝内 11層b
	8		鉢	底部	-	-	器形は上げ底を呈する。	灰白色の細粒子。	黒褐色の釉薬を施釉。	平成19 グリッド・層位不明
	9		不明	胴部	-	-	両面に格子状の叩き目がみられる。	灰白色の細粒子。	暗褐色の釉薬を施釉。	平成18 ス-10・11客土

注:法量の項「-」は測定不可

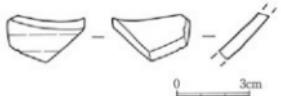


第24図 褐釉陶器 壺(1~7)、鉢(8)、器種不明(9)

第5節 その他の輸入磁器

1. 天目

碗の胸部である。素地は暗灰色。釉は黒色に茶褐色が滲む。福州閩侯県鴻尾窯。(平成19 シー10 北側 11層 a)



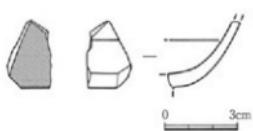
第25図 天目 碗



図版39 天目

2. 琥珀釉

小碗の剥部である。素地は白色。釉は外面向に琥珀釉、内面に透明釉を施す。景德鎮窯系。(平成18 シー10 トレンチ8 7層 b)



第26図 琥珀釉 小碗



図版40 琥珀釉

第6節 本土産陶磁器

1. 本土産染付

第27図1は底径4cmを測り、疊付と高台内側は釉剥ぎされている。高台脛に太さの異なる二条の圓線を廻らし、胴部下に一部文様が確認できる。見込みに一条の墨線を描く。口縁部及び胴部は欠損しているが、胴部は緩やかに立ち上がると思われる。胎土は緻密で灰白色を呈する。微量に黒色粒子が見られる。肥前系か。(平成18 スー10 トレンチ9)

同図2は小碗の口縁部で僅かに外反する。口唇は舌状、内外面に文様を描く。発色は良く、筆やペン状のものを使用して描いたと思われる。(平成18 スー10 客上)

同図3は印判手の輪花皿である。口縁は直口で、口唇は半に成形されている。高台内側は釉剥ぎされている。胎土は緻密で灰白色を呈する。口径14.8cm、底径8cm。(平成18 スー10 トレンチ9)

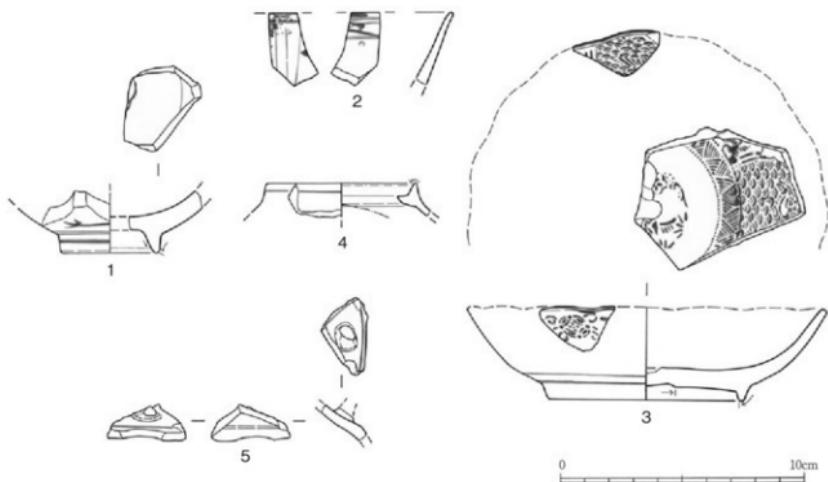
同図4は急須の口縁部である。口径6.2cmを測る。落とし口は釉が掛からず、内側に透明釉が掛かる。外面には一条の圓線が廻る。(平成18 スー10 西側側溝側溝埋土)

同図5は器種不明の染付で、外面に耳が見られ、発色の良い圓線が一条廻る。破片である為、全形は確認できないが、形状から合子の蓋かと思われる。(平成18 スー10 側溝埋土)

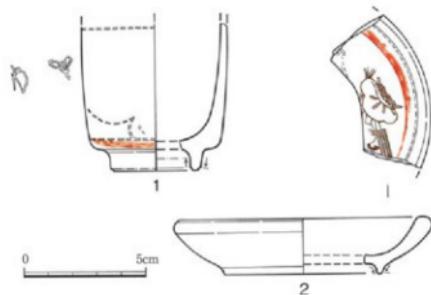
2. 本土産色絵

第28図1は筒状の小碗底部である。高台脛から腰部下を鉤い赤色の釉を施す。大部分が割れており、状態は悪い。高台径は3.4cmを測り、高台内と疊付は釉剥ぎされている。胎土は灰白色の微粒子で、透明釉を内外面に薄く施す。(平成18 スー10 東側側溝内)

同図2は皿の破片。口径10.6cm、底径6.4cmを測る。口縁部が最も厚く、底部に向かって細く、薄くなっていく。高台は丸く成形され、疊付けは無釉となる。外面は無文だが、内面には口縁に沿って赤色釉が上掛けされている。見込みには非常に細い線で文様(松?)が描かれている。(平成18 スー10 トレンチ9)



第27図 本土産染付 碗(1)、小碗(2)、皿(3)、急須(4)、器種不明(5)



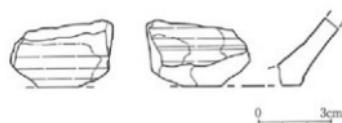
第28図 本土産色絵 小碗(1)、皿(2)



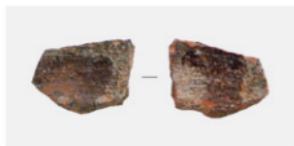
図版41 本土産色絵

3. 本土産陶器

第29図は薩摩焼きの赤胴底部資料である。底部から僅かに括れを持ち、そのまま胸部へ直状に開く。底部はベタ底になると思われる。内外面に薄く褐色の釉を施す。両面に縦幅痕が見られる。胎土は粗く、成形は、やや難である。(平成19年10月・11月客土)



第29図 本土産陶器



図版42 本土産陶器

第7節 沖縄産施釉陶器

「上焼（ジョウヤチ）」と称され、表面に釉薬を掛けた陶器。総数42点出土し、器種別にみると、碗、小碗、瓶、壺、鉢、土鍋、急須と多様なものが出土している。比較的残りの良い12点を報告する。

第30図1は、碗の底部片で、腰部以下は無釉となっており、内面も見込みは釉剥ぎされ、無釉となる。胴部から褐色の釉が素地に直接掛けられている。高台断面は逆台形を呈し、暈付は比較的平坦となる。胎土はざらざらとした土器質で色調は赤褐色を呈する。微量に白色粒や黑色粒を含む。底径6.2cmを測る。（平成18ス-10・11客土）

同図2は、碗の底部片で高台部分は欠損している。胎土は灰白色で、白化粧の上に、透明釉を施している。外底面や高台脇まで釉薬が掛かり、見込みは蛇の目状に釉剥ぎされている。（平成18ス-10東側側溝内）

同図3は、直口を呈する小碗口縁部資料である。口径は8.6cmを測る。胎土は灰褐色で素地は粗く、白化粧を施した後に透明釉を施している。（平成18ス-10トレンチ9）

同図4は小碗の口縁部片である。口縁から緩やかに外反をし、口唇は舌状になる。同部は僅かに膨らむものと思われる。胎土は灰色で、内面は透明釉が直接素地の上から掛けられ、外面は黒褐色の釉薬を施している。口径は9.2cmを測る。（平成18トレンチ2・4層）

同図5は小碗の底部片。高台は欠損している。外面は高台脇まで褐色の釉が掛かるものと思われる。内面はガラス質の釉が掛かり、貫入が見られる。見込みは蛇の目状に釉剥ぎされ、日跡が見られる。胎土は灰色を呈する。（平成18ス-10東側側溝搅乱）

同図6は外面同部に12の面を持つ小碗（杯？）である。口縁部は緩やかに外反し、口唇は舌状を呈する。内外面に白化粧した後、透明釉を施している。暈付は透明釉のみ釉剥ぎされ、白化粧が露出している。外底部には緑褐色の釉が薄く施されている。胎土は灰白色を呈する。表面には貫入が見られる。口径8cm、底径4cmを測る。（平成18ス-10トレンチ9）

同図7は皿の口縁部片で、僅かに外反し、口唇は舌状を呈する。胎土は灰色で、薄く白化粧を施している。内外面に貫入が見られる。口径は不明。（平成18ス-10側溝埋土）

同図8は急須の口縁片である。口縁は平坦に成形され、口唇と口縁内は釉薬が拭取られ無釉となる。外器面には鉄釉が施され、内部にも一部釉垂れが見られる。胎土は灰白色で僅かに黒色の微粒子が見られる。器厚は3mm程と薄く、口径は6.2cmを測る。（年度不明出土地不明）

同図9も急須の胴部破片である。内面には薄く透明釉が掛り、外面は白化粧を施した後、線彫りの文様を施し、呉須によって上掛けされている。胎土は灰色を呈し、黒色・白色粒子を含む。器厚は約5mm。（平成18ス-10トレンチ9）

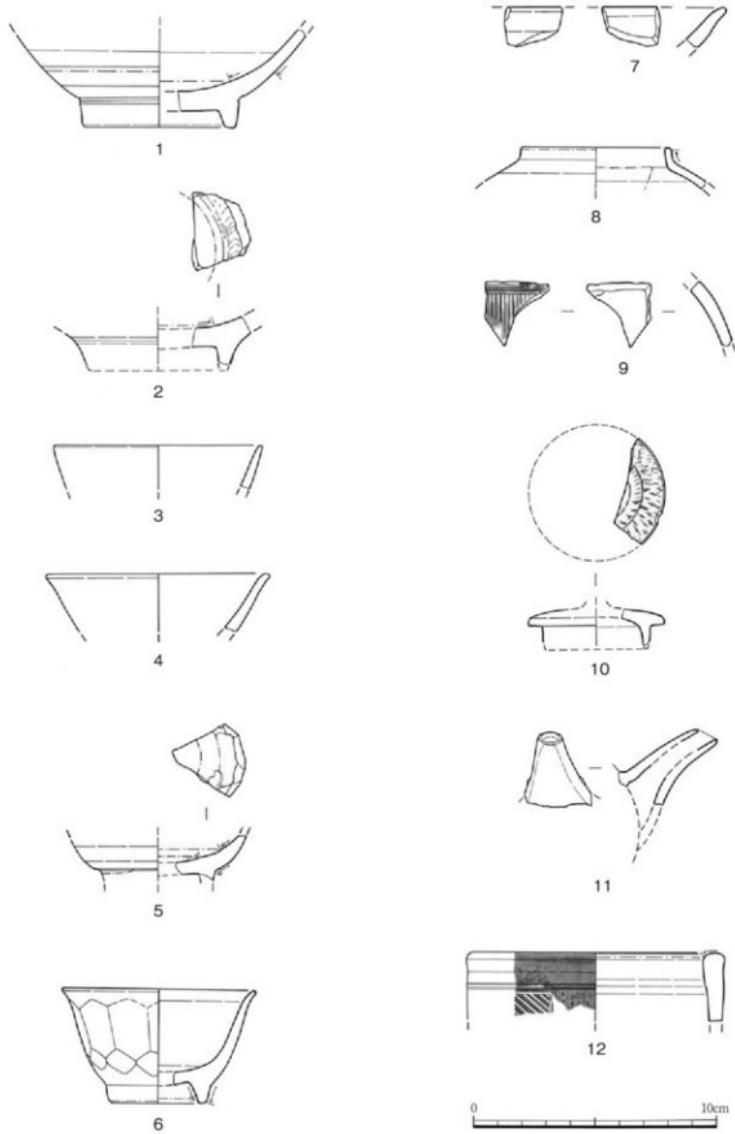
同図10は蓋破片である。外面には二条の圓線と飛び鉢による文様が見られる。内面は無釉で、外面のみ透明釉が掛かる。胎土は灰色で白色粒子を微量に含む。（平成18トレンチ7搅乱出土）

同図11は急須の注口部である。胴体部分との接着面から破損している。口に向かって窄まりながら緩やかに湾曲する。胎土は灰白色を呈し、内外面とともに透明の釉薬が掛かる。（平成18ス-10側溝埋土）

同図12は筒型の火取口縁部片である。口縁は厚みを持ち、胴部はやや經くなる。外面にはヘラ彫りによつて圓線や文様を施し、横位圓線の下部に褐釉と透明釉を施す。斜面の沈線部分には、白化粧で強調され、透明釉のみ掛かる。口唇から口縁上部には、銅綠釉が上掛けされている。内面は無釉。口径は、10.6cmを測る。18世紀頃。蓋屋底。

第7表 沖縄産施釉陶器出土状況

出土地		器種	碗		小碗		皿	盤	盞	鉢	土織	火取	蓋	急須			器種不明 面層地上焼 18C	合計	
			胴部	底部	口縁部	胴部								口縁部	胴部	口縫	胴部		
平成十八年度	シ-10	客土			1													1	
	シ-11	複丸		1														1	
		東側 石列 複丸																1	
		東側 側溝内			1													1	
	ス-10	東側 側溝 複丸	1			1												2	
		西側 側溝内		1														1	
		西側 側溝																2	
		側溝内 複丸																1	
		側溝理土	1						1	1						3	1	7	
		トレンチ9			1		1									1	2	5	
		客土				1				2								3	
	ス-10+11	客土	1	1		1	1				2	1					1		8
		トレンチ2 4柄				1													1
		トレンチ7 複丸																	1
	平成18年度 合計		5	3	2	1	3	1	1	1	4	3	1	1	1	0	6	1	35
平成十九年度	シ-10	北壁 屋位不明	1				1												2
		排水溝内 11層b										1							1
		排水溝内 複丸										1							1
	シ-11	南壁 屋位不明															2		2
平成19年度 合計		1	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	6
年度不明 出土地不明																1			1
合計		6	3	2	1	4	1	1	1	6	3	1	1	1	1	8	1	1	42



第30図 沖縄産施釉陶器 碗(1・2)、小碗(3~6)、皿(7)、急須(8・9・11)、蓋(10)、火取(12)

第8節 沖縄産無釉陶器

方言で「アラヤチ（荒焼）」と称されるもので、高火度で焼成された焼き結め陶器の一群を指す。基本的には無釉だが、自然釉や泥釉・マンガン釉が施釉されるものもある。器種は壺・瓶・鉢・擂鉢・火炉・碗・藏骨器などがあり、特に貯蔵器が多く出土している。以下には各器種の分類概念を記し、個々の観察所見は第9表に提示する。

1. 壺（第31図1～6）

1と2は肩部が砲弾状を呈するもので、肩部に紐状の横耳を貼付する。3～5は器形が徳利に類似する無耳壺と考えられる。6は前記5点に比して頸部をすばめるが詳細は不明。

2. 瓶（第31図7、8）

いずれも小破片のため全形は不明だが、器形としては瓶子や徳利などが想定される。

3. 鉢（第31図9、第32図11、12）

9は口縁部を外側に折り曲げ鉗縁状を呈する。11は口縁部が内彎するもので、方言で「ミジクブサー」と称される。12は平底の底部資料である。

4. 擂鉢（第31図10）

撈鉢編年（安里・上原・家H1987）のIV式に相当する。内面全体に撈目を密に施す。

5. 火炉（第32図13、14）

13は全形が筒状を呈するもので、口縁部内面に器物受を貼付する。14は肩部で内側に屈曲し、口縁の上面観が三葉形をなす。

6. 碗（第32図15）

厚手の直口碗。口唇部及びその周辺が被然していることから、灯明皿の可能性も考えられる。

7. 藏骨器（第32図16）

外面にマンガン釉を施釉する有頭の壺形藏骨器。外面に線彫りで文様を描く。

8. 器種不明（第32図17）

壺や藏骨器などの大型器種が想定されるが詳細は不明。外面に貼り付けで文様を描く。

第8表 沖縄産無釉陶器出土状況

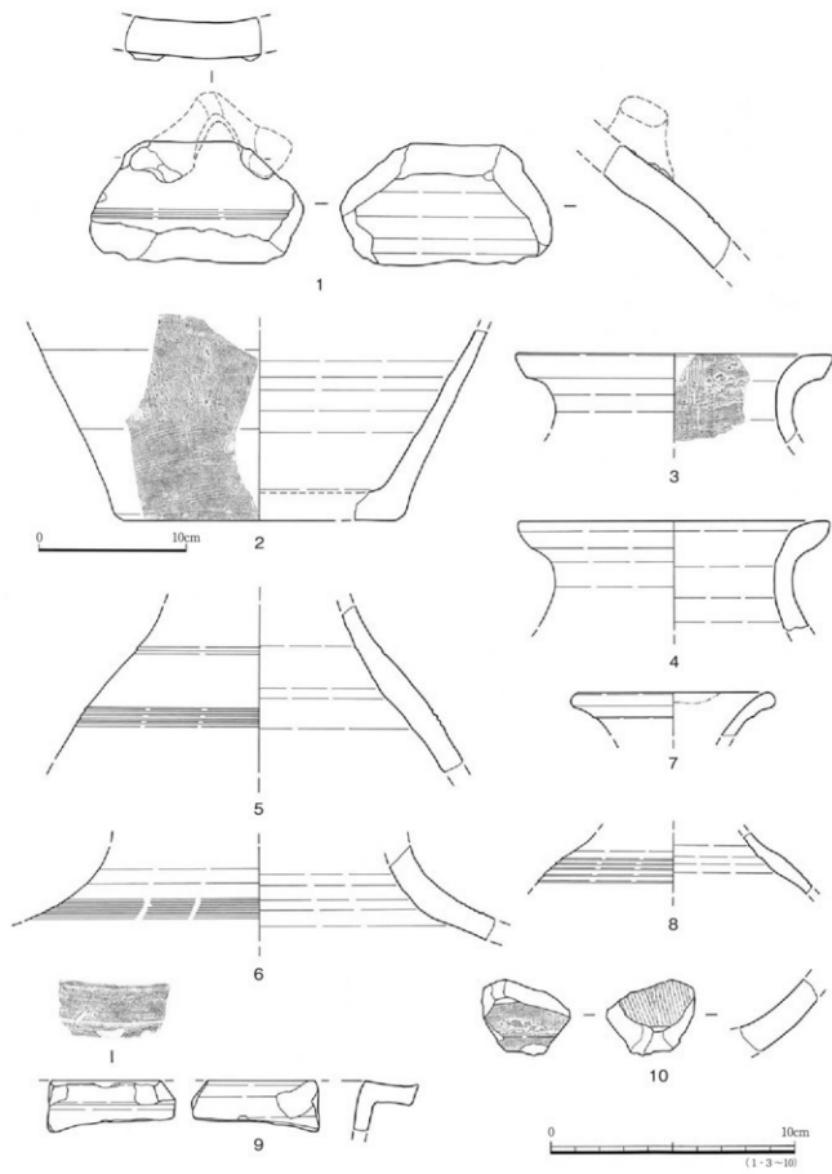
出土地	器種	壺		瓶		壺			鉢		擂鉢		大邱	藏骨器	不明	合計
		口縁部	口縁部	肩部	口縁部	肩部	底部	口縁部	肩部	底部	肩部	口縁部	肩部	肩部	肩部	
平成十八年度	シ-10 側溝埋上											3				3
	客土														1	1
	シ-11 複乱											2				3
	西側 側溝											3				10
	西側 側溝裏込				1	6						1				1
	東側 側溝内						3									3
	東側 側溝内 複乱											2				2
	側溝内 複乱						2									2
	側溝内						1			2		1				4
	側溝埋上						8	1				1			1	11
平成十九年度	客土				1	1			1	1						4
	ス-10-11 客土		1			1	9			5	1	1				18
	ス-11 客土						2									2
	平成18年度 合計	0	1	1	2	33	1	3	17	2	2	1	0	1		64
	シ-10 北壁 層位不明											1				1
平成二十年度	排水溝 北側 複乱											1				1
	南壁 層位不明											2	1			3
	壁面 層位不明															1
	砂水溝内 1層b							1								1
	砂跡2 排水溝内						1									1
	表土剥ぎ						1			2	1	1			1	5
	グリッド 層位不明														1	1
	平成19年度 合計	1	0	0	1	2	0	0	6	1	1	1	1	0		14
	年度・グリッド 層位不明							3			2	1				6
	合計	1	1	1	3	38	1	3	25	4	3	2	1	1		84

第9表 沖縄産無釉陶器観察一覧

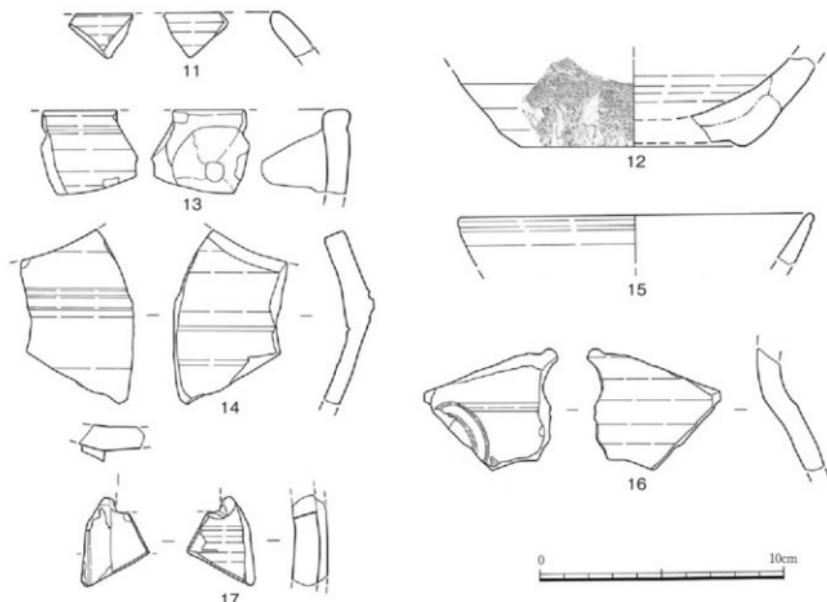
単位:cm

拂団番号 図版番号	番号	器種	部位	口径	器高	底径	観察所見	出土地
第31図 図版44	1	蓋	胴部	—	—	—	素地は明赤褐色粒子。内面に輪轂痕が残る。外面上に紐状の横耳を貼付し(本品では欠損)、その下に陰圓線を2条廻らせる。外面上に泥軸を施釉する。	平成18 ス-10 西側 側溝
	2		底部	—	—	18.6	素地は赤褐色粒子。外底間に面取りが施され、内面胴部に輪轂痕が残る。外面上に灰輪(自然輪?)が施釉されるが、道具(刷毛?)の使用痕から意図的な施釉の可能性もある。内面に石灰が付着する。	平成18 ス-10 側溝土
	3		口縁部	13.5	—	—	素地は灰赤色粒子で堅緻。両面に輪轂痕が残り、内面には刷毛状工具の使用痕が一部確認される。外面上に一部泥軸(自然輪?)が施釉される。	平成19 シ-11 表土剥ぎ
	4		口縁部	12.8	—	—	素地は明赤褐色粒子。両面に輪轂痕が残り、内面には成形時の調整痕(刷毛状工具の使用痕)が確認される。	平成18 ス-10-11 客土
	5		胴部	—	—	—	素地は灰赤色粒子(器表面付近は赤灰色)で堅緻。内面に輪轂痕が残る。外面上部に陰圓線を1条、その下に陰圓線を3条廻らせる。外面上に自然輪が施釉される。	平成18 ス-10 東側 側溝内
	6		胴部	—	—	—	素地は純赤褐色粒子。両面に輪轂痕が残る。外面上に陰圓線を数条廻らせる。	平成18 ス-10 側溝内 矢乱
	7	瓶	口縁部	8.4	—	—	素地は灰赤色粒子で堅緻。外面上口縁部下位に棱線が確認される。両面に自然輪が施釉される。	平成18 ス-10-11 客土
	8		胴部	—	—	—	素地は純赤褐色粒子。両面に輪轂痕が残る。外面上に陰圓線を4条廻らせる。	平成18 ス-10 客土
	9	鉢	口縁部	—	—	—	素地は橙色粒子。両面に輪轂痕が残る。跨縁上面に陰圓線を1条廻らせる。擂鉢の口縁部になる可能性もあるが、小破片のため詳細は不明。	平成18 ス-10 側溝内
	10	擂鉢	胴部	—	—	—	素地は明赤褐色粒子。両面に輪轂痕が残る。内面に擂目が左回転で密に施される(擂目の単位は不明)。	平成19 シ-11 南壁 層位不明
第32図 図版44	11	鉢	口縁部	—	—	—	素地は灰褐色粒子(外側は褐灰色)。両面に輪轂痕が残る。外面上に火熱により焼けている。	平成18 ス-10 側溝内
	12		底部	—	—	9.2	素地は赤褐色粒子。外面上に輪轂痕と工具を使用した器面調整痕、内面に輪轂痕が残る。外底際の成形は粗雑。	年度不明 出土地不明
第32図 図版45	13	火炉	口縁部	—	—	—	素地は暗赤褐色粒子(外側は褐灰色)。外面上に輪轂痕が残る。内面に円錐状の器物受を貼付する。外面上口縁部に陰圓線を1条廻らせる。	平成19 シ-11 表土剥ぎ
	14		口縁部	—	—	—	素地は明赤褐色粒子。両面に輪轂痕が残る。外面上に突唇を、内面に陰圓線をそれぞれ1条廻らせる(陰圓線の形状のものは不明)。外面上に泥軸を施釉するが剥落(火熱によるものか)が著しい。	平成18 シ-10 客土
	15	碗	口縁部	14.6	—	—	素地は赤褐色粒子。両面に輪轂痕が残る。口唇部及びその周辺が火熱により焼けている。	平成19 シ-11 壁面 層位不明
	16	藏骨器	胴部	—	—	—	素地は赤褐色粒子で堅緻。内面に輪轂痕が残る。外面上に貼り付けの突唇を1条廻らせ、それに一部重複するように線彫りの蓮華文を描く。外面上にマンガ輪を施釉する。	平成19 出土地不明
	17	不明	胴部	—	—	—	素地は赤褐色粒子。内面に輪轂痕が残る。外面上に貼り付けの文様を施すが詳細は不明(藏骨器にある窓の一部?)。外面上にマンガ輪を施釉する。	平成18 ス-10 側溝 埋土

注:括弧の項「-」は測定不可



第31図 沖縄産無釉陶器 1 壺(1~6)、瓶(7・8)、鉢(9)、擂鉢(10)



第32図 沖縄産無軸陶器2 鉢(11・12)、火炉(13・14)、碗(15)、藏骨器(16)、器種不明(17)

第9節 土器・タイ産半練土器

1. 土器

土器は剖部、頸部資料の計2点を図化し、個々の詳細は観察表第10表に示す。

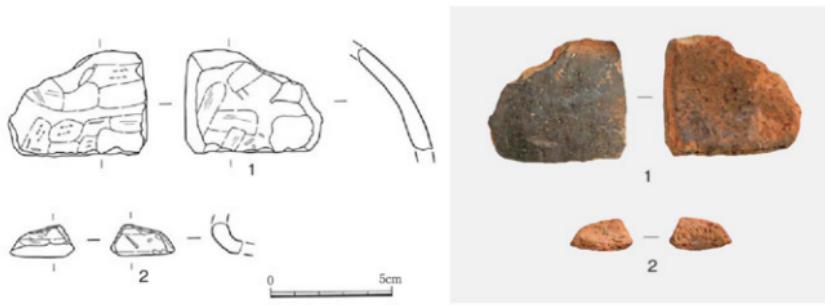
第10表 土器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	番号	形式名	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第33図 図版46	1	グスク土器	鍋	胴部	— — —	器面調整は、外面に箝削りを施した後にナデを僅かに加えて仕上げている。内面はナデ仕上げであるが、部分的に指圧を加えている。器圧は7~8mmで、胎土には長石、微石英粒、角閃石、赤色の粒などが見られる。 器形としては鉢だが、外面に火の使用が見られるので、今回器種を鍋とした。	平成19 シー10 南側 12層#1
	2	バナリ焼	器種 不明	頸部	— — —	屈曲部分は緩やかなカーブを描いている。外面は剥落している。赤色土粒や貝殻を細く碎いたと思われる混入物がみられる。 器外内面はともに橙色。	平成19 シー10 排水溝内 潜乱

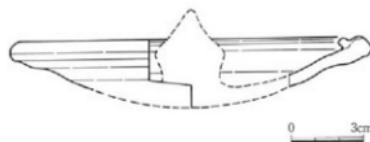
2. タイ産半練土器

本品は2点得られており、器種は蓋のみである。図化した資料は摘み部分を欠損している。端部で折り曲げて突起をつくる。胎土に赤色粒、白色粒を多く含む。器色は、外部は淡橙色であり、内部は黒色を呈する。(平成19 シー10 13層 a)



図版 46 土器

第33図 土器 鍋(1)、器種不明(2)



第34図 タイ産半練土器 蓋



図版 47 タイ産半練土器

第10節 陶質土器

壺屋で「アカムヌー」・「アカモノ」と称される軟質の土器である。総点数16点が出土している。それらを器種別にみると、鍋が2点、蓋が1点、器種不明が1点である。各遺物の概要は以下に記し、個々の詳細に関しては観察一覧(19表)に譲る。

1・2は壺屋で「サークーナービ」と呼ばれる鍋の口縁部資料で、1・2は共に口縁部が「く」の字状に形成されている。1は口縁に粘土紐状の把手が貼り付いているが、破損している。2は口縁部が僅かに残っており、粘土紐状の把手がついていたと思われる跡が見られる。また1・2とも器厚は薄く、6~7mm程度である。

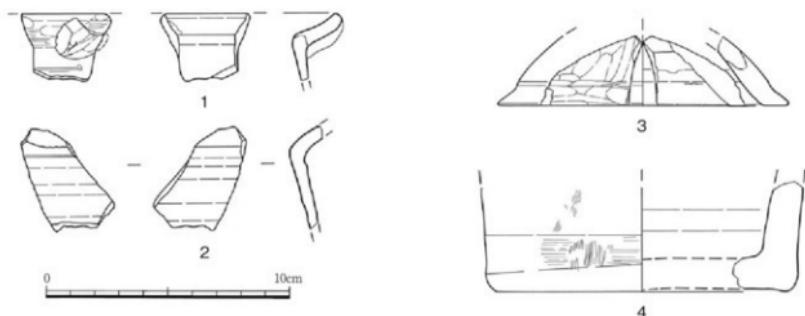
3は鍋の蓋と思われるが、破損している為詳細は不明。口縁に向かって少し丸みを帯ながら「く」の字状に形成されている。

4は用途不明。

第11表 陶質土器観察一覧

単位:cm

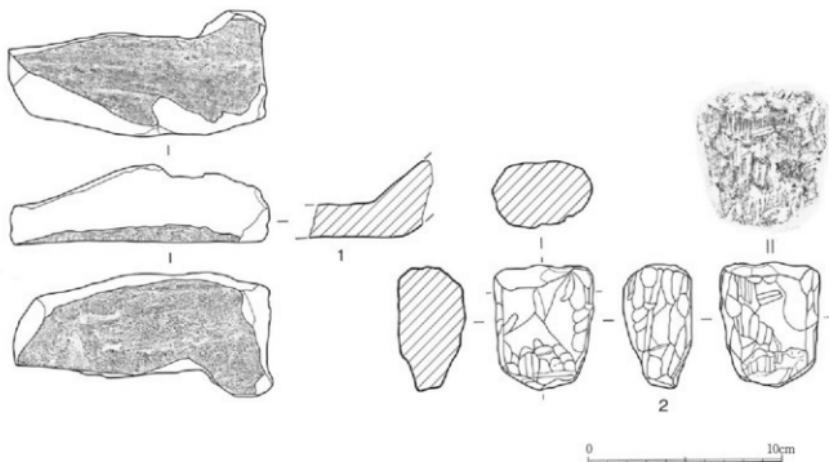
標印番号 図版番号	番号	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第35図 図版45	1	鍋	口縁部	—	—	—	器形は口縁部が「く」の字状に屈曲し外反する。口縁部分で僅かに肥厚。口縁内面が微弱に窪む。口縁に紐状把手。把手接着部分には指圧痕が残る。内・外面に輪縫痕が現れる。胎土には細かい白色粒(ガラス質の飴物)と黒色粒が見られ、色調は外面が橙褐色、内面は暗褐色。	平成19シ-10 北壁 層位不明
	2	鍋	口縁部	—	—	—	器形は口縁部が「く」の字状に屈曲し外反している。口縁に紐状把手が付いていたと思われる跡が残る。内・外面に輪縫痕が明瞭に残る。頭部に削りを入れ屈曲を強調する。胎土には細かい白色粒(ガラス質の飴物)と黒色粒が見られ、色調は外面が灰褐色、内面は暗褐色。	平成18 ス-10・11 客土
	3	蓋	口縁部	12.0	—	—	口縁部が僅かに「く」の字状に屈曲し外反している。やや粒子は粗めで色調は淡赤褐色。頭部には挽削りの痕がみられ、外縁は継やかな弧を描く。横み部の頂部が弧状に形成された蓋と考えられる。	平成19シ-11 SK02 13層b
	4	器種 不明	底部	—	—	12.0	立ち上がりが内側に縛り気味で直線的。外縁に暗茶色の化粧土を塗る。外縁・内面に僅かではあるが、擦目を密に施した跡が見られる。素地、器色ともに橙色。	平成18 ス-10 客土



第35図 陶質土器 鍋(1・2)、蓋(3)、器種不明(4)

第11節 瓦質土器

瓦質土器は7点出土している。今回得られた資料は全て沖縄産と考えられるが、いずれも小破片のため特徴的な資料を第36図に図示した。1は底部資料で、器種は炉又は植木鉢が想定されるが不明である。器面の色調は淡橙色を呈し、灰色粒子の素地に細かい白英を含む。成形は範削りやナデ調整で仕上げられる。器底は底部が1.7cm、胴部が2.5cm。(平成18 シー-10 西側側溝 側溝埋土) 2は縦6.4cm、横5.1cm、幅3.5cmをなす円筒形の資料で、火鉢のような大型製品の脚部の可能性があるが詳細は不明である。手捏ねで成形されており、削りやナデの痕跡はみられない。色調は全体的に焼されて灰褐色を呈するが、裏面中央部に剥離箇所があり灰色の素地が確認される。(平成19 シー-10 排水溝 映南側)



第36図 瓦質土器 器種不明(1・2)

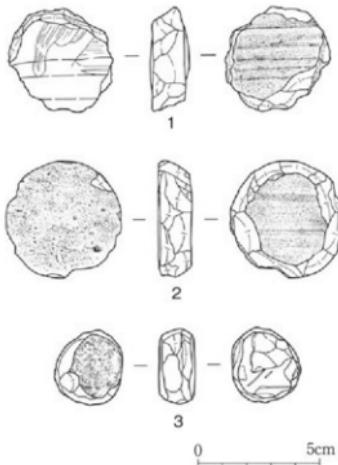
第12節 円盤状製品

円盤状製品は前年度（平成18年度）出土の沖縄産無釉陶器が2点、今年度（平成19年度）出土の陶質土器が1点、総数3点出土している。

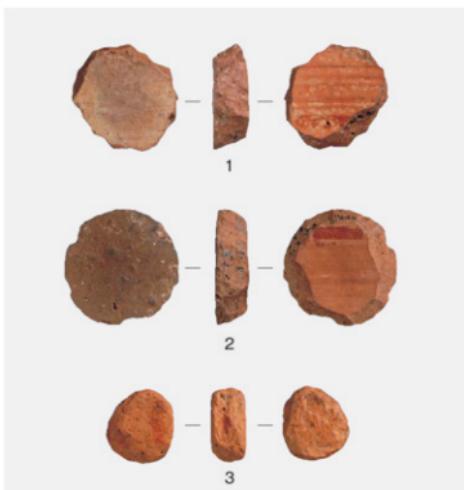
個々の詳細は以下の観察表（第12表）に記す。

第12表 円盤状製品観察一覧

辨別番号 図版番号	番号	素材	法量(cm ³ /g)				観察事項	出土地
			長径	短径	厚さ	重量		
第37図 図版48	1	沖縄産 無釉陶器	4.3	4.3	1.6	36.4	完形で形状は良いが、打削調整が難な為に稍円形を呈する。表面と裏面の両方から打削が見られる。表面の打削の方が多い。裏面に機械痕が見られる。	平成18 スー10・11 客土
	2	沖縄産 無釉陶器	4.8	4.7	1.4	40.0	完形で形状は良い。裏面からの打削が多く、調整も丁寧。また、角が削られ円形を呈する。胴部を使用しており、裏面には機械痕が見られる。	平成18 スー10・11 客土
	3	陶質土器	3.1	2.8	1.5	13.5	胴部を使用。表面画面からの打削が見られ、断面に研磨が施されている。形状はややいびつながらも円形を呈する。	平成19シ-11 北側 11層a



第37図 円盤状製品



図版 48 円盤状製品

第13節 屋瓦、漆喰、埴瓦、煉瓦

1. 屋瓦

当該発掘区から出土した屋瓦は总数474余点からなる。殆ど碎片ではあるが、一部に全体の形状をうかがわせる比較的大形の破片も認められた。

これら得られた資料は製作技法から分類集計を試みると、高麗系瓦（4点）、大和系瓦（17点）、明朝系瓦（450点）、近代大和瓦（3点）の4種類に大別された（第14表）。この4種類の中で中世に相当する高麗系瓦は平瓦と丸瓦の2種類で、後続の大和系瓦は軒丸瓦、平瓦、丸瓦の3種類である。ただ量的には丸瓦を含むても極めて僅少の出土状況を呈する。他方、近世以降の明朝系瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼板、鳥糞瓦の6種類が得られ、出土量も95%と最も多く主体をなす。当該地区の現況を示しているものとみられる。また、近代に属する大和系瓦は微量で、平瓦のみが得られている。

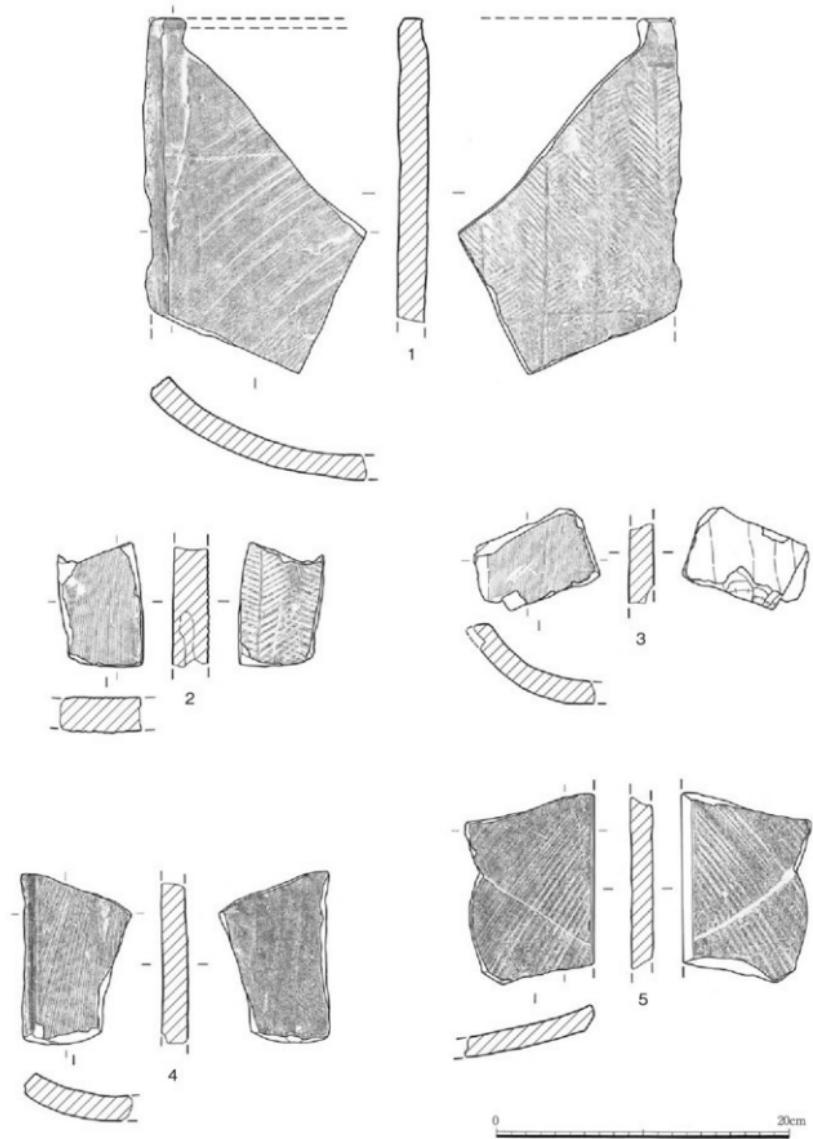
以上の状況から、高麗系瓦と大和系瓦は近隣の首甲城や大界寺との関連を窺わせるもので、当該地に建物が存在したことを示すものではない。明朝系瓦については、守礼門の瓦ととの関連が予想され、その組み合せや、文様からもその蓋然性が高いものと考えられる。近代瓦については、隣接する貝殻奉行所跡から同系の丸瓦、平瓦、軒瓦、飾り瓦が報告されていて、当該地の北側地域とのかかわりが推定される。いずれにしても、出土状況からこれら屋瓦は周辺地からの流れ込み的な堆積物的性格として捉えられよう。

第13表 屋瓦観察一覧a

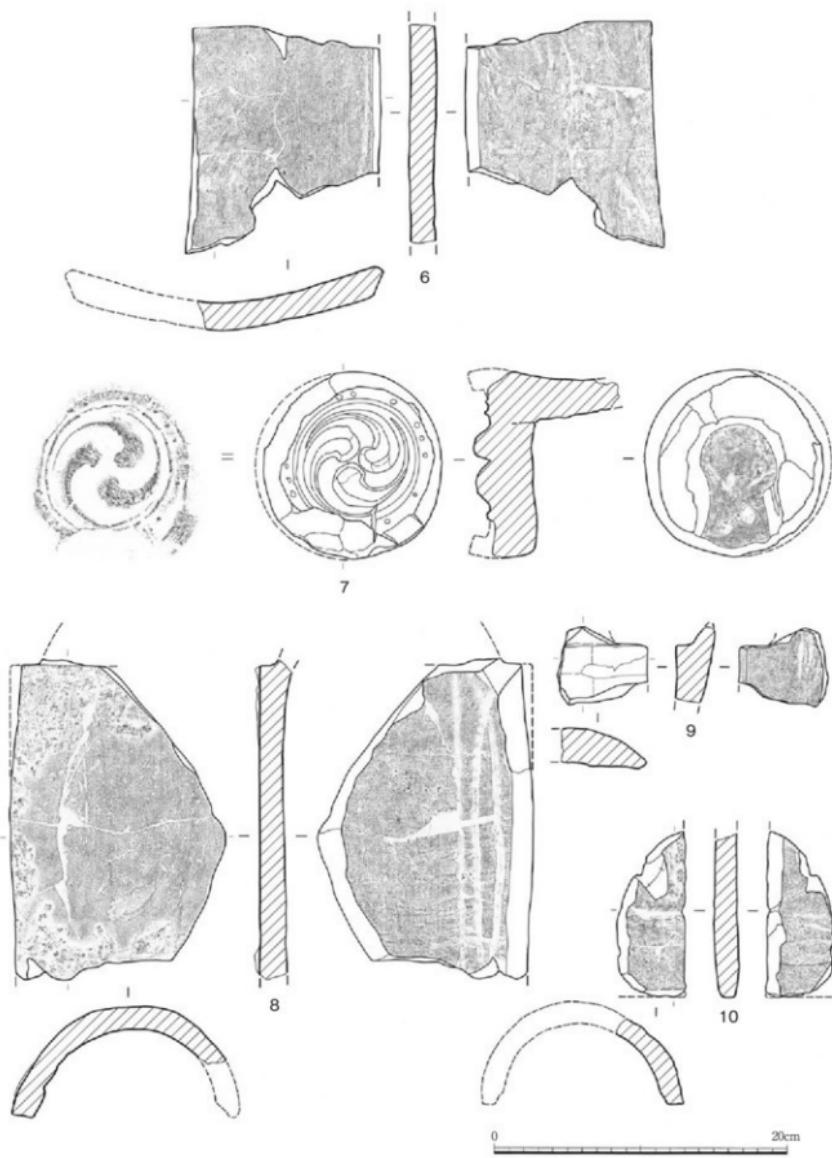
掲図番号 図版番号	番号	造瓦系統	種類	部位	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地	
第38図 図版49	1	高麗系瓦	平瓦	側面部	灰色 (船士中央が黒色)	良	端部から側面の状況を残す資料。凸面には羽状打捺文が認められるが器面の摩滅が進んで鮮明ではない。凹面には右上から左下方向に粘土糸引き痕が条痕としてみられる。また、凹面には端部から9.7cmの部分に横位の細い粗圧痕が確認される。厚み約2cm。	平成19 シ-10 北側 12層f-1	
	2		平瓦	箇部	灰色	良好	凸面に鮮明な羽状打捺文、凹面には鮮明な糸引き痕がみられる破片である。厚み2.4cm。	平成19 シ-11 南側 13層a	
	3		丸瓦	側面部	灰色	良	側面の一部を残す資料で、凸面側には微かに残る羽状打捺文が離察できる。離型材の白砂粒が付着。厚み1.6cm。	平成19 シ-11 表土剥ぎ	
	4		平瓦	側面部	灰色	良	側面側の破片である。凸面側著しく摩滅が進み、打捺文はみられず、一見無文状況にある。厚み1.7cm。	平成19 シ-10 中央 12層f-1	
第39図 図版50	5	大和系瓦	平瓦	側面部	褐色	良	側面の状況を残す資料。両面にはたたら(粘土塊)からの切り取り時の糸引き痕がみられる。また、両面に白砂粒子が多数付着している。厚み1.4cm。	平成19 シ-10 南側 12層f-1	
	6		平瓦	側面部	灰色	良	側面の状況を残す資料。両面に粘土からの切り取り時の糸引き痕がみられ、凹面は無文の叩き板の痕跡がみられ、また、使用時の煤の付着が認められた。両面に白砂粒子が多数付着している。厚み2cm。	平成19 シ-11 南側 13層a	
	7		軒丸瓦	瓦当部	灰色	良好	丸瓦面に對し、丸瓦の端部が筋が絞りこまれた形で接合されている。丸瓦の筋が細くなっている。瓦当には三つ巴の左巴文があり、外区には3+1の珠文がみられる。瓦当面の最大厚みは4cm。裏面は削まではぼ平面上に仕上げている。	平成19 シ-11 表土剥ぎ	
	8		明朝系瓦	丸瓦	箇部	灰色	良好	玉縁側と端部側が欠落した箇部資料である。側面と両側に漆喰の付着痕がみられる。全体の保存状況は悪く摩滅している。	平成18 シ-10 トレンチ8
第40図 図版51	9	明朝系瓦	大和系瓦	丸瓦	箇部	褐色 (船士中央が灰色)	良	玉縁側の段部資料である。凸面側には鷹頭状叩き面文が僅かにみられる。全体の保存状況は悪く摩滅している。	平成19 シ-10 排水溝内 11層b
	10		丸瓦	端部	褐色	良	端部側の細片で、面取りの状況をみることができる。面取り幅1~2cm未満。漆喰の付着がみられる。	平成18 ス-10 トレンチ9	
	11		丸瓦	端部	褐色	良	端部側の細片で、面取りの状況をみることができる。面取り幅4cm。器面の風化が進行している。漆喰の付着がみられる。	平成18 シ-10 トレンチ8	
	12		平瓦	端部	赤褐色	良	端部側の細片で、面取りがみられない資料である。漆喰の付着が確認される。厚み1.9cm。	平成18 ス-10+11 客土	
	13		丸瓦	端部	灰色	良	端部側の細片で、面取りの状況をみることができる。面取り幅1.5cm。器面の風化があるが、漆喰の付着は残っている。	平成18 ス-10 側溝 理土	
	14		鳥衾瓦	瓦当部	赤色	良好	瓦当面は撫で整形が極めて良好である。文様は左三つ巴文が施されている。瓦当頂部が尖る。瓦当裏面は撫でが良好。瓦当の直径推定約13.8cm。瓦当の最大厚み1.4cmと薄手である。	平成18 ス-10+11 客土	

第13表 屋瓦観察一覧b

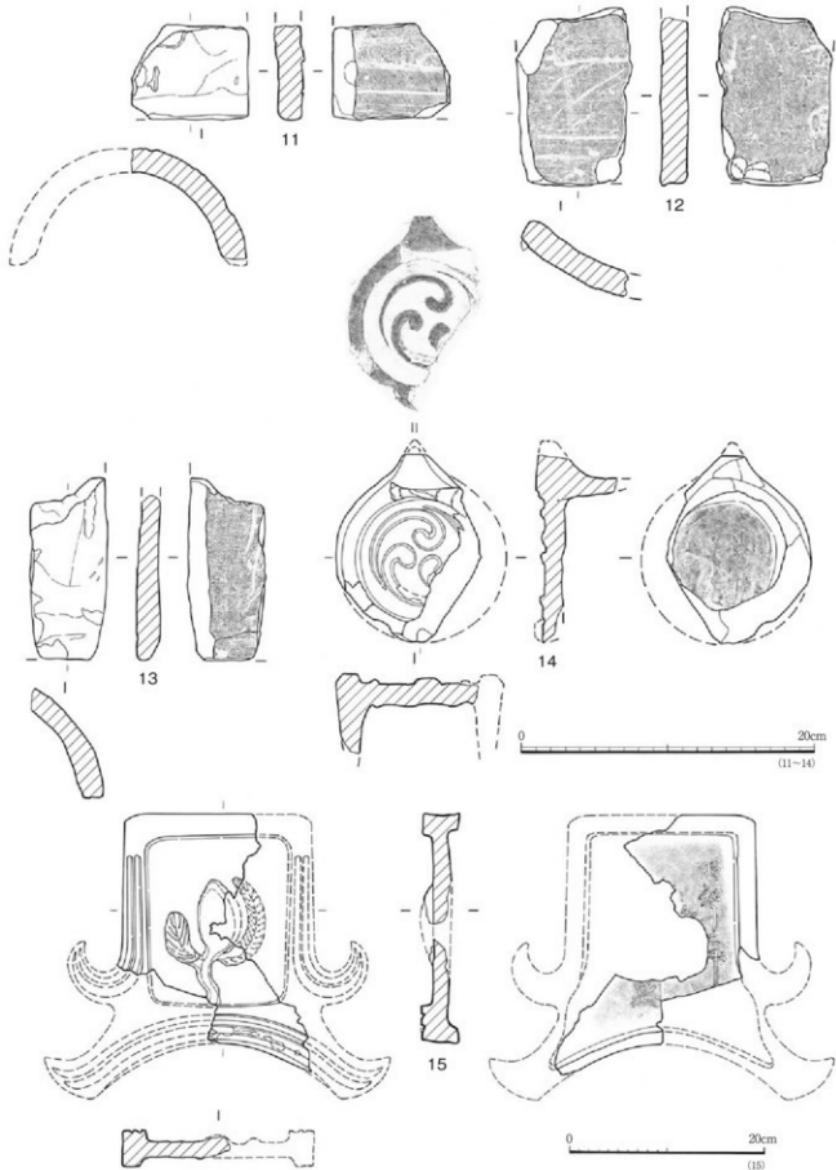
神奈川番号 図版番号	番号	造瓦 系統	種類	部位	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地
第40図 図版51	15	明 朝系 瓦	鬼板	瓦当部	赤色	良好	箱型で、両側には角上の継ねが作られている。又ぐりは大きくなっている。両側と又ぐり部分には二本の印縞を入れている。中央の文様は桃文様で、実は桃円形で、両側には蓋が配される構図。裏面には「明和十二年〇〇〇〇・盛」と刻まれ、生産年代が示されている。頂部の横の長さ19cm、重みから又ぐらまで約23.2cm、瓦当内面の厚み1.5cm、外枠の幅3.6cm。	平成18 ス-10 客土
第41図 図版52	16	明朝系 瓦	軒丸瓦	瓦当部	赤色	良好	殊文と牡丹文様の一部を残した軒瓦の破片である。頭部分で、裏面は撫でて丁寧になされている。厚み1.2cmと極めて薄い。	平成19 シ-10 北壁
	17		丸瓦	玉縁部	赤色	良好	玉縁側の大きな破片である。平面形は円弧を描く、裏面の面取りは一回で、鮮明である。玉縁の長さ約1.2cm。	平成18 ス-10+11 客土
	18		丸瓦	玉縁部	赤色	良好	玉縁側の大きな破片である。平面形は円弧を描く、裏面の面取りは二回で、鮮明である。玉縁の長さ約5cm、外区幅1.1cm。	平成18 ス-10+11 客土
第42図 図版52	19	明朝系 瓦	丸瓦	筒部～ 端部	赤色	良好	玉縁のみを欠く丸瓦の資料である。凹面の端部には幅1～2cmの面取りがなされている。凸面の両端および側面には漆喰の付着がある。筒部の長さ約26.5cm、筒部の幅約15.6cm。	平成18 ス-10+11 客土
第42図 図版53	20	明朝系 瓦	丸瓦	玉縁角片～ 端部	赤色	良好	玉縁のみを欠く丸瓦の資料である。凹面の端部には面取りが行われていない。凸面の両端および側面には漆喰の付着がある。筒部の長さ約27cm、筒部の幅約14.5cm、厚み1.3cm。	平成18 シ-11 櫻乱
第43図 図版53	21	明朝系 瓦	丸瓦	筒部～ 端部	赤色	良	玉縁のみを欠く丸瓦の資料である。凹面の端部には幅1～2cmの面取りがなされている。凸面の両端および側面には漆喰の付着がある。厚み1.3cm。	平成18 ス-10+11 客土
	22		軒平瓦	瓦当部	赤色	良	瓦当面が逆三角形を呈する軒平瓦で、隅分部の資料である。瓦当面には葉脈が強調した葉がみられる。	平成18 ス-10 西側 石列
	23		軒平瓦	瓦当部	赤色	良	軒平瓦の瓦当中央部の碎片である。花弁の一部がみられる。	平成18 ス-10 トレンチ9
	24		軒平瓦	瓦当部	赤色	良	軒平瓦の逆三角形の隅分部の碎片である。一部に文様の一部を残す。	平成18 ス-10 客土
第43図 図版54	25	平瓦	広端部～ 筒部	灰色	良好	広端部をよく残した平瓦資料である。棒状孔あつ痕が目立つ。7つのくびきみをみるとことができる。凹面には漆喰が付着している。広端の大きさ23.4cm、厚み1.3～1.5cm。	平成18 グリッド不明 客土	
第44図 図版54	26	明朝系 瓦	平瓦	広端部～ 狭端部	灰色	良好	両端を残しつつ側面の状況がみられる資料。凹凸両面には白色の漆喰が大きな残る。凹面には組織圧痕が4点を数える。長軸の大きさ25cm、厚み1.2～1.5cm。	平成18 シ-10 トレンチ8
	27		平瓦	広端部	灰色	良好	広端側の角資料である。端部側の組圧痕の数は4点で、組圧痕の大きさ2cm前後、深さ0.2cmである。漆喰が付着している。器の厚み1.1～1.4cm。	平成18 ス-10+11 客土
	28		平瓦	狭端部	赤色	良好	狭端側の角片である。凸面側に横位の指撫で痕が走る。厚み1.2cm。	平成18 ス-11 客土
	29		平瓦	筒部	黒色 (客土中央が 淡灰色)	良好	本来の漆し銀色は留めていないが削面で整形された黒瓦である。凹面側には櫛状の搔き線が5本みられる。側面は丁寧に滑面になる。厚み1.5cm。	平成18 ス-10 側溝内



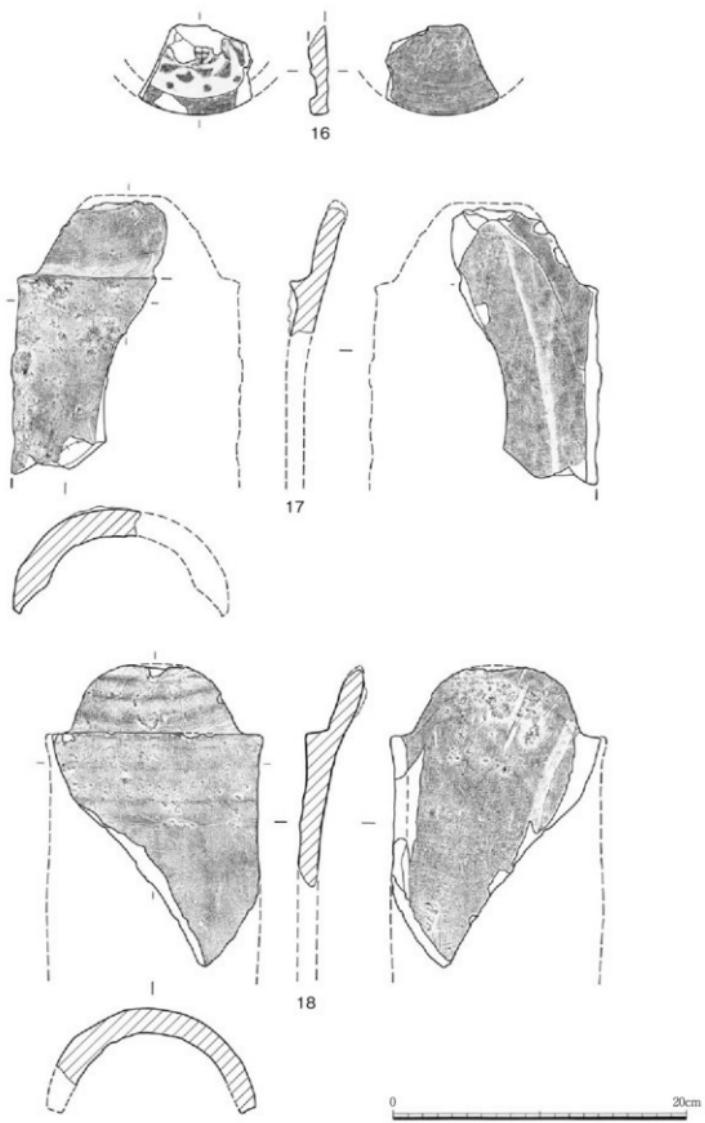
第38図 屋瓦 1 高麗系瓦(1~4)、大和系瓦(5)



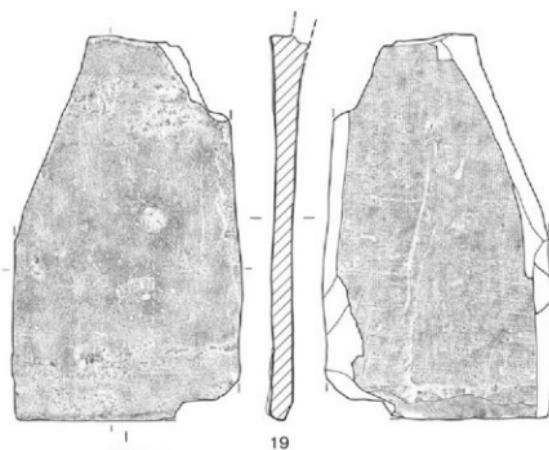
第39図 屋瓦2 大和系瓦(6・7・9)、明朝系瓦(8・10)



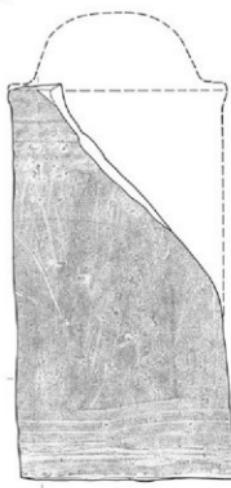
第40図 屋瓦3 明朝系瓦



第41図 屋瓦4 明朝系瓦



19



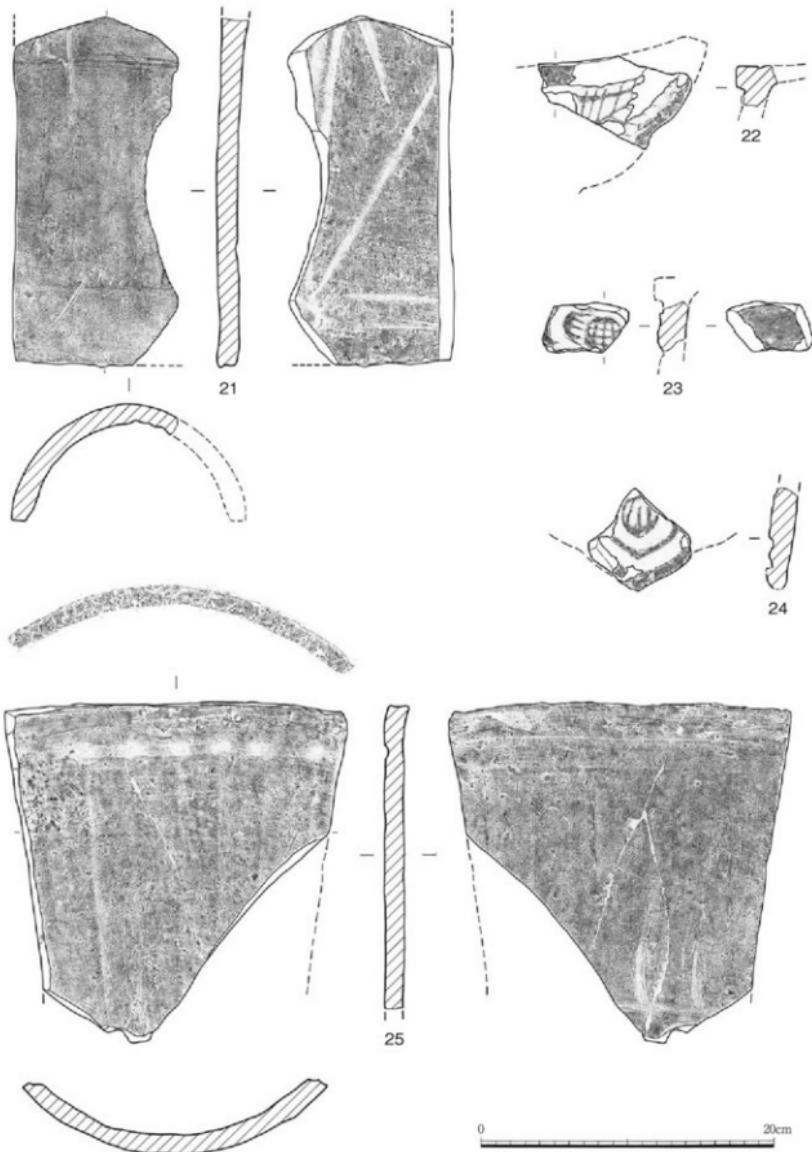
1

20

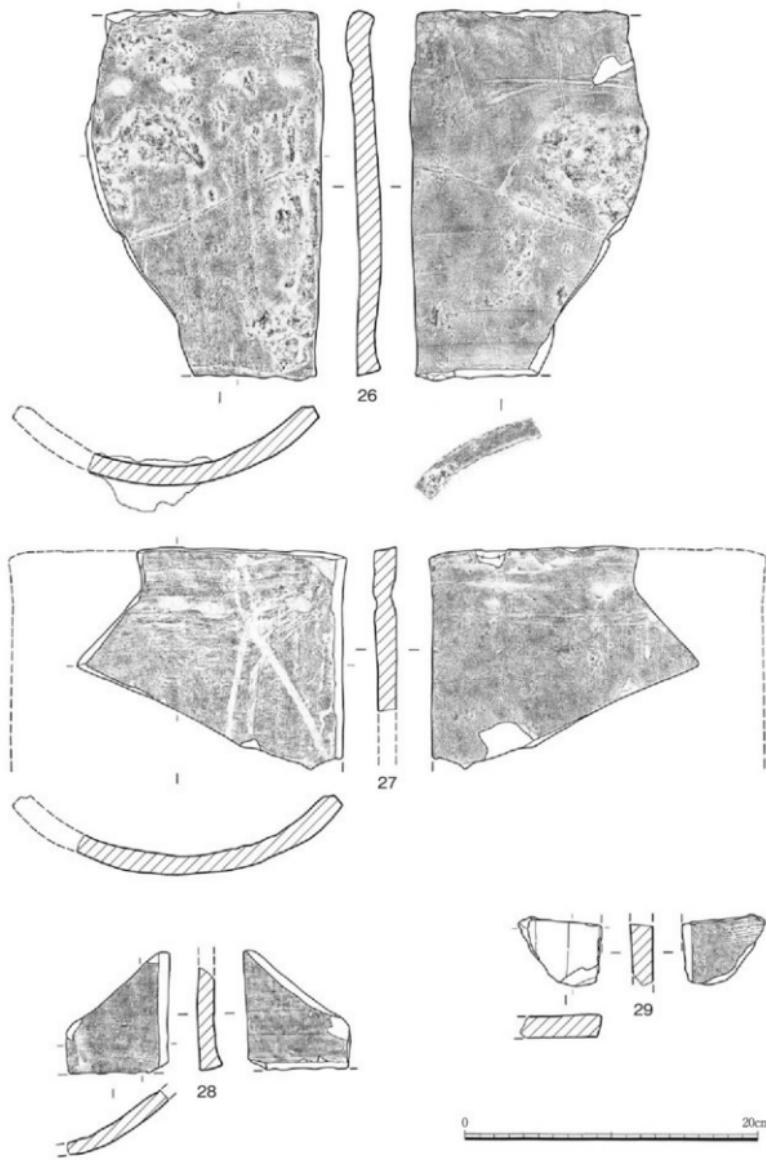


0 20cm

第42図 屋瓦5 明朝系瓦



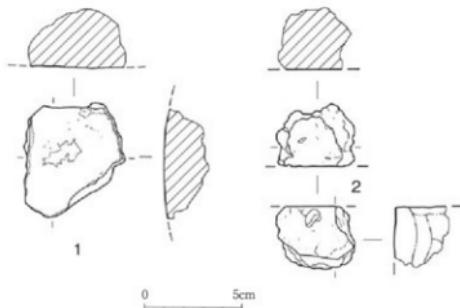
第43図 屋瓦6 明朝系瓦



第44図 屋瓦7 明朝系瓦(26~28)、近代大和瓦(29)

2. 漆喰

漆喰片は21点が出土している。比較的大きな破片を図化した。第45図1は側面観が弧状となる漆喰片である事から守礼門屋根瓦で使用されたものとみられる。全体的に淡い黄白色を呈するが、表面のみ灰色を帯びている。同図1・2は精粗のある石英（丸味あるものと剥片）を多く含み、希にサンゴの細片が混入する。その他に植物痕（イネ科の葉や茎か）が観察できる。同図2は僅かながら1～2mm程度の茶褐色や灰色の粘土塊が観察できる。サイズは縦位が6.8cm、横位で4.4cmを測る。重量55.5g。（平成18スー10 石列排水溝内出土）。同図2の正面は微弱な凹みが多く観察される。上面は丁寧に切り取られたような滑面である。色合いは全体的に乳白色を呈し、上面の一部分が淡い灰色を帯びる。サイズは縦位が3.2cm、横位で4.0cmを測る。重量24.4g。（平成18 シー10トレンチ8 漆喰溜まり出土）



第45図 漆喰



図版 55 漆喰

3. 塼瓦・煉瓦

塼瓦と煉瓦は総数51点出土している。全形を留めるものはなく、すべてが細片で、両者を分けて報告する必要がみられないため、本節ではまとめた形で紹介する。

塼瓦は17点得られた。冒頭にもふれたごとく細片化が著しく、形態的な分類は困難で、僅かに平面形が三角形タイプを認める程度である。一般的な四角タイプや長四角タイプの破片も含まれていると推測されるが、分ける根拠がみつからない。器の色調は灰色12点、赤色5点と2種類が認められ、その製作時期の新旧も窺えるものもみられる。しかし、その量や遺存状況からも周辺地域からの流れ込み、混在した性格がみてとれる。

煉瓦は34点の破片が出土している。基本的には直方体を呈するもので、先の塼瓦とは時代を大きく異にする製品である。素材と焼成から、いわゆる素焼きである酸化焼成の赤煉瓦と、白色の耐火粘土で製作された煉瓦の2種類に分類することができる。とくに後者の耐火粘土製の煉瓦は、表面が明らかに桃色を帯び、使用による加熱痕として判断できる。また、本瓦の表面にスタンプ英文字の一部が残り、上段が「・・A」、下段が「・・TK」と確認された。

第15表 塼瓦・煉瓦出土状況

出土地	種類	埴瓦		煉瓦		合計
		赤色	灰色	赤色	白色	
平成 18年度	シ-10	客土		2		2
		東側 側溝 地山		1		1
		東側 側溝 覆乱		1	3	4
		東側 側溝内 覆乱		1		1
		西側 側溝		12		12
		西側 側溝 裏込	1			1
		側溝 埋土		1	7	8
		側溝内 覆乱			1	1
		客土		1	1	2
		客土	2	4		6
平成 19年度	シ-10	客土		1		1
		客土		1		1
		排水溝 北側 覆乱	1	1		2
平成 19年度	シ-11	北側 11層a 表土剥ぎ	1	1		2
		合 計	5	12	33	1
						51

第16表 塼瓦・煉瓦観察一覧

鉢岡番号 図版番号	番号	系統	種類	残存部	分類	色調	形態、成形、その他の状況	出土地
第46図 図版56	1	湧田系	敷瓦	細片	平面形 不明	灰色	側面の破片。表面はやや光沢があるのに対し、裏面はやや整形が粗くなっている。厚み約4.0cm。	平成19 シ-10 排水溝 北側 覆乱
	2	湧田系	敷瓦	細片	平面形 不明	灰色	側面を一部残す破片。表面はやや滑面を残し、裏面は粒の粗い面をとどめる。厚み約4.0cm。	平成18 ス-10 東側 溝内
	3	非湧田系	敷瓦	細片	平面形 不明	赤色	側面を一部残す破片。側面及び表面は丁寧に滑面仕上げし、裏面はそのまま粗面を残している。厚み約3.5cm。	平成18 ス-10・11 客土
	4	非湧田系	敷瓦	細片	平面形 不明	赤色	側面を一部残す破片。表面は残るが、裏面は大きく剥離する。上記3資料と同様に焼きめ良好である。	平成19 シ-10 排水溝 北側 覆乱
	5	湧田系	敷瓦	細片	三角形 タイプ	灰色	側面2枚を留める三角形タイプの一部資料。隅部分は欠落しているが、残存する側面から45度を推測することができる。側面に糸切りによる擦痕が横走している。 表面はやや凸面になり裏面はやや凹面し粗い仕上になる。	平成18 ス-10・11 客土
	6	湧田系	敷瓦	細片	—	灰色	細片で厚み、幅など計測不能。表面は欠落し、裏面側を残す。器面は全体に磨滅が進んでいる。	平成18 ス-10・11 客土
	7	現代	煉瓦	細片	—	赤色	素焼き煉瓦。平面部と側面部との角度は埴瓦とは異なり、90°を保つ。厚み5.2cmを計測できるが、他の部位が大きく欠落している。劈開面が砂質を呈する。	平成18 ス-10 東側 側溝 地山
	8	現代	煉瓦	細片	—	赤色	素焼き煉瓦。残存する面はいずれも平坦に成形されている。胎土は精練され砂質を呈し、白色の微粒子も多く混じる。厚み約5.2cm。	平成18 ス-10 西側 側溝
	9	現代	煉瓦	細片	—	赤色	素焼き煉瓦。厚み約5.7cm。3面を残し大きく述落した破片である。特徴は先述の7、8資料と同じである。	平成18 ス-10 西側 側溝
	10	現代	煉瓦	細片	—	赤色	素焼き煉瓦。角の部分で厚みや、幅等の計測は不可能。	平成18 ス-10 側溝 埋土
	11	現代	煉瓦	細片	—	白色	表面に「•A」「•TK」スタンプ文字が残る。幅約11cm。厚み約6cm。器表面は半光沢を呈するほど平滑になるが、胎土は白色砂粒を固めたようにみえる。	平成18 ス-10 側溝内



第46図 塗瓦(1~6) 煉瓦(7~11)

第14節 青銅製品・銭貨

1. 青銅製品

今回の調査では出土した青銅製品は少數であり、釘、飾り金具などが確認されている。

1は釘である。頭部は逆L字状に折り曲げており、胸部は四角錐となる。長さ7.0cm、重量6.1g。(平成19 シー10 南側 12層f-1 出土)

2はピンセットである。先端を薄く作る。(平成18 ス-10 客土出土)

3は鏡である。頭部は鍍金される。胸部は曲がっており、先端は欠いている。(平成19 シー11 北側 11層a出土)

4は壇座である。表面は菊花文が施され、鍍金が残る。径は5.1cm。(平成19 シー10 南側 12層f-1 出土)

5は鏡であり、裏面に「爲善最樂」の文字があり、中央に文胸形の紐を通す孔を有する摘みがある。径8.4cm、重量73.1g。(平成19 シー10 南側 12層f-1 出土)

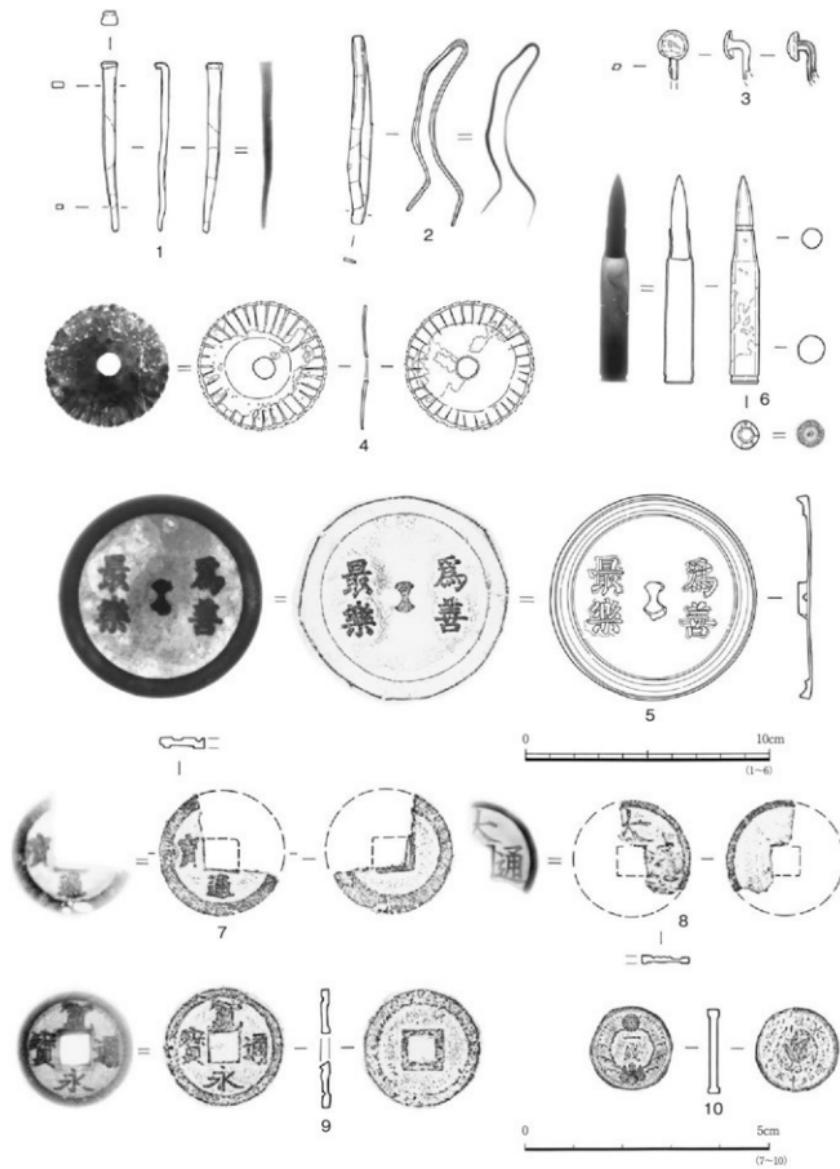
6は銃弾である。底面に文字があるが、判読不能。薬莢と先端は調査後に接合しており、検出時には、薬莢内部に火薬は残っていない状況であった。長さ8.5cm。(平成18 ス-10 東側 側溝 挿乱出土)

2. 銭貨

今回の調査で出土した銭貨は5点であり、全体が残っているものは少なく、鉄種を明確にすることのできるものは、9の寛永通宝と10の一銭のみである。7は、重量1.8g。(平成19 シー10 南側 10層d出土)、8は、重量1.0g。(平成19 シー11 南側 11層b出土)、9は、外径2.4cm、重量3.8g。(平成19 シー10・11表採出土)、10は、外径1.7cm、重量0.9g。(平成19 出土地不明)。

第17表 青銅製品・銅製品・銭貨出土状況

出土地		種類	青銅製品					銅製品			銭貨			合計	
			釘	ピンセツト	紙	壇座	鏡	鉄弾	板状製品	不明	手榴弾片	砲弾片	寛永通宝		
平成 18年度	ス-10	東側 側溝 握乱						1						1	
		西側 側溝								1				1	
		客土		1						1				2	
平成 19年度	シー10	南側 10層d											1	1	
		南側 12層f-1	1			1	1							3	
	シー10・11	表採									1			1	
		北側 11層a			1									1	
	シー11	南側 2層d-3										1		1	
		南側 11層b										1		1	
		排水溝内 11層b						1						1	
		表土剥ぎ							1					1	
グリッド・層位不明											1			1	
合計			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	15	



第47図 青銅製品・錢貨

第15節 鉄製品・坩堝

1. 鉄製品

鉄製品は釘、鍋などが確認されている。

1は釘であり、頭部は逆L字状に作られる。胴部は方形であり、鋸により膨らんでいる。(平成19 シー11 南側 13層a出土)

2は釘であり、頭部は逆L字状に作られる。胴部は四角錐である。(平成19 シー11南側 12層f-1出土)

3は釘であり、頭部は逆L字状に作られる。胴部は方形である。(平成19 シー11南側 13層a出土)

4は釘の頭部若しくは鉄族と思われるが、鋸の影響により、明確ではない。(平成19 シー11排水構内13層a出土)

5～7は釘の胴部であり、四角錐の形状である。5は、平成19 シー11南側 11層b出土。6は、平成19 シー10 北側 11層a出土。7は、平成19 シー11 南側 13層a出土。

8は板状に作られていたものであり、中央部に釘状のものを有する。(平成19 シー11 南側 13層a出土)

9は鍋の把手である。両端を欠損している。断面形は格円となる。(平成18 スー10 西側溝出土)

10は塵である。鋸により先端が明瞭でない。長さ4.6cm。最大幅1.1cm。出土地不明。

11は器種は不明であるが、固定するための孔と材を2箇所確認できる。(平成19 シー10 中央 12層f-1出土)

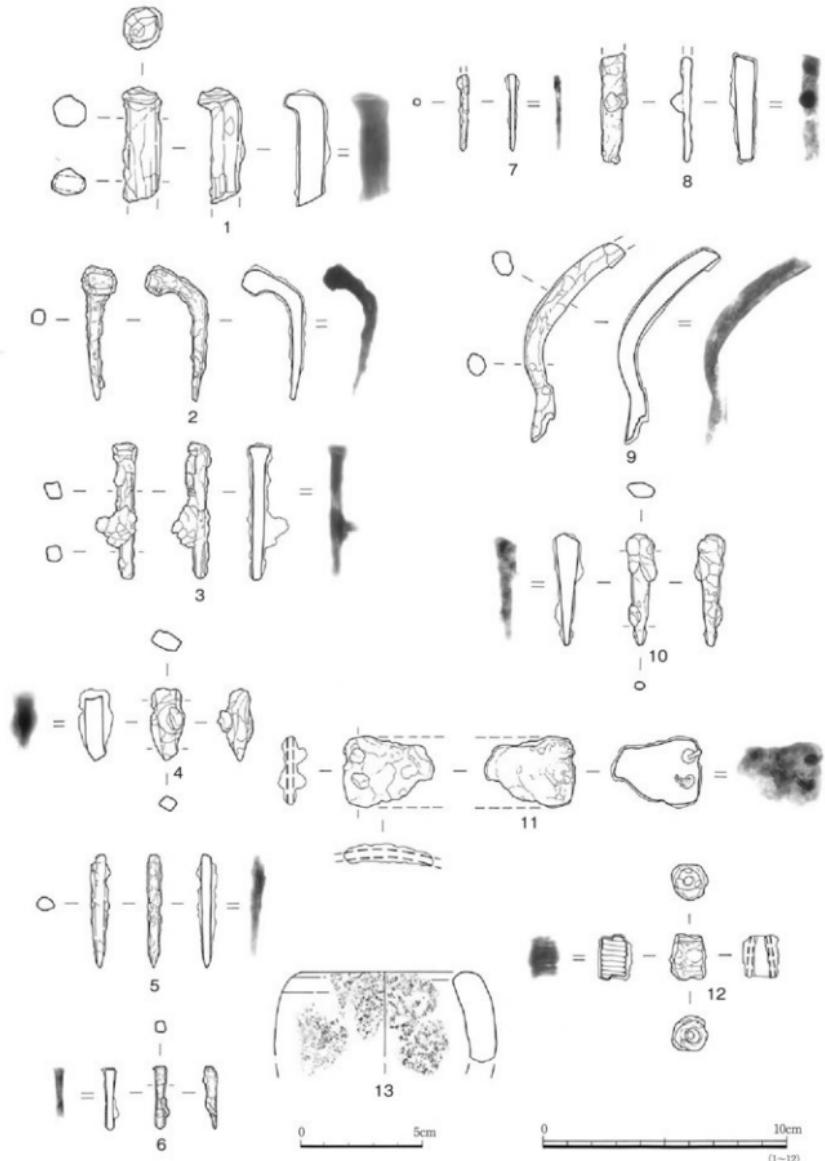
12は筒状に作られたものである。内外面に細かい溝を確認できる。(平成19 シー11 排水構内 11層b出土)

2. 坩堝

全体的に多孔質となっており、内面に鉄と思われる付着物が付く。口径5.2cm。(平成18 スー10 側溝埋土出土)

第18表 鉄製品と不明品出土状況

出土地	器種	鉄 製 品								埋場	不 明	合計
		釘	釘か鉄錐	近現代の丸釘	板状製品	扁平板状製品	鍋の把手	鍋	筒状製品			
平成18年度	シー11 混乱											0
	トレンチ9											0
	東側 側溝内											0
	東側 側溝 混乱											15
	西側 側溝											1
	側溝内 混乱											0
	側溝埋土											3
	客土											1
	不明											3
	客土											1
スー10-11 客土												1
平成18年度 合計		0	0	3	2	0	1	0	0	0	15	1
											1	1
平成19年度	シー10 北側 11層a-3 錫構面							1				1
	北側 11層a											1
	北側 12層f-1											4
	中央 12層f-1											1
	排水溝 岩 南側											1
	排水溝内 10層d											1
	排水溝内 11層b											0
	排水溝内 混乱											1
	北側 10層d											0
	南側 11層b											6
平成19年度	南側 12層f-1											3
	南側 13層a											15
	排水溝内 10層d											2
	排水溝内 11層b											9
	排水溝内 13層a											1
	北壁 トレンチ2											1
	南壁 2層c-3											2
	SD01 北側											0
	炉精2 排水溝内											1
	床面 9層b											0
平成19年度 合計		45	1	0	3	2	0	0	1	8	1	0
										1		1
年度/グリッド/層位不明												1
												87
合 計		45	1	3	5	2	1	1	1	8	16	1

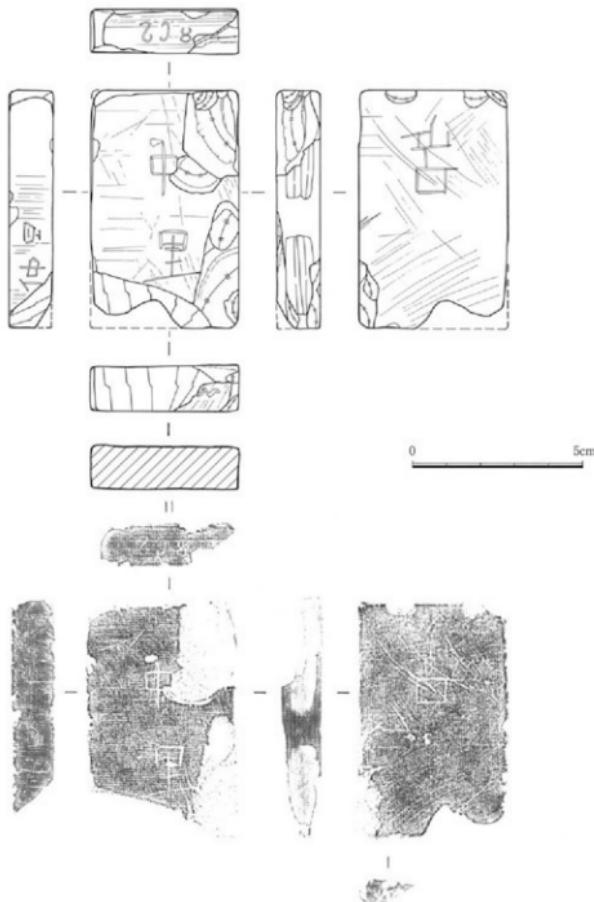


第48図 鉄製品・坩堝

第16節 石製品

1. 琥珀

表面に「中里」、左側面に「仲里」、上部に「8C2」の銘を有する。右側面は削られている部分がある。素材は粘板岩。長さ7.0cm、幅4.3cm、厚さ1.3cm。(平成18年10・11月出土)

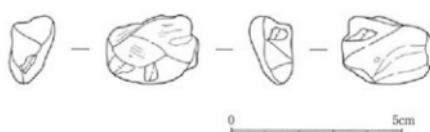


第49図 琥珀

2. 擦石

破片資料1点のみが得られている。軽石製のもので、主に3面に擦面が認められる。石材が軽石であることから、その軟質を生かして鉛落としなどに使われたものと思われる。沖繩の近世遺跡で散見される資料で、これまでの綾門大道の調査では出土していないが首里城内の調査では黄金御殿地区や書院・鎮之間地区に認められる（羽方・金子編2005）。ちなみに現代においても軽石は水気を含ませて金属や水場の鉛び落としに用いられる。軟質であることから傷付けることなく擦れる点で有効である。

なお今日では軽石は垢擦に用いられる場合も多く、江戸遺跡中でも尾張藩上屋敷跡・同下屋敷跡で出土しているが（内野ほか編2006、及川ほか編2008）、県内での出土例は皆見の限り認められない。残存長2.0cm、残存幅2.6cm、重量1.6g。（平成19 シー10 南側12層f-1 出土）



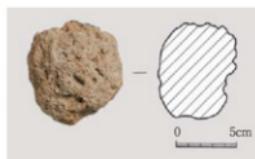
図版59 擦石



図版59 擦石

3. 球状石製品

おそらく完形に近いと思われる1点が得られている。形状は略球状で、全周に渡って敲打痕が残り、多面体を呈している。その形状から研磨調整前の球状石製品と思われるが確認を得ない。石材は細粒砂岩（ニーピヌフニ）。重量56.0g。（平成19 シー11 北側 11層a出上）



図版60 球状石製品

第17節 不明石造製品・石材

今回調査では425点の石材が得られた。これらを仔細に観察したところ、一部に面の残るもののが認められた。よって面のあるものとないものとを別々に第19表に示した。

面の残る石材は22点あり、鑿で打ち欠くことによる平坦面やハンマーによる敲打痕が残るもののがみられたが、剥片ないし碎片となっているため詳細な属性は把握できなかった。琉球石灰岩をはじめ、石灰質砂岩（ニーピ）、泥岩（クチャ）、粘板岩、古生代石灰岩がみられた。また特に出土が集中する地点もみられなかつた。このような加工痕を有する石材は、前回調査においても石製品として報告されている。管見の限りでは戦災によって破壊した台座ないしは柱などへの破片と推定される。

加工痕が認められない石材には琉球石灰岩、石灰質砂岩（ニーピ）、変質安山岩、泥岩（クチャ）、方解石、鍾乳石、古生代石灰岩、千枚岩、粗粒変質の安山岩（もしくはヒン岩）、石灰岩質の割れ目堆植物塊、溶結凝灰岩、砂岩、サンゴ石がみられ、全403点が得られた。琉球石灰岩や泥岩（クチャ）は無加工の円錐が主体的であったが、一部剥片や碎片がみられた。それら以外は、石核状の礫と剥片が多量に残されていた。古生代石灰岩と千枚岩が沖縄本島北部で得られる岩石であるのをはじめ、砂岩は慶良間島中北部、粗粒変質安山岩は久米島、溶結凝灰岩は鹿児島県でそれぞれ得られる石材であることから、これらも面の残る石材と同様に石製品もしくは石造物の破片であると思われる。

1. 石柱（第51図、図版58 1, 2）

断面が円形であることから石製の円柱であると認められる資料で、2点が得られた。1は石製円柱の破片で、表面には両側縁中心に敲打痕が残されている。石材は細粒砂岩（ニービヌフニ）。長さ24.9cm、幅29.7cm、厚さ15.6cm。（平成18 シー11 掘乱出土）。2も同様である。前回調査で石柱片と認められる資料は出土していないが、不明石製品の中にこれと同様の資料が存在するものと思われる。長さ26.8cm、幅27.9cm、厚さ10.2cm。（平成18 シー11 掘乱出土）

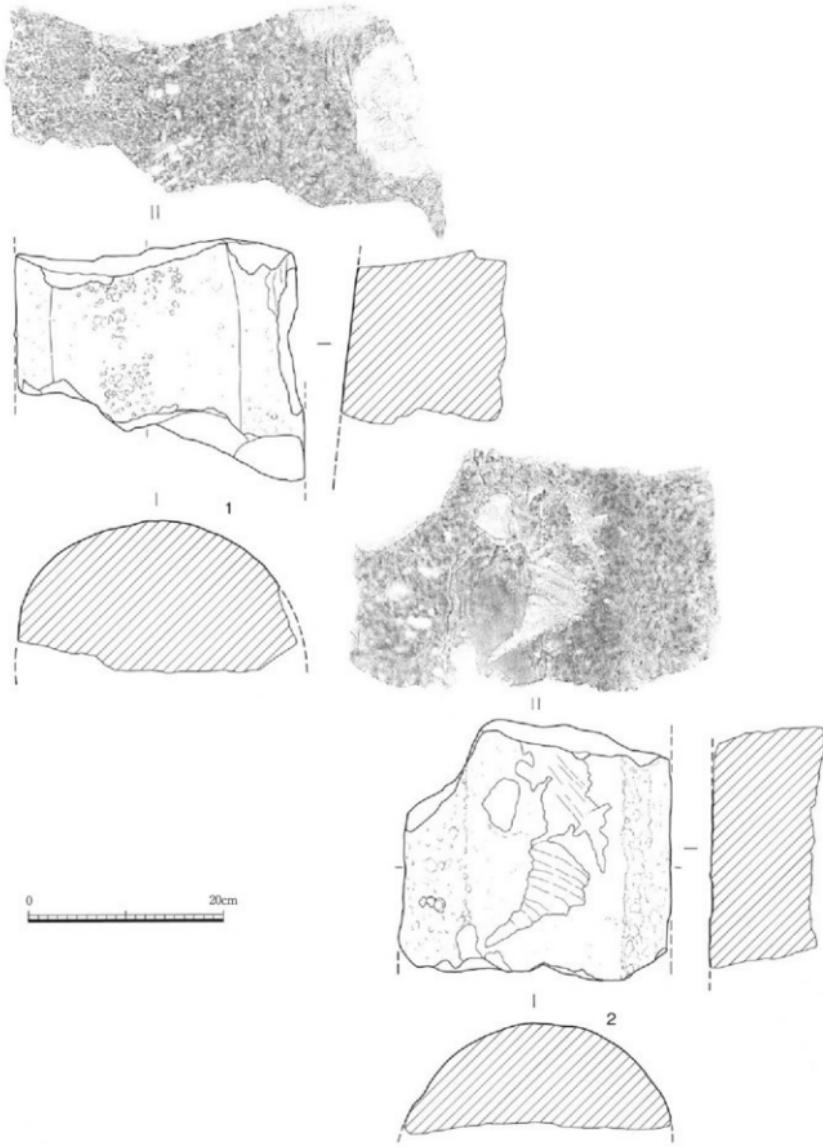
2. 挟み石（第52図3、図版58 3）

表面に加工痕が残り平坦面をなしている。また岡左側面には大きな剥離痕が残り、一方で右側面中央部には円形の凹みが認められる。板状で側面に凹みがみられることと、出土位置から門柱の挟み石であった可能性がある。石材は細粒砂岩（ニービヌフニ）長さ17.6cm、幅11.1cm。（平成18 スー10・11 客土出土）

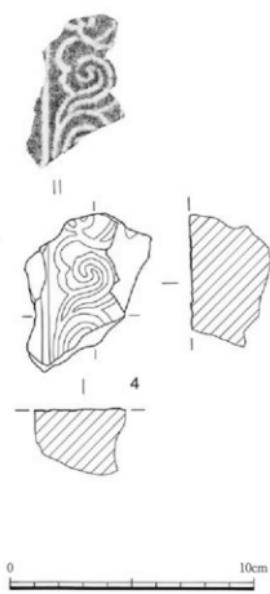
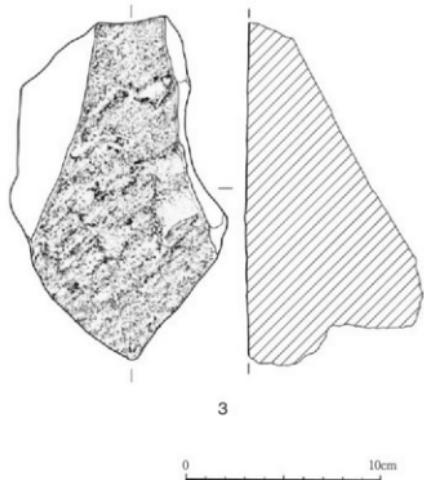
3. 石碑（第52図4、図版58 4）

細流砂岩（ニービヌフニ）製の石碑で、丁寧に研磨された表面に唐草文が刻線される。出土位置や現存する写真と照合した結果から、真珠漆碑の縁飾右側の破片である可能性が高い。真珠漆碑は1522年に真玉道・貞玉橋を敷設した際に設けられた記念碑であることが知られている。太平洋戦争において破壊し、これまで門首部と碑身部片2点が残るのみであったが、この出土によって新たに1破片が加えられることになった。

なお、尚真王代（1477年から1526年）の石碑・石屏子には福建省原産の輝緑石（いわゆる青石）が頻繁に用いられたことが知られる（加藤1985）。神谷厚昭氏によればこの青石利用は1609年の薩摩侵攻以降に断絶し、それまで欄下・敷石・彫刻石に用いられてきた細粒砂岩が石碑にも用いられるようになるという（神谷1999）。当碑は尚真王代末期の製作であるにも関わらず細粒砂岩を素材としており、上記にいわれる該期の石材選択上から言えば、やや価値認識が低いのか、それとも青石・細粒砂岩の使い分けがあったのか。今後の課題である。長さ6.5cm、幅5.2cm。（平成18 スー10・11 客土出土）



第51図 石柱



第52図 挟み石(3)、石碑(4)

第18節 加工痕のある木片・木製加工材・燃り縄

当該製品の出土状況は第20表に呈示したので参照されたい。加工痕のある樹木片2点と守礼門屋根に使用された板材や角材とみられるものを木製加工材として取り扱った。木製加工材は5点を図化した。これらの材質は未同定であるが守礼門の保存修理報告書(註1)によると部位毎に部材を使い分けて使用している。部材をみると「挥」、「楕」、「イーク(ツバキ科:)'の三種類を用いている。燃り縄は炉跡から1点出土している。この燃り縄の素材については分析を委託したが素材を特定するまでには至らなかった。以下に観察事項を記述する。

1. 加工痕のある木片(第53図1・2)

第53図1は樹木の根で下半分に刃物(盤状の工具か、或いは、刀子か)による切痕とみられるものが観察できる。加工の状況から判断すると切断を目的として加工を加えたようであるが、三・四回の切り込みを加えた時点で終了している。残存長68.8cm、最大幅15.5cm、最大厚2.0cm、重量92.3g。(平成19 シー10 北側 11層aより出土)

同図2は上端と下端が斜位に切りられ尖端が尖らせているが、用途不明の資料である。残存長30.0cm、最大幅5.3cm、最大厚4.2cm、重量127.8g。(平成18 シー11掻乱より出土)

2. 木製加工材(第53図3・4、第54図5~7)

同図3は守礼門屋根の垂木として考えられた資料である。平坦に加工された正面と左側面は大部分が腐食によって加工面が損なわれている為、加工痕が観察できない。裏面も腐食によって加工面を損なっているが平坦面で有るため加工面として考えることもできるが判然としない。残存長13.9cm、最大幅7.9cm、最大厚5.49cm、重量146.5g。(平成18 スー10 東側 側溝掻乱より出土)

同図4・5は扁平に加工された板材で、板材の厚みは前者が1.2cm、後者は1.6cmを測った。図5のみ上端を平坦に切り落とした面を残すのみである。図4・5の大部分が腐食などにより明確な成形及び調査痕跡を確認することができなかった。図5の左側は素材の変形による剥離が認められる。図4のサイズは、残存長11.38cm、最大幅4.2cm、最大厚1.27cm、重量11.7g。(平成18 スー10 側溝内掻乱より出土)。図5が残存長13.6cm、最大幅3.45cm、最大厚1.54cm、重量31.2g。(平成18 スー10 東側 側溝掻乱より出土)

第54図6も第53図3と同様の垂木とみられる資料である。正面と右側面は腐食や素材の縮小などで剥離が多く観察できるが明確な加工痕は観察できない。また、左側面と裏面の一部は、面が腐食などにより欠落する。残存長21.9cm、最大幅5.78cm、最大厚5.5cm、重量133.3g。(平成18 スー10 東側 側溝地山より出土)

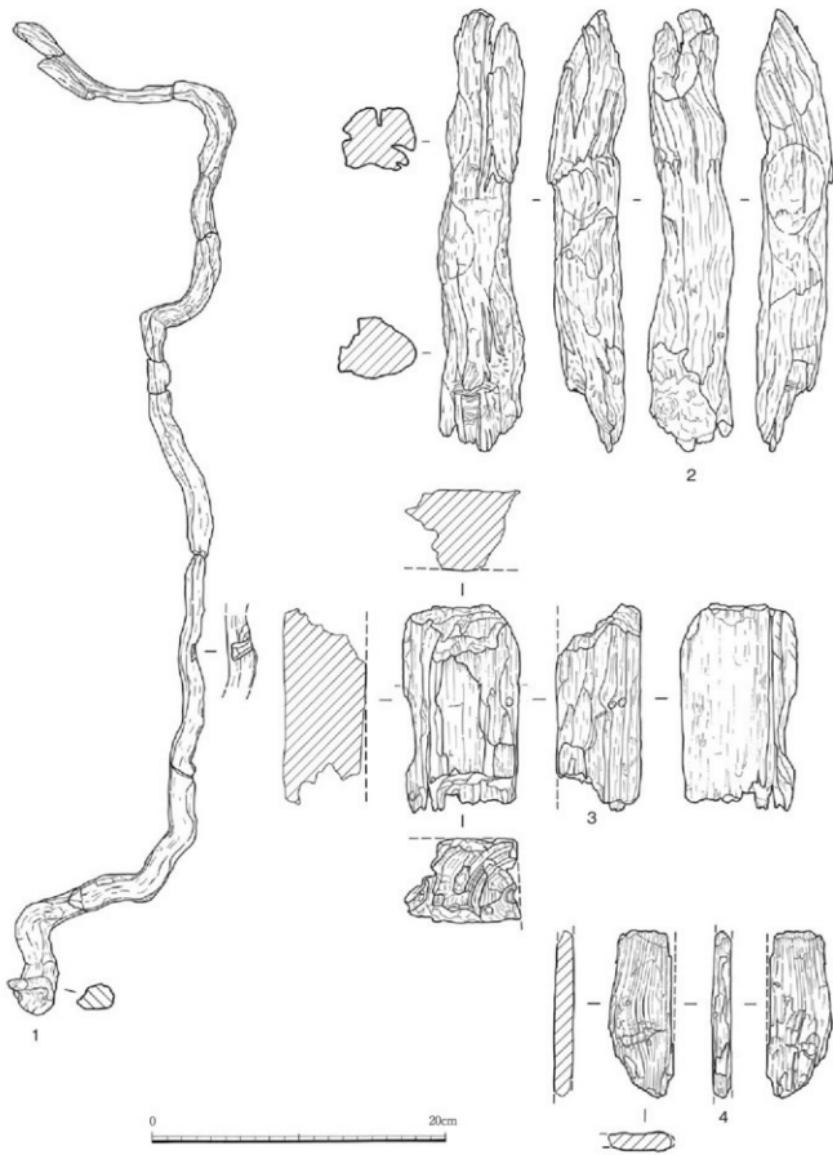
同図7は比較的加工面の保持が良好な板材である。外面は全体的に丁寧な仕上げで研磨様の面となっている。右側面も僅かではあるが研磨様の磨きが残存する。裏面及び右側面の大部分は腐食や素材の縮小などで亀裂が認められる。残存長20.1cm、最大幅4.73cm、最大厚1.24cm、重量20.7g。(平成18 スー10 東側 側溝内より出土)

3. 燃り縄(第54図8)

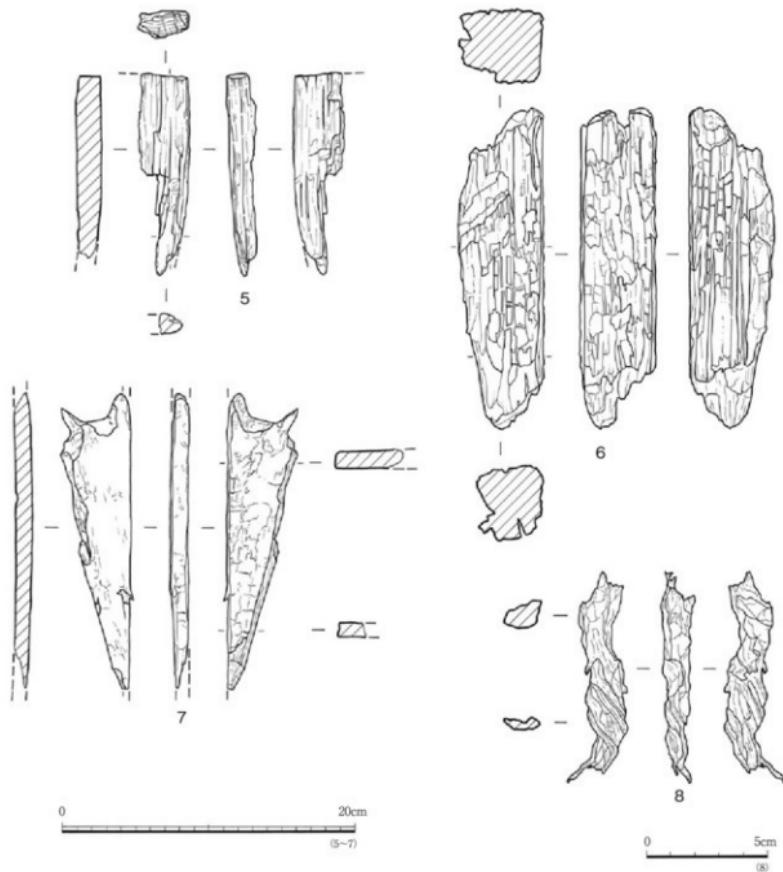
同図8は掘建柱住居跡内の炉跡2より検出された完全に炭化した資料である。検出直後は非常に脆かった為、単独での検出は困難と判断し、上砂(シルト質泥岩の風化土壤で水分を多く含んでいた)と一緒に採取して持ち帰って処理(コニシ株式会社製造の成分酢酸ビニール樹脂41%、水59%の水性ボンド木工用を使用した。処理の際に水性ボンドを沸沸水で溶解し、その後冷却を兼ねて更に水で薄めてから露吹きを喰露状態に設定してから専用に燃り縄を固めていったが、燃り縄は灰に近い状態で炭化していた為、水分を吸収した時点で若干縮小した。)をおこなった。燃り縄は10本程度を単位とする小さな縄を左方向に回転させながら燃って1cm程度の太さの縄を完成させている。なお、燃り縄の一部は現生ショロ(ヤシ科の棕櫚)を想定して分析委託をおこなったが不明であった。燃り縄は残存長8.7cm、最大幅1.8cm、最大厚1.1cm、重量2.3g。(平成19 シー11炉跡2の検出面(暗灰色混疊上層)より出土)

註文献

註1. 沖縄県教育委員会「沖縄県有形文化財 旧首里城守礼門保存修理工事報告書」1993(平成5)年3月。



第53図 加工痕のある木片(1・2)、木製加工材(3・4)



第54図 木製加工材(5~7)、擦り繩(8)

第20表 木製品の出土状況

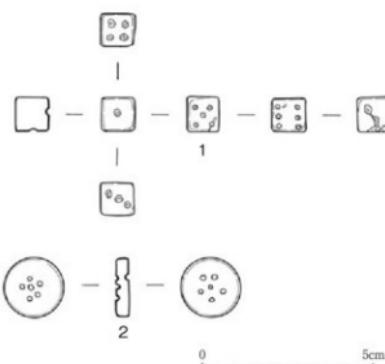
出土地	種類	加工旗のある木片	木製加工材	擦り繩	木板	板材	木材片	木片	不明 (m²とか)	樹種	合計
平成 18年度	シ-10 地上						4			7	11
	シ-11 残瓦	1								1	
	東側 開墾内				3			1		3	4
	北側 開墾上						1			1	
	南側 開墾内 残瓦			2	1	10			2	15	
	東側 開墾内 残瓦			1					9	10	
	東側 開墾地山			1					1		
	残塹内 残瓦					2			2		
平成 19年度	客土				1	4	16	5	5	31	
	平成18年度 合計	1	5	0	2	21	16	5	0	26	76
	北側 11箇a	1							5	6	
	シ-10 南側 12箇F-1								7	7	
	南側 13箇a								1	1	
	北側 未記 11箇a								1	1	
	シ-11 伊豆ノ大島内							6	6		
	伊豆ノ大島内出出土(開削地盤上層)				1					1	
	平成19年度 合計	1	0	1	0	0	0	0	6	14	22
	年度別・樹種不明								23	23	
合計		2	5	1	2	21	16	5	6	63	121

第19節 骨製品

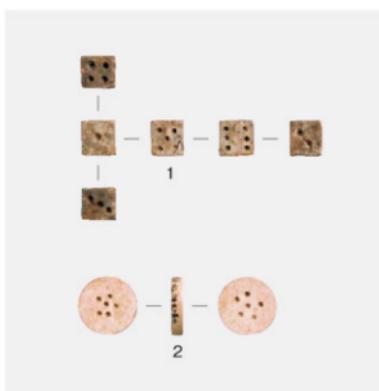
骨製品はサイコロと遊具が1点ずつ出土している。

サイコロ（第55図-1）は各面ともに入念に研磨された後に穴を穿っている。一辺約10mm、重量1.5gの立方体で、対面の目の合計が7になる点は現在のサイコロと同様である（平成19 シ-10 排水溝内 第13層a-1）。

遊具（第55図-2）は厚さ4mmの円盤状に加工し、両面に6個ずつ貫通しない穴を穿ったもので、直径18mm、厚さ4mm、重量1.5gを測る。表・裏・側面とともに光沢が出るまで入念に磨いている。表・裏面はいずれも平坦である。形態の類似する石製品が今帰仁城などで出土しており、遊具としての機能が考えられる（1986上原）（平成19 シ-11 排水溝内第13層a-1：炉跡、2）。



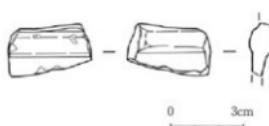
第55図 骨製品



図版 63 骨製品

第20節 ゴム製品

第56図は表裏両面が凸面となっていることから特殊なゴム製品として判断し、実測を試みたが観察や検討の結果、戦後の小型バックホウ、若しくは小型の不整地運搬車などのゴム製キャタピラーの破片の可能性が高いことが判明した。縦1.87cm、横3.39cm、最大厚1.02cm、最小厚6.1cm。重量8.1g（平成19 シ-11 路盤材より出土）。



第56図 ゴム製品



図版 64 ゴム製品

第21節 貝類遺存体

平成18・19（2006・2007）年度の首里城跡守礼門東地区・真珠道及び周辺地区より出土した貝類は巻貝13科23種類、二枚貝8科12種の合計21科35種が確認されている（第22・23表）。

貝類の出土状況から興味深いのは、平成19年度の調査区シー11グリットから検出された練門大道跡東側排水溝（SD01）内からヤマタニシ科のオキナワヤマタニシ、ナンバンマイマイ科のシュリマイマイやキセルガイ科のツヤキセツガイが集中して出土している事から排水溝及びその周辺にあった落ち葉やコケなどを食したことによるものではないかとも考えられるが、死殻が降雨などで流されて排水溝内に自然に堆積したものかもしれない。

巻貝の出土状況を第22表からみると推定された個体数は、173個体を数えている。この中には戦後、人間によって持ち込まれたアフリカマイマイ11個体を除くと、個体数162個体となる。162個体中で最も多く出土しているのがヤマタニシ科のオキナワヤマタニシが103個体（63.5%）と6割を占めている。これにオキナワヤマタニシと同じように陸域の林内・林縁部に生息するシュリマイマイ（1個体）、ツヤキセツガイ（1個体）を加えると64.8%を占める。残りの35.2%が外洋・内湾の貝種となる。

近接する平成17年度に報告をおこなった「真珠漢碑文」台座跡及び周辺地（K）では、破片総数（204片）の内、大型巻貝のリュウテン科ヤコウガイの殻（139片）と蓋（26片）が全体の8割を占めていた（註1）。前者は自然堆積によるものであり、後者が人為的に他所から持ち込まれた土砂（客土）に混入していたものと解されるところである。次ぎに第23表より二枚貝の個体数をみると39個体が得られている。その内、最も多く出土している貝殻はマルスダレガイ科のアラスジケマンガイであり22個体を数えている。アラスジケマンガイが全個体数の56.4%を占めている。

貝類の生息地分布で陸域の林内・林縁部に生息する二枚貝（オキナワヤマタニシ、シュリマイマイツヤキセツガイ、アフリカマイマイ）を除く96個体中、最も多く採集されたのが、生息場所（第21表）のⅢ河口干潟・マングローブ域（1潮間帯中・下部、c 岩礁底、砂泥底、砂底）に生息するマルスダレガイ科のアラスジケマンガイ22個体（22.9%）であった。次ぎにⅠ外洋・サンゴ礁域の垂潮間帯上部礁底、砂底、泥底に生息するソデボラ科マガキガイの7個体（7.29%）、順次、Ⅱ河口干潟・マングローブ域潮間帯中・下部転石に生息するサザエ科カンギクの5個体（5.2%）とアマオブネガイ科マルアマオブネ4個体（4.1%）であった。

グスク時代に特徴的なアラスジケマンガイの採集が目立ち、次ぎに小型のカンギクやマルアマオブネのようである。

第21表 貝類生息場所類型表

外洋～内湾		水 深	底 質
I 外洋—サンゴ礁域	0	潮間帶上部（1ではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a 岩礁／岩盤
	1	潮間帶中・下部	b 転石
II 内湾—転石域	2	亞潮間帶上部（1ではイノー）	
	3	干瀬（1にのみ適用）	c 礁面およびその下部
III 河口干潟—マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	
	5	止水	d 植物上
IV 淡水域	6	流水	
	7	林内	e 淡水の流入する礁底
V 陸域	8	林内・林縁部	
	9	林縁部	
	10	海浜域	
VI その他	11	打ち上げ物	f 化石
	12	化石	

注:第〇表は、黒住耐二「貝類遺体からみた伊礼原遺跡」「伊礼原遺跡」北谷町教育委員会2007年3月を参考にして作成。

文献

- 註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第48集「真珠道跡—首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅲ）—」
沖縄県立埋蔵文化財センター2008年3月。

第22表 貝類遺存体出土状況(巻貝)

種類	科名	貝種名	生息地	出土地	平成18年度							
					シ-10			シ-11		ス-10		
					7期b トレンチ8	客土	複合	西側 側溝	西側 側溝裏込	完形	破損	完形
1	ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	I-2-a									
2		ヤコウガイ	I-4-a					1	1			
3		ヤコウガイの蓋	I-4-a									
4	サザエ科	チャウセンサザエ	I-3-a									
5		チャウセンサザエの蓋	I-3-a	1								
6		カシギク	II-1-b									
7	アマオブネガイ科	アマオブネガイ	II-1-b									
8		アマオブネガイ	I-1-b									
9	ヤマタニシ科	オナナワヤマタニシ	V-8					3	1			
10		オナナワヤマタニシ	I-2-c									
11	オニノゾノガイ科	ウニナカニモリ										
12		クリワシカニモリ	I-1-a									
13	ウミニナ科	イボウニナ	III-1-c									
14		ヘタリ	III-1-c									
15	ブートナタリ科	セニンガイ	III-0-c									1
16		オナグロガイ	II-2-c									
17	ソデボウ科	マキギ	I-2-c									
18		ハビビラダカラ	I-1-a									
19		キロダカラ	I-1-a									
20	タカラガイ科	ハバブルユキダカラ	I-3-a									
21		タカラガイ科不明										
22		ベニイモガイ										
23	イモガイ科	タガヤサンミナシ	I-2-c									
24		イモガイ科不明										
25	キセルガイ科	ツガギセルガイ	V-8									
26	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V-9									
27	ナンバンマイマイ科	シリマイマイ	V-8									
28	卷貝不明											
	合計				1	0	0	0	0	5	0	1
	個体数				1		1	1	1	1	1	

種類	科名	貝種名	生息地	出土地	平成19年度							
					シ-11				SD01内 北側			
					SD01内 北側	SD01 北側	SD01内 北側	SD01 北側	蛇跡2 排水溝内	10層d 排水溝	蛇跡2 排水溝	10層d 排水溝
1	ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	I-2-a									
2		ヤコウガイ	I-4-a									
3		ヤコウガイの蓋	I-4-a									
4	サザエ科	チャウセンサザエ	I-3-a									
5		チャウセンサザエの蓋	I-3-a									
6		カシギク	II-1-b									
7	アマオブネガイ科	アマオブネガイ	II-1-b									
8		アマオブネガイ	I-1-b									
9	ヤマタニシ科	オナナワヤマタニシ	V-8	3	4	9		8	7	5	3	1
10		オナナワヤマタニシ	I-2-c									
11	オニノゾノガイ科	ウニナカニモリ										
12		クリワシカニモリ	I-1-a									
13	ウミニナ科	イボウニナ	III-1-c									
14		ヘタリ	III-1-c									
15	ブートナタリ科	セニンガイ	III-0-c									
16	ソデボウ科	オナグロガイ	II-2-c									
17		マキギ	I-2-c									
18		ハビビラダカラ	I-1-a									
19		キロダカラ	I-1-a									
20	タカラガイ科	ハバブルユキダカラ	I-3-a									
21		タカラガイ科不明										
22		ベニイモガイ										
23	イモガイ科	タガヤサンミナシ	I-2-c									
24		イモガイ科不明										
25	キセルガイ科	ツガギセルガイ	V-8									
26	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V-9									
27	ナンバンマイマイ科	シリマイマイ	V-8	1	1	2	1	1	3			
28	卷貝不明				4	0	4	10	0	2	10	8
	合計				4	0	4	10	0	2	10	8
	個体数				4		10		18		4	2

注: 完形と破損を合計し個体数とした。但し、破損でのみ出土した貝種についてには、最少個体数「1」とした。

第22節 脊椎動物遺存体

平成18・19（2006・2007）年度の首里城跡守礼門東地蔵・真珠道及び周辺地より出土した脊椎動物遺存体で注目されたのは、平成19年度の調査区シー11グリッド第13層aより検出された福建柱住居の時期（14世紀終末～15世紀前半頃）でブタの中手・中足骨1点とウシの右手掌骨1点などが出土している。この時期からブタを食する機会が多くなった事を示すのではないかと考えられる。

首里城跡守礼門東地区・真珠道及び周辺地区から得られた脊椎動物遺存体の出土状況については、第24表～第30表に示したとおりである。脊椎動物遺存体を類別に概観すると魚類がサメ目メジロザメ科、スズキ目エフキダイ科ハマフエフキ、ハタ科の3種類であった。鳥類では、キジ目キジ科ニワトリの1種類が確認されている。哺乳類はウマ、ブタ、ウシの3種類であった。

以下、本遺跡から出土した脊椎動物遺存体の種別リストを表示する。

脊椎動物遺存体種名表

A. 脊椎動物部門	A. Phylum VERTEBRATE
I. 軟骨魚綱	I. Class Chondrichthyes
1. サメ目	1. Order Lamniformes
a. メジロザメ科	a. Family Charcharhinidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
II. 硬骨魚綱	II. Class Osteichthyes
1. スズキ目	1. Order Perciformes
a. ハタ科	a. Family Serranidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
b. フエフキダイ科	b. Family Lethrinidae
ハマフエフキ	<i>Lethrinus Nchilensis</i>
III. 鳥綱	III. Class Aves
1. キジ目	1. Order Galliformes
a. キジ科	a. Family Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus gallus</i> var. <i>domesticus</i>
IV. 哺乳綱	IV. Class Mammalia
1. 奇蹄目	1. Order Perissodactyla
a. ウマ科	a. Family Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
2. 偶蹄目	2. Order Artiodactyla
a. イノシシ科	a. Family Suidae
ブタ	<i>Sus scrofa</i> var. <i>domesticus</i>
b. ウシ科	b. Family Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus</i>

第24表 メジロザメ出土一覧

部位	出土地		個数
脊椎骨	平成19 シー-11 東側	13層a	1

第25表 魚骨出土一覧

科種	部位	右/左	出土地	個数
ハマフエフキ	角骨	左	平成19 シー-10 排水溝内 混乱	1
	歯骨	右	平成19 シー-11 SD01内	1
ハタ科	歯骨	右	平成19 シー-11 排水溝南壁 11層b	1
	骨髄核		平成19 シー-10 北側 10層b	1
種不明	骨髄核		平成19 シー-11 北側 10層d	1
	脊結血管開核	-	平成19 シー-10 南側 13層a	1
	脊椎骨		平成19 グリッド・層位不明	1
	脊椎骨～角骨		平成19 シー-11 SD01内	1

第26表 ニワトリ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
上腕骨	右	近位部～遠位端	平成19 シー-11 南壁 9層b	1
尺骨	右	遠位骨端はずれ	平成19 シー-10 排水溝内 11層b	1
脛骨	左	近位骨端はずれ	平成18 スー-10 東側側溝 混乱	1

注 () :破片

第27表 ウマ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
橈骨	左	遠位部	平成19 シー-10 北側 11層a-3 潟構面	1
脛骨	右	近位部	平成19 シー-10 排水溝内 10層d	(1)
足根骨	左	第3	平成19 シー-11 SD01 北側	1

注 () :オース

第28表 ブタ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
下顎骨	左	犬齒	平成19 シー-11 排水溝内 11層b	♂1
	左	-	平成19 シー-11 南側 2層d-3	1
椎体	-	-	平成19 シー-11 10層d	1
肋骨	-	破片	平成19 シー-11 北側床面 11層a	1
肩甲骨	右	遠位端	平成19 シー-11 SK02	1
上腕骨	右	骨体	平成19 シー-10 北側 11層a	1
腓骨	右	近位骨端はずれ	平成19 シー-11 排水溝内 11層b	1
中手骨Ⅲ	左	近位端	平成19 シー-10 南側 10層d	1
対骨	左	膝骨部	平成19 シー-11 北側レーン2 12層e	1
中手・中足骨	不明	-	平成19 シー-11 南側 13層a	1
指骨	左	中節骨	平成19 シー-11 北側 11層a-3 潟構面	1

注 () :破片、() :オース

第29表 ウシ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
棲骨	右	骨体	平成18 スー-10 寄土	(1)
棲骨	左	遠位部	平成19 シー-10-11 混乱	1
椎体	-	棘突起	平成18 スー-11 寄土	1
肋骨	左	-	平成19 シー-10 排水溝内 混乱	①
尺骨	左	遠位端	平成18 スー-10-11 寄土	1
手根骨	右	尺側	平成19 シー-11 北壁 層位不明	1
手根骨	右	第4	平成19 シー-11 南側 13層a	1
指骨	左	基節骨	平成19 シー-11 排水溝内 11層b	1
種子骨	-	-	平成19 シー-10 南側 12層f-1	1

注 () :破片、() :キズあり

第30表 種不明出土一覧

部位	出土地	個数
尾骨	平成19 シー-11 北側床面 11層a	1
不明	平成19 シー-10 南側 10層d	1
	平成19 シー-11 排水溝内 11層b	1

第6章 結語

各章で記したように平成18・19年度に実施した首里城跡守礼門東地区と真珠道跡起点及び周辺地区的発掘調査の成果を報告した。本章では、これらの成果を整理して結びとした。

真珠道跡の発掘調査は、平成15（2004）年度から平成18（2007）年度までの4カ年間に亘って継続的に実施されてきた（註1～3）。また、首里城跡守礼門西側一帯の発掘調査（註4）については平成10（1998）年度から平成12（2000）年度までの三カ年間に亘って実施されてきたが唯一、発掘調査が実施されていない箇所が守礼門そのものである。平成18・19年度に実施した守礼門東地区的発掘調査からすると現在復元されている守礼門は、第VII期（1522年以降～1945年頃の時期）の路盤調査面（平成18年度：第8層b相当、平成19年度：第4層b相当）からすると本来の守礼門は、現在復元整備された闕路面上より下に50cm程度低い位置にあったものとして考えられる。これに関する補足として平成18年度の調査において確認された綾門大道跡南側石塁の延長部分にあたる位置から石塁の根石及び排水溝が検出されている状況からも窺い知ることができる。

現在ある首里城守礼門の復元工事は、1957年8月1日起工し、1958年10月15日に竣工した（註5・6）が、復元工事前の遺構確認調査は実施されていないようである。将来において発掘調査が実施されれば、守礼門全体が50cm程度下がり、首里城歓会門と地盤がほぼ同じ程度の高さとなり、守礼門と歓会門の位置関係において違和感のないものになるものとして考えられる。

平成18年度の発掘調査により守礼門南東側より綾門大道跡南側石塁の延長部分から石塁の根石と共に附属する排水溝が検出されると共にこの石塁の根石と排水溝に対ししばしば直角に南側に折れるような形で真珠道の起点部分が発見されたことは大きな成果であった。また、平成17年度に確認された「真珠淡碑文」台座跡と平成18年度に検出された真珠道の起点部分の位置関係を基にして、昭和11・12年（1936・1937）年の二カ年に跨って実施された旧国宝守礼門解体修理された際に文部省文部技官の森 政三氏によって作製された平面図（第11図）と重ねた結果、ほぼ同じ状態にあることが判明した。森 政三氏の図面を基に遺構を重ねて検討を加えて作製したのが第57図である。第57図からも判るように未調査部分の県道49号直下には「国王頌徳碑」とび台座跡が発見される可能性は高い。

平成19年度の調査地区内で最も古い遺構は、14世紀終末～15世紀前半頃に構築された掘建柱住居跡一棟（南側を戰災で破壊）と住居跡に附属する屋内炉7基、そして屋外炉1基が存在する。屋外炉の時期については掘建柱住居が存在していた時期以降から綾門大道の北側排水溝構築以前の時期頃であることから15世紀初頭～前半頃に位置づけたいところである。

ところで守礼門から東側の綾門大道延伸部分を普請する際に地鎮具として埋納されたとみられる「為善最榮」銘入り青銅鏡と近接して出土した鍛金された菊花文の金物が二点（いわゆるシーアー10第12層f-1：シリト質泥岩の風化土壤に赤土が混入）得られているが埋納の痕跡を示す土壠やピットなどの掘り方は確認できなかったことから判断すると直接整地を予定している面（第12層f-1）に青銅製鏡や鍛金物を置いたか（実際には布袋などに入れたか）。或いは浅く掘り込んだ深みのような小さな穴に入れて埋納したのかもしれない。

次に出土した主な遺物を取り上げてみることにする。

中国産の青磁で注目されたのが第19図1の碗で口縁が強く内側に「く」の字状折れた鍋運弁文鉢がある。龍泉窯の優品とみられ14世紀前半頃の製品とみられるものが伝世されているようである。このような優品の例は「真珠淡碑文」台座跡のセー11トレーナー①の第1層及び第3層から出土していて、過年度に報告（註3）した青磁瓶と比較した場合、両者は種色の質も素地も近似する。そのほかラマ式逆弁文瓶（註7）などが確認されている。

白磁では留青台の八角杯（15世紀前半～中頃）や蛇の目高台の外反皿（15世紀中頃）などが出土している。明青花の中には15世紀中頃の靈堂手文瓶が1点確認されていて見込み「梅月文」を刻いている（註8）。

褐釉陶器では、胴部に絵文を貼り付けた壺や鉢（洗）の底部が出土している。胴部に絵文を貼り付けた例は、首里城京の内跡（註9）、与那国島与那原遺跡（註10）などから報告されている。鉢（洗）の復元資料は、竹富島新里村跡（註11）から多く得られている。

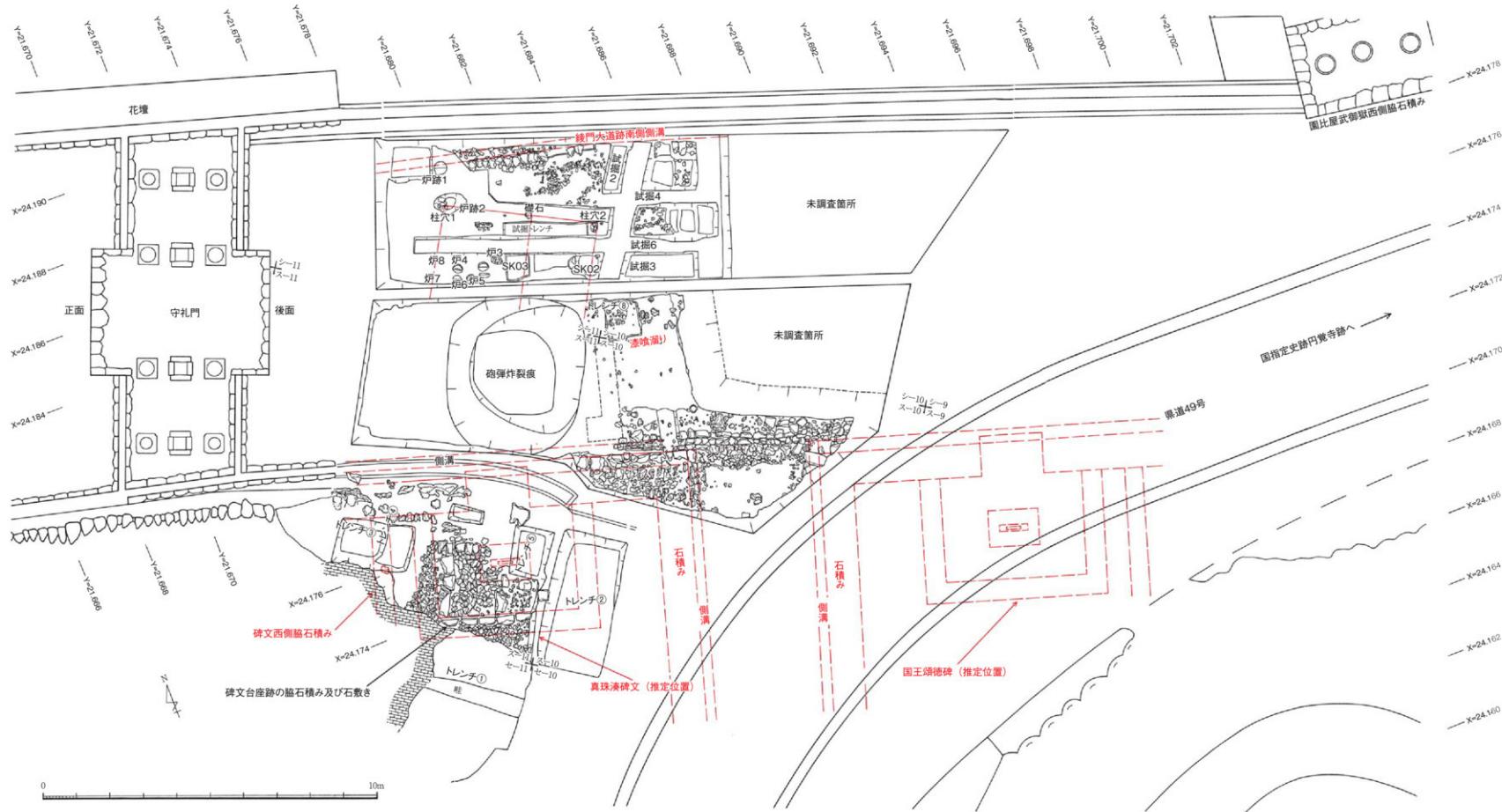
本土産陶器で管見の限りにおいてこれまで報告例のなかった信楽焼の壺（16世紀後半～17世紀）が確認されている。その他に注目された資料は骨製のサイコロ（排水溝内 第13層a～1）と円形遊具（第8層：灰色混雑土層）が各々1点ずつ出土している。サイコロの出土例は勝通城跡（註12）や那覇山渡地村跡（註13）などから出土している。骨製の円形遊具の出土例は勝通城跡（註12）で類似資料が1・2点あるのみで、報告によると「盤上遊具の駒」とあり、その素材は石、貝、土などを用いたものが31点出土しているようである。本遺跡と類似するものは、素材に石を用いたものが今帰仁城跡（註14）で1点出土している。

註文献

- 註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第32集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（I）－』
沖縄県立埋蔵文化財センター2006（平成18）年3月。
- 註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第42集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（II）－』
沖縄県立埋蔵文化財センター2007（平成19）年3月。
- 註3. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第48集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（III）－』
沖縄県立埋蔵文化財センター2008（平成20）年3月。
- 註4. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集『鏡門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター2003（平成15）年3月。
- 註5. 沖縄県教育委員会『沖縄県有形文化財 首里城守礼門保存修理工事報告書』1993（平成5）年3月。
- 註6. 許4の裏表紙に1958（昭和33）年に設置された青銅製の説明板「首里城守禮門復原工事記」の拓影を掲載してあるので参照されたい。この青銅製説明板は、現在守礼門南側の石積みに嵌め込まれている。
- 註7. 金城亀信『青磁ラマ式蓮弁文碗について』『貿易陶磁研究』第20号 日本貿易陶磁研究会 2000年9月。
- 註8. 亀井明徳『首里城京の内川土陶瓷器』特別企画展『首里城京の内川－貿易陶磁からみた大交易時代－』
沖縄県立埋蔵文化財センター2001年3月。
- 註9. 沖縄県文化財調査報告書 第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会
1998年3月。
- 註10. 与那国町文化財調査報告書 第2集『与那原遺跡－個人農家の畠地改良等に伴う緊急発掘調査報告－』
与那国町教育委員会1988年3月。
- 註11. 沖縄県文化財調査報告書 第97集『新里村遺跡－竹富島一帯道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』
沖縄県教育委員会1990年3月。
- 註12. 勝連町の文化財第11集『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』沖縄県・勝連町教育委員会
1990年3月。
- 註13. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集『渡地村跡－鹿港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』
沖縄県立埋蔵文化財センター2007（平成19）年3月。
- 註14. 今帰仁村文化財調査報告書 第9集『今帰仁城跡発掘調査報告』今帰仁村教育委員会1983年3月。

参考文献

- ・藤岡一『明の染付』第42巻 陶磁体系 株式会社平凡社 1980年10月1日初版第三刷。
- ・上原 静『グスク時代・近世川土の円盤状製品』『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 読谷村教育委員会歴史民俗資料館編 1986年3月。
- ・上原 静『円盤状製品その後の資料』『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第13号 読谷村教育委員会 歴史民俗資料館編 1989年3月。



第57図 平成17～19年度の遺構と真珠浜碑文及び国王頌徳碑の位置関係(第11図を基に重ねて微修正)

【参考文献】

第2章 第2節

沖縄県教育委員会文化財調査報告書第69集「金石文—歴史資料調査報告書V」沖縄県教育委員会 1985(昭和60)年3月。

沖縄島上木建築物「首里城公園基本設計」昭和63(1988)年3月。

沖縄タイムス社「沖縄大百科事典」1983年(5月30日)。

沖縄県教育委員会「沖縄県歴史の道調査報告書－真珠道・八吉宮参道－」1984(昭和59)年3月。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集「練門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書」J 2003(平成15)年3月。

那覇市教育委員会「那覇市歴史地図－文化財添付調査報告書－」1986(昭和61)年3月。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第48集「真珠道跡－首里城跡真珠道跡(区別調査報告書Ⅲ)」2008年3月。

第5章 第9節 土器

加藤祐三著『鹿児・沖縄岩石植物図鑑』株式会社新星図書出版 昭和60(1985)年2月7日 初版第1刷発行。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集「練門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書」J 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003(平成15)年3月。

第5章 第10節 陶質土器

沖縄県文化財調査報告書 第12集「萬古白端(II)－県庁会議室軒邊設に係る発掘調査－」沖縄県教育委員会 1995(平成7)年3月。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集「練門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－」沖縄県立埋蔵文化財センター 2003(平成15)年3月。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集「渡地村新一塩浦道路那覇1号線傍壁に伴う緊急発掘調査報告－」沖縄県立埋蔵文化財センター 2007(平成19)年7月。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第48集「真珠道跡－首里城跡真珠道跡地区発掘調査報告書(Ⅲ)」J 沖縄県立埋蔵文化財センター 2008(平成20)年3月。

那覇市文化財調査報告書 第23集「那原古窯跡－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査－」那覇市教育委員会 1992(平成4)年3月。

那覇市文化財調査報告書 第27集「豊盛古窯跡Ⅱ－那覇市水道局上水道管改良工事に伴う緊急発掘調査報告書－」那覇市教育委員会 1995(平成7)年3月。

那覇市文化財調査報告書 第38集「那原古窯跡Ⅰ－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査－」那覇市教育委員会 1997(平成9)年3月。

第5章 第12節 円盤状製品

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集「渡地村跡－鹿嶋道路那覇1号線傍壁に伴う緊急発掘調査報告－」沖縄県立埋蔵文化財センター 2007(平成19)年7月。

第5章 第16節 石製品

安里 道「琉球王國石碑文様の変遷 日韓双頭雲文から宝珠双龍文へ－」『那須市美術館紀要』第1号 那須市教育委員会 1991(平成3)年3月。

沖縄県文化財調査報告書第69集「金石文－歴史資料調査報告書V」沖縄県教育委員会 1985(昭和60)年3月。

国建編「自工御使碑・宝珠流傳碑文復元事業報告書」那屋張瀬元則成会 2006(平成18)年2月。

東京都埋蔵文化財センター調査報告 第219集「尾張藩松川家下墨皿等V」東京都埋蔵文化財センター 2008(平成20)年3月。

東京都埋蔵文化財センター調査報告 第180集「尾張藩上野敷御置屏」東京都埋蔵文化財センター 2006(平成18)年2月。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第28集「首里城跡－書院・鉢之門地区発掘調査報告書」J 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年3月。

第5章 第19節 骨製品

上原 静「グスク時代・近世出土のH型状貝品」『読谷村立歴史民俗資料館記要』第10号 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館 1986年3月。

上原 静「古調査品その他の資料」『読谷村立歴史民俗資料館記要』第3号 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館 1989(平成元)年3月。

今帰仁村文化財調査報告第9集「今帰仁城跡発掘調査報告I」今帰仁村教育委員会 1983(昭和58)年3月。

今帰仁村文化財調査報告第14集「今帰仁城跡発掘調査報告II」今帰仁村教育委員会 1991(平成3)年3月。

第5章 第20節 ゴム製品

平成20年度版「建設機械等機料表」社団法人 日本建設機械化協会 2008(平成20)年4月24日。

第5章 第21節 貝類遺存体

黒田耐二・金城亀吉「I. 豊見城村の長瀬、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類」「豊見城村の豆瀬」豊見城村教育委員会 1988(昭和63)年3月。

第5章 第22節 脊椎動物遺存体

金子浩昌「首里城・奉神門跡く出土の脊椎動物遺体」「首里城跡 鉄油跡・奉神門跡の遺構調査報告」沖縄県教育委員会 1998(平成10)年3月。

金子浩昌「第2回 今帰仁城跡出土の脊椎動物遺骸」「今帰仁城跡発掘調査報告II」今帰仁村教育委員会 1991(平成3)年3月。

第31表 遺物出土状況a

出土地	種類	青磁	白磁	染付	無地釉	天目	中国茶 陶器	日本茶 陶器	洋漆器 漆器	漆器 漆器	陶質 漆器	瓦質 漆器	陶質 漆器	漆器 漆器	土器	陶質 漆器	漆器 漆器	石材	石製品	木製品 木製品	竹製 竹製品	貝製 貝製品	合計	
レーベル8 78件	1	1																						38
レーベル8 客土																								13
現:土																								1
樹籬 墓上																								11
客土																								4
現:瓦																								1
現:山																								1
客土																								1
現:瓦																								12
現:木明																								46
現:石列 磐瓦																								4
現:瓦 地内																								2
現:瓦 漆器 瓦																								20
現:瓦 地内 磐瓦																								44
現:瓦 地内 磐瓦																								33
現:瓦 地内																								1
現:瓦 地内																								63
現:瓦 磐瓦 瓦上																								1
現:瓦 地内																								1
現:瓦 地内 磐瓦																								7
現:瓦 地内 磐瓦																								6
現:瓦 石列																								1
現:瓦 地内																								23
現:瓦 磐瓦																								3
現:瓦 瓦上																								81
現:瓦 地内 磐瓦																								2
現:瓦 地内 磐瓦																								1
現:瓦 地内																								38
現:瓦 地内																								106
現:瓦 地内																								3
現:瓦 地内																								246
現:瓦 地内 磐瓦																								1
現:瓦 地内																								1
現:瓦 地内																								3
現:瓦 地内																								3
現:瓦 地内																								31
現:瓦 地内																								1
現:瓦 地内																								1
現:瓦 地内																								1
現:瓦 地内																								3
現:瓦 地内																								3
現:瓦 地内																								877

第7章 自然科学分析

平成11年度首里城公園綾門大道（守礼門西側）地区発掘調査に伴う自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

現在、国営首里城公園では、史跡整備が進んでいるが、今回は県営首里城公園内の綾門大道（守礼門西側）地区に関する調査を行う。文献によれば、綾門大道の土版を包める際にはネナシカズラの液が用いられたとされる。今回はこれに関する検証ならびに周辺環境の復元を目的として、採取された土版の土壤から各種類の分析（赤外分光分析、花粉分析、植物珪酸体分析、脂肪酸分析）を実施した。

1. 試料

試料は、綾門大道（守礼門より西側）の上版にあたる部分から採取された6点である。試料の詳細や分析項目については、第32表に示す。

2. 分析方法

(1) 花粉分析（図版68）

試料約10gについて、塩酸による塩類の除去、水酸化カリウムによる泥化、飼別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

(2) 植物珪酸体分析（図版69）

試料約5gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理（80W, 250KHz, 1分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタンゲステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、ガバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、ブリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の莖部（莖身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の橢円形胞に由来する植物珪酸体（以下、橢円形胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐浦（1986）の分類を参考にした。

(3) 脂質分析

分析は定法（坂井ほか、1996）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。

(4) 赤外分光分析

105°Cで2時間乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉碎（200 mesh以下）した。この微粉碎試料20~30mgをシュウ化カリウム（KBr）と1:100の割合で秤量し、メノウ乳鉢で粉碎・混合した後、ミニハンドプレス（島津製作所製MHP-1）で加圧成形した。

加圧成形した試料を次の条件により測定した。

装置：島津製作所製 FTIR-8100A

測光模式（Measuring mode）：%T

分解能（Resolution）：4.0cm⁻¹

積算回数（No. of Scan）：40回

ゲイン（Gain）：自動

ミラー速度（Detector）：2.8mm/sec

第32表 分析試料一覧

番号	試料名	分析項目			
		花粉分析	植物珪酸体分析	赤外分光分析	脂質分析
1	茶褐色混土レキ層（第一レキ敷層）	○	○	○	○
2	白褐色レキ層（第二レキ層）	○	○	○	○
3	II地区4層 暗褐色混土レキ層	○	○	○	○
4	II地区黒褐色混土レキ敷層	○	○	○	○
5	灰褐色粘質土層	○	○		
6	II地区①区赤褐色土層（黒色ブロック混じり造成層）	○	○		

アボダイズ関数 (Apodization) : Happgenzel

測定範囲: 4600~400cm⁻¹

測定方法: KBr 錠剤法

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を第33表に示す。全体的に保存が悪く、種類数は少ない。花粉化石は試料番号2と5で多く検出される。2試料とともにマツ属が多く、ウコギ科・イネ科・カヤツリグサ科・タンボポ科などを伴う。その他の試料では、検出数が極端に少ない。

(2) 植物珪酸体分析

結果を第34表に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、検出個数が少ない。また保存状態も悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

各試料ではイネ属の短細胞壁珪酸体が全ての試料で検出され、稲穂殻に形成される類似珪酸体も稍に検出される。またタケアキ科やヨシ属、イチゴツナギアキ科がわずかに認められる。

(3) 脂質分析

結果を第58図に示す。図では左側が脂肪酸組成、右側がステロール組成を示す。脂肪酸では試料1~4においてC14:0(炭素数と二重結合数を示す)のミリスチン酸、C16:0のパルミチン酸、C18:0のステアリン酸、C18:1のオレイン酸が比較的多い。一方、ナシカズラではαC18:3のαリノレン酸が42.34%と最も多く、C14:0のミリスチン酸、C18:1のオレイン酸、C18:2などが比較的多く、試料1~4の脂肪酸組成とはやや異なる。ステロール組成では試料1・3・4において、コプロスタノール(Copro)、コレステロール(Chol)、スチグマステロール(Ergo)、カンバステノール(Camp)、シトスタンノール(Stigma)などが少量ずつ認められる。また、試料2ではなくコレステロール(Chol)、ナシカズラではシトステロール(Sito)が最も多い。

(4) 赤外分光分析

赤外線吸収スペクトルを第59図に示した。試料はいずれも同じスペクトルパターンを示すことから、これらは同質の物質であることが指摘される。

主な吸収帯は1430, 880, 710cm⁻¹の強い吸収帯および3430, 2980, 2870, 2510, 1800, 1090, 1030, 530, 470cm⁻¹の吸収帯である。これら吸収帯のうち2980, 2870, 2510, 1800, 1430, 880, 710, 530, 470cm⁻¹の吸収帯は炭酸カルシウム(CaCO₃)、3430cm⁻¹の吸収帯は試料に付着する水分子、1090, 1030, 530, 470cm⁻¹の吸収帯はケイ酸塩鉱物による吸収と推定される。

4. 考察

土版試料の赤外線吸収スペクトルの結果を第59図よりみると、地質母材である石灰岩、混在するケイ酸塩鉱物(1090, 1030, 530, 470cm⁻¹)およびこれらに付着する水分子(3430cm⁻¹)の吸収が顕著に認められたものの、有機物の存在を示唆する吸収帯は認められない。また、第58図の脂質分析においても、ネ

第33表 花粉分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6
木本花粉							
マキ属	-	1	-	-	-	-	-
マツ属	-	192	5	4	200	37	-
ウコギ科	-	9	-	-	33	-	-
カキ属	-	-	-	-	1	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	2	-	-
草本花粉							
イネ科	-	20	-	6	3	1	-
カヤツリグサ科	-	6	-	-	3	-	-
サンエタデ節ウナギツカミ節	-	-	-	-	1	-	-
アザガ科	-	5	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	1	-	-
アブナナ科	-	1	-	1	-	-	-
バラ科	-	2	-	-	1	-	-
マメ科	-	3	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	-	1	-	-	-	-	-
アリトクサ科	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	-	-	-	-	3	-	-
キツネノハグ属	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	2	-	-
タンボポ科	-	15	1	-	-	-	-
不明花粉	-	4	-	-	1	-	-
シダ類胞子							
ミズワカ属	-	-	-	-	1	-	-
他のシダ類胞子	-	109	7	167	129	140	-
合計		0	202	5	4	236	37
木本花粉		0	54	1	7	15	1
草本花粉		0	4	0	0	1	0
シダ類胞子		0	109	7	167	130	140
総計(不明を除く)		0	365	13	178	381	178

第34表 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6
イネ科葉部短細胞壁珪酸体							
イネ族イネ属	5	31	16	5	14	48	-
キビ族チゴザサ属	-	2	-	-	1	-	-
タケアキ科	-	10	-	2	1	-	-
ヨシ属	-	12	-	-	2	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	-	4	-	2	1	-	-
ウシクサ族ススキ属	-	5	15	3	10	28	-
イナヅナガヘ面科	-	1	1	-	-	5	-
不明ヒキ型	6	51	45	15	47	47	-
不明ヒゲシニア型	-	-	1	-	-	2	-
不明ダツチケ型	1	3	9	-	1	1	-
イネ科葉身橈動細胞壁珪酸体							
タケアキ科	-	4	27	4	10	12	-
ヨシ属	-	-	1	-	-	1	-
ウシクサ族	-	-	24	1	13	12	-
不明	1	3	25	9	15	17	-
合計		12	94	113	23	77	135
イネ科葉身橈動細胞壁珪酸体		1	7	77	14	38	42
地計		13	101	190	37	115	177
組織片		-	1	-	5	6	10
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	3
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-

ナシカズラに特徴的な不飽和脂肪酸である α C18:3の α リノレン酸(42.34%)は土版試料には認められない。以上のことから、本結果から所見にて指摘されたナシカズラなどの植物系樹脂の痕跡を指摘するには至らない。ここで、飽和脂肪酸第58図のC14、C16、C18が多い脂肪には動物油、不飽和脂肪酸(第58図のC18:1、 α C18:3)が多い脂肪には植物油、魚油などが属する。とくに、不飽和脂肪酸は空気中に放置すると自動酸化、分解、重合などの反応を起こしやすいが、土壤中では比較的安定した状態で保持されている(中野、1993)。今後は、ナシカズラの樹液と土版の原材料となった土壤を実際に混合した試料を用いて調査を行うこと、さらに残存脂肪酸の量と組成の経年変化をみるとことなどを実験的に行い、今回の結果と比較検討したいと考える。

また、琉球諸島の植生変遷は、黒田・小澤(1996)や黒田(1998)にまとめられている。これらによれば、沖縄本島は、完新世に入ると急激にシイやカシ類などの照葉樹林が分布を拡大してきたとされている。

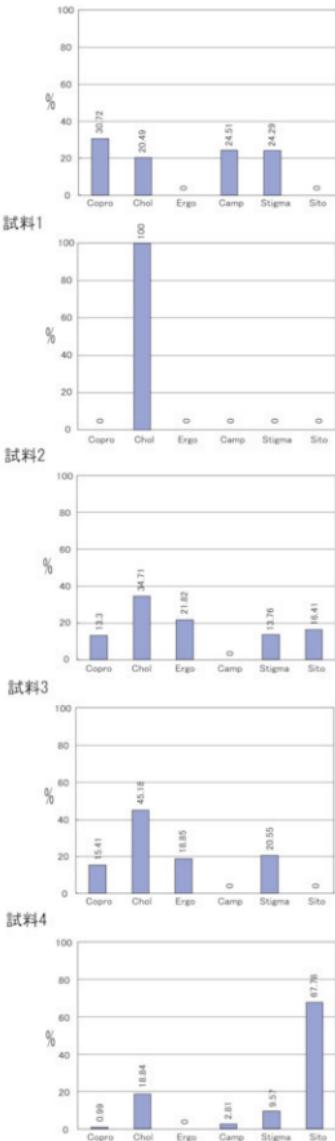
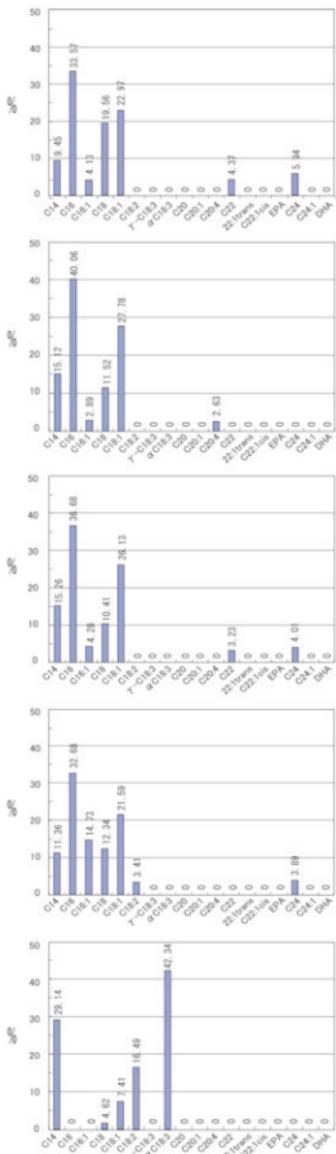
今回の結果(第33表)をみると、マツ属の割合が高く、他は種類数が少なくいずれも低率である。マツを中心とする植生は、沖縄地域では伐採など人為的な手が加わったあとに生じる二次林で、リュウキュウマツを中心に、イジュ、ヒサカキ、ヒメコズリハなど若干の低木類を伴う(宮脇編著、1989)。このような植生では、リュウキュウマツの落葉と乾燥化のため、草本植生が貧弱になる(宮脇編著、1989)。花粉化石をみると、イネ科(植物珪酸体ではタケアヤ科やヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギアヤ科)やカヤツリグサ科を若干伴うものの、草本類が極端に少なく調和的である。このように、当時の遺跡周辺は、人手が加わった植生に覆われていたと考えられる。今回の分析ではナシカズラの花粉は検出されていないが、ナシカズラは草本や低木に寄生し、人里などに多くみられることから、遺跡周囲で容易に手に入ったと考えられる。

なお、分析試料ではイネ属の短細胞珪酸体の産出が目立ち、稲穂殻に形成される穎珪酸体も稀に検出された。のことから、綾門大道の土版造営等の資材として稲穂や稲穂が使われた可能性がある。

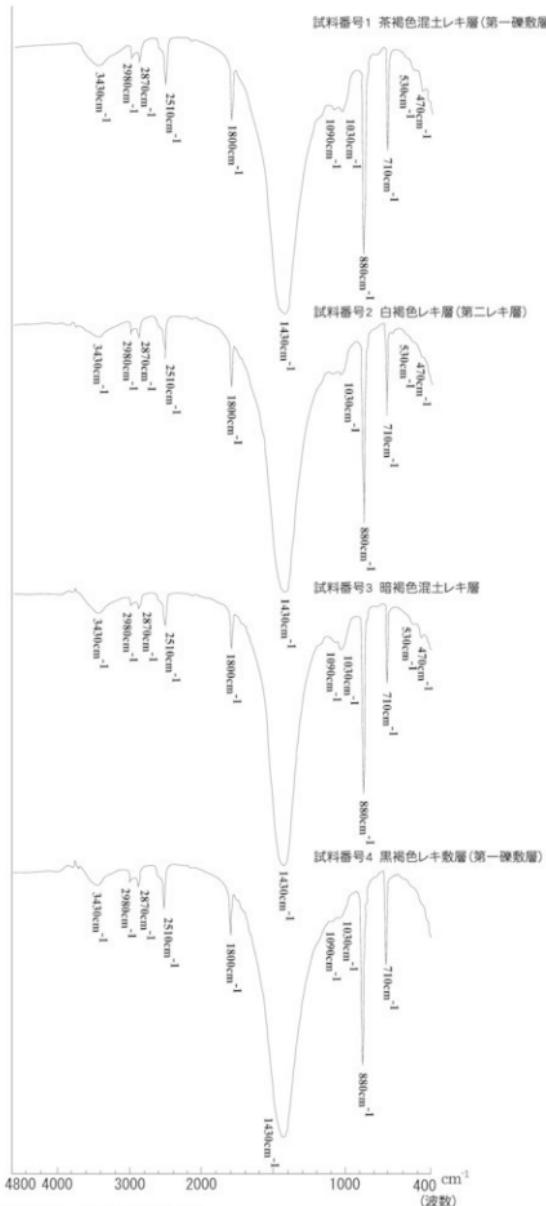
沖縄県では考古学的知見から尚巴志王時代(1372~1439年)の頃には農具も普及してイネなどの穀物が栽培されていたとされており(東、1980)、稲穂や稲穂が資材としては入手しやすかったと考えられる。

引用文献

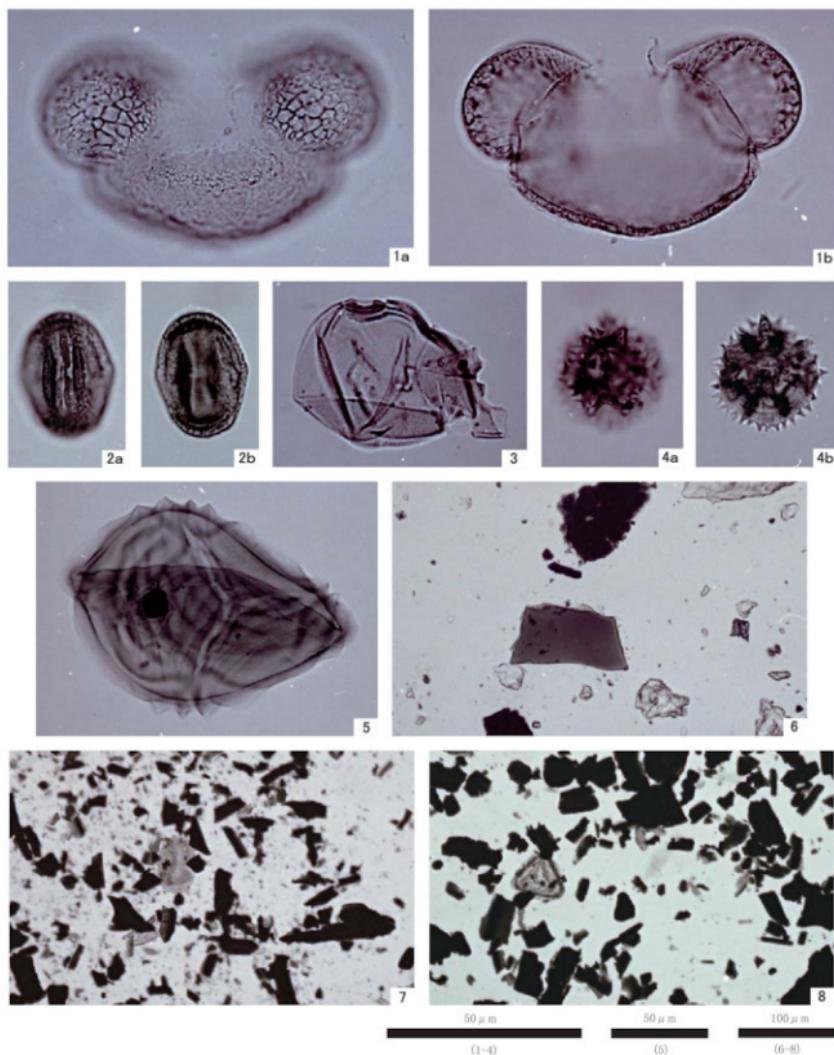
- 近藤錦三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31-64.
黒田登美雄・小澤晋生(1996) 花粉分析からみた琉球列島の植生変遷と古氣候、地学雑誌3、p.328-342.
黒山登美雄(1998) 南西諸島の植生史、「図説 日本列島植生史」、安田喜興・三好教大編、p.162-175、朝倉書店。
宮脇 昭 編著(1989)「日本植生誌」沖縄・小笠原、676p、笠文堂。
中野益男(1993) II 化石編 4.2.4 脂肪酸分析法、「第四紀試料分析法 2研究対象分析法」、p.388-403、東京大学出版会。
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄(1996) 灯明皿の脂質分析、富山県文化振興財团埋蔵文化財発掘調査報告第7集「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)第二分冊」、p.24-37、財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所。
東清二(1980) 農林業の歴史、木崎甲子郎編著「琉球の自然史」挿地書館、p.206-218.



第58図 脂肪酸組成(左側)・ステロール組成(右側)

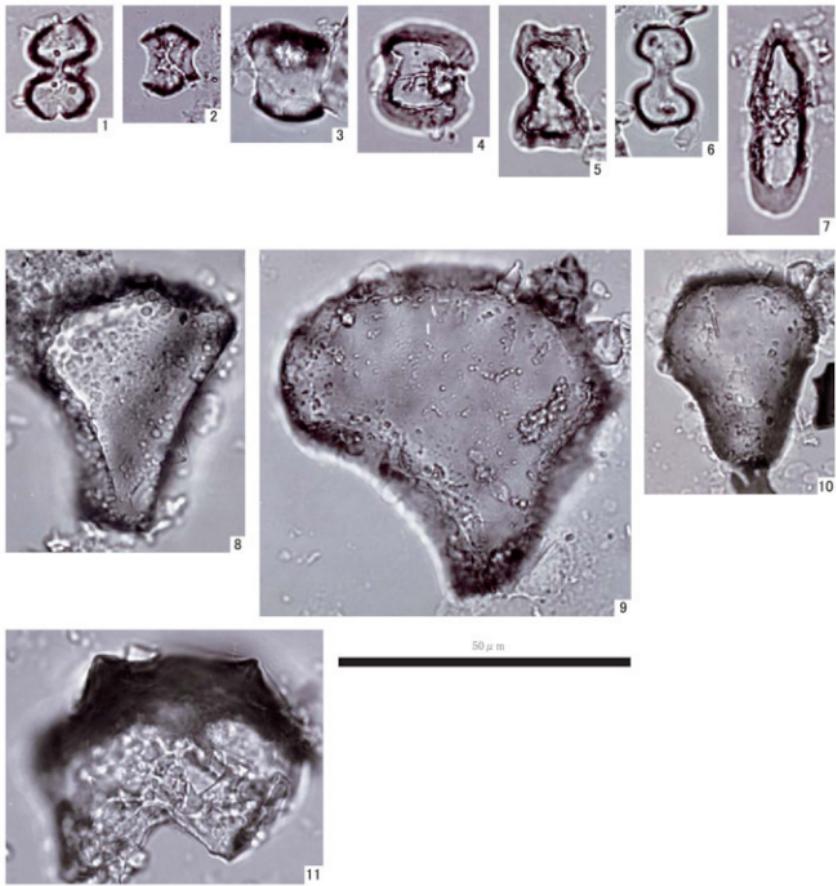


第59図 赤外線吸収スペクトル (IRスペクトル)



1. マツ属 (試料番号 5)
 2. ウコギ科 (試料番号 2)
 3. イネ科 (試料番号 2)
 4. ミズワラビ属 (試料番号 5)
 5. ミズワラビ属 (試料番号 5)
 6. 花粉分析プレパラート内の状況写真 (試料番号 1)
 7. 花粉分析プレパラート内の状況写真 (試料番号 2)
 8. 花粉分析プレパラート内の状況写真 (試料番号 4)

図版 68 花粉化石



1. イネ属短細胞珪酸体（試料番号 6）
3. タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号 3）
5. コブナグサ属短細胞珪酸体（試料番号 3）
7. イチゴソナギ亜科短細胞珪酸体（試料番号 6）
9. ヨシ属機動細胞珪酸体（試料番号 6）
11. イネ属頸珪酸体（試料番号 6）

2. チゴザサ属短細胞珪酸体（試料番号 2）
4. ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号 3）
6. ススキ属短細胞珪酸体（試料番号 3）
8. タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号 3）
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号 6）

図版 69 植物珪酸体

はじめに

琉球王朝時代の遺構である守礼門東側および真珠道起点部分（以下、真珠道跡と表記）の発掘調査では、当時の生業を示す様々な遺物の出土が確認されている。本報告では、これら出土遺物について、その材質に関する特性を、自然科学分析で用いられる分析手法を応用することにより把握し、当該期の生業に関する基礎資料を作成する。

1. 蛍光X線分析による製品の成分分析

1. 試料（図版70）

出土遺物のうち、陶器やガラス製品などの無機物および金属製品などは、その材質の特性として、元素組成が有意なデータとなる。これらの遺物における化学組成の違いは原材料や製作技術あるいは製作時期の違いを反映し、当時の交易や流通の解明にもつながる情報の一つになり得ると考えられる。ここでは、真珠道跡および綾門大道跡より出土した遺物のうち、1)陶器製の観、2)ガラス製品、3)銅製品の3種類の遺物を対象として成分分析を行う。以下に各試料について述べる。

1)陶器製の観（真珠道跡Ⅲ）

幅約4cmほどの小型の観の破片であり、長さは破損しているため不明である。表面は褐色を帯びているが、おそらく風化変質によるものと考えられ、本来の色調は、破断面に認められる暗灰色であると判断される。また、本分析では、沖縄産施釉陶器の碗唇部破片1点を比較対照試料として同時に分析する。なお、観の注記は「H18 スー11 トレンチ3・4 IVe層」であり、沖縄産施釉陶器の注記は「H18 セー11 トレンチ7 I a 層」である。

2)ガラス製品（真珠道跡Ⅲ）

無色透明で薄板状のガラスの破片1点と「勾玉」とされている灰色を呈する径8mmほどの玉状ガラス製品1点である。ガラス片の注記は「H18 スー11 トレンチ3・4 III層」、勾玉の注記は「H18 セー11 トレンチ7 III層」である。

3)銅製品（首里城跡・真珠道跡）

銅製とされる鏡1点と装飾品とされる製品1点である。鏡は、径約8.5cmの円形であり、背面には文字が施されている。装飾品は、外径約5cm、内径約1cmの環状を呈し、片面は波形に加工され、金箔と考えられる装飾が施されている。試料はともに腐食が著しく、綠青などの腐食生成物に覆われた状態にある。なお、両試料とも「H19 シー10 南側 12F-1層」より出土とのことであった。

2. 分析方法

蛍光X線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、ごく表面層を測定対象としているため、出土遺物表面が風化の影響を受けている場合、遺物本来の化学組成を導くことは難しく、本来の化学組成を知るためにには風化層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るために極めて有効な手法となる。

本報告では、非破壊を前提とした材質調査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や風化層および錆(腐食生成物)の除去を行わず、調査に用いる。したがって、陶器観については破断面を対象とし、沖縄産陶器は釉薬のかかっていない部分、銅製品については錆など腐食生成物の少ない部分をそれぞれ対象に測定を実施する。材質調査に用いた装置はセイコーアンツルメンツ(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)である。なお、本装置は下面照射型の装置であることから、形状の小さなガラス製品の勾玉についてはマイラー膜(2.5μm)(ケンブレックス製CatNo106)で固定した上で、測定を実施している。得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、ノンスタンダードによるFP法(ファンダメンタルパラメーター法)により、酸化物として定量演算を行い、相対含有率(質量%)を算出する。ただし、勾玉についてはマイラー膜による吸収補正を加えた定量演算を行っている。

なお、本装置による定量可能元素は11Naから92Uの範囲にある元素であり、これら範囲外の元素についてはFP法による定量演算に利用することが出来ないこと、また半定量的に相対含有率を算出しているが、実際にはどの程度の深さまでX線が進入しているのか不確実な部分もあり(例えば表面の風化層のみから発生した特性X線を検出していられるのか、あるいは風化層より内部の新鮮部分の材質も含めた特性X線を検出しているのか)、結果の評価には注意する必要がある。本調査における測定条件の詳細については、第35表に示す。

3. 結果および考察

(1) 瓦および沖縄産施釉陶器（真珠道跡）

FP法により求めた各試料の化学組成を第36表に掲げる。瓦も沖縄産施釉陶器も、最も主要な元素であるSiO₂とAl₂O₃の量比は、ともにそれぞれ約50%と30%程度であり、大差はない。しかし、次いで主要な元素であるFe₂O₃の量比では、瓦が約10%であるのに対して、沖縄産施釉陶器はこれよりも少なく約5%である。同時にTiO₂、MnOにおいても瓦の方が有意に多い。さらに、造岩鉱物において重要な元素であるNa₂OとK₂Oでも、両試料の間には有意な差異が認められる。

これらの成分の差異により、陶器製の瓦に使用された土の材質は、今回の対照試料とされた沖縄産施釉陶器に使用された土とは異なるものであると判断される。現時点では、「異なる」とした内容を具体的に知ることはできないが、例えば、原料とした土の採取場所や採取層位が異なる、土の調整（土を混ぜ合わせたり、砂を混ぜ合わせたりする過程）が異なることなどに由来すると考えられる。いずれにしても、今後の類例の蓄積が必要である。

第36表 真珠道跡出土の瓦および沖縄産施釉陶器の蛍光X線分析結果（化学組成）

試料名	SiO ₂ (重量%)	TiO ₂ (重量%)	Al ₂ O ₃ (重量%)	Fe ₂ O ₃ (重量%)	MnO (重量%)	MgO (重量%)	CaO (酸化カルシウム %)	Na ₂ O (酸化ナトリウム %)	K ₂ O (酸化カリウム %)	P ₂ O ₅ (重量%)	SO ₃ (三酸化硫黄 %)	ZnO (酸化錫 %)	Hb ₂ O (酸化ヘリウム %)	SrO (酸化ストロンチウム %)	Y ₂ O ₃ (酸化ヨウジウム %)	ZrO ₂ (酸化ジルコニウム %)
瓦	51.31	1.10	30.55	10.29	0.13	1.46	2.38	0.37	1.72	0.23	0.31	0.06	0.02	0.01	0.01	0.05
沖縄産 施釉陶器	50.53	0.50	36.04	4.71	0.07	1.94	2.11	0.03	3.08	0.66	0.24	0.01	0.03	0.01	0.01	0.03

質量百分率(単位:wt%)

(2) ガラス製品

1) ガラス片（真珠道跡）

FP法により求めた化学組成を第37表に掲げる。ガラス片は主としてSiO₂、CaO、Na₂O、Al₂O₃などの酸化物によって構成されている。SiO₂は、ガラスの骨格となる3次元の網目構造を形成する酸化物（網目形成酸化物）であるとされ、Na₂O、CaOなどは、網目構造を形成することはできないが、網目の中に入ってガラスの性質に重要な影響を与える酸化物（修飾酸化物）として知られており、さらに、Al₂O₃は、網目形成酸化物と置換して網目の形成に加わると共に、修飾酸化物としても働くことのできる酸化物（中間酸化物）とされている（肥塚,1995）。

なお、日本各地の遺跡（主に弥生時代から古代までの時期）より出土したガラス製品の材質については、肥塚（1995：1999：2001）によって詳細な検討がなされており、融剤の種類によってアルカリ珪酸塩ガラス、鉛珪酸塩ガラス、アルカリ鉛珪酸塩ガラスのグループに分類されている。今回調査を実施したガラス片は、材質的にはアルカリ珪酸塩ガラスに区分される材質と判断される。アルカリ珪酸塩ガラスについては、その化学成分の違いから、さらに5種類に細分されている。ただし、今回のガラス片試料は、構成酸化物の定量値が半定量的な値であることや、ガラス表面の風化変質による化学組成の変化も無視できないことから、詳細な材質の特定はできない。特に、アルカリ珪酸塩ガラスは鉛を含有するガラスと異なり、表面が風化の影響を受けている場合でも外観上の変化をあまり伴わず、光沢を有することもあることから、遺物表面が風化による侵食をどの程度受けているのか推し量することが難しく、内部新鮮面での化学組成の確認をもって判

第35表 蛍光X線分析装置の測定条件

試料	硬・陶器・ガラス製品	鋼製品
測定装置	SEA2120L	
管球ターゲット元素	Rh	
コリメータ	Φ10.0mm	
フィルター	なし	
マイラー	使用	OFF
背景気	真空	大気
励起電圧(kV)	15	50
管電流(μA)	自動設定	自動設定
測定時間(秒)	300	300
定性元素	Na(ナトリウム) ～Ca(カルシウム)	Sc(スカンジウム) ～U(ウラン)

断する必要がある。

2) 勾玉（真珠道跡）

FP法により求めた化学組成を第37表に掲げる。検出元素の相対含有率ではCaOが約88%、SrOは約2.8%となるほか、SiO₂やAl₂O₃が2.8%、SO₃が1.8%、Fe₂O₃が0.9%程度含まれる計算となる。この組成から、調査を実施した勾玉は、ガラス製品ではなく、カルシウムを主たる構成元素とした材質からなることが推測される。

ただし、元素分析のみでは、その構成成分を検証することは出来ない。考えられる成分としては炭酸カルシウム(CaCO₃)を構成成分とする石灰岩などのほか、酸化カルシウム(CaO)や水酸化カルシウム(Ca(OH)₂)などである。

第37表 真珠道跡出土のガラス製品の蛍光X線分析結果(化学組成)

試料名	MgO (酸化マグネシウム)	Na ₂ O (酸化ナトリウム)	Al ₂ O ₃ (酸化アルミニウム)	SiO ₂ (酸化シリコン)	K ₂ O (酸化カリウム)	CaO (酸化カルシウム)	TiO ₂ (酸化チタン)	MnO (酸化マンガン)	Fe ₂ O ₃ (酸化鉄)	CuO (酸化銅)	ZnO (酸化亜鉛)	Rb ₂ O (酸化リビドウ)	SrO (酸化ストロンチウム)	ZrO ₂ (酸化ジルコニア)	SnO ₂ (酸化アンチモン)	PbO (酸化鉛)
ガラス片	—	11.05	5.36	71.76	—	1.85	9.01	0.06	0.48	0.29	0.01	trace	0.01	0.01	0.04	0.06
勾玉	trace	—	2.78	2.79	1.83	—	88.51	0.13	0.13	0.94	—	0.02	—	2.86	—	—

質量百分率(単位:wt%)

ただし、酸化カルシウムや水酸化カルシウムは、水利・炭酸化作用を受け、炭酸塩と変化していることが多く、特定は難しいと思われる。なお、本試料では、Srが際だって高い値で検出されている点にも特徴がある。海棲生物が石灰質骨格を形成する際に、Srを不純物として取り込んだ結果という可能性もあると考えられ、この場合、勾玉の材質としては、もとは生物起源の石灰岩ということになる。いずれにしても、元素分析の結果のみでは、材質の特定はできない。今後、類似の遺物が確認された場合に、X線回折分析や薄片観察による鑑定を実施することができれば、材質の特定が期待される。

(3) 銅製品(首里城跡・真珠道跡)

FP法により求めた各試料の元素分析結果を第38表、装飾品の金箔部の元素定性結果を第39表に掲げる。銅鏡の元素分析によって得られた主要元素はCu(銅)、Sn(錫)、Pb(鉛)であることから、材質は鉛入り青銅(Cu-Sn-Pb合金)であることが確認される。他にCa(カルシウム)やFe(鉄)等が検出されているが、これらは埋蔵中に付着したか、あるいは材質中に含まれる不純元素と思われる。

装飾品については、Cuが95%と圧倒的な割合で含まれ、SnやPbは2%未満の組成となっている。この結果第38表 守礼門東側出土の銅製品の蛍光X線分析結果

試料名	Ca (カルシウム)	Mn (マンガン)	Tl (チタン)	Fe (鉄)	Cu (銅)	As (砒素)	Sn (錫)	Sb (アンチモン)	Pb (鉛)
鏡	6.03	0.07	—	1.01	48.60	—	8.50	—	35.79
装飾品	0.56	—	0.06	1.43	95.15	0.27	0.46	0.31	1.75

質量百分率(単位:wt%)

だけ見れば、純銅からなる材質と捉えることも出来るが、本調査が緑青などの腐食生成物の上から測定を行っていることや、蛍光X線分析法が半定量的な分析手法であるため、地金本来の材質を言及することは難しい。緑青の構成元素のみが検出されている可能性も否定できず、あくまでも参考値として捉えておく必要がある。

なお、装飾品の金箔部の元素定性結果では、装飾品自体から検出された元以外に、Au(金)、Ag(銀)、Hg(水銀)が検出されている。この結果から、金アマルガム(ペースト状のもので、水銀と金との合金)によって鍍金された可能性が示唆される。なお、Agは金に含まれる不純元素と思われる。

2. 漆喰の分析

1. 試料(首里城跡・真珠道跡)

試料は、いずれも灰白色を呈する不定形の漆喰塊とされた遺物2点である。各試料の注記は、「首里城跡・真珠道跡 H18 シー10トレント8 漆喰溜まり」、「真珠道跡II 報告書掲載の第22図12 図版23-11

第39表 守礼門東側出土の銅製装飾品金箔部の元素定性分析結果

Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(kEV)
20	Ca	カルシウム	K α	20,569	3.56-3.82
26	Fe	鉄	K α	39,684	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	1843,064	7.87-8.21
47	Ag	銀	K α	14,78	21.85-22.35
50	Sn	スズ	K α	9,063	24.93-25.46
79	Au	金	L α	182,018	9.53-9.88
80	Hg	水銀	L β	40,418	11.66-12.05
82	Pb	鉛	L β	20,976	12.43-12.82
51	Sb	アンチモン	K α	4,398	26.00-26.54

(セ-11 第Ⅰ層)」である。前者は、長径およそ5cmほどの塊状物であり、片面が平滑な面となっている。後者は、長径およそ10cmほどの厚板状を呈し、表面は平滑な面となっている。観察できた植物痕は薄く、長方向に条縞状の淡い痕跡が認められ、イネ科など単子葉類の草本類が有する葉に類似する。

2. 分析方法

ここでは、漆喰とされるものの情報収集として、薄片作製による岩石学的観察、X線回折による結晶質物質の特定、および植物組織痕が認められたことから、植物痕がイネ科であれば、葉部などに特徴的な植物珪酸体を含む珪化組織片の検出が期待されることにより、植物珪酸体分析（灰像分析）も行う。以下に各分析手法について述べる。

(1) 薄片作製鑑定

薄片の顯微鏡鑑定は、岩石を0.03mmの厚さに薄く研磨し、顯微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料は、ダイヤモンドカッターにより22×30×15mm程度の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなったり岩石薄片の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用い、下方ポーラー（下方の偏光板）下および直交ポーラー（下方に加えて上方の偏光板も使用した状態）下において観察記載を行なう。

(2) X線回折分析

試料をメノウ乳鉢で微粉碎した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials DataInc.（社名）のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex

発散スリット(Divergency Slit): 1°

対陰極(Target): Cu(Kα)

散乱スリット(Scattering Slit): 1°

分光器(Monochrometer): Graphite弯曲

受光スリット(Receiving Slit): 0.3mm

管電圧(Voltage): 40KV

走査速度(Scanning Speed): 2° /min

管電流(Current): 40mA

走査モード(Scanning Mode): 連続法

検出器(Detector): S C

サンプリング幅(Sampling Range): 0.02°

計数単位(Calculation Mode): cps

走査範囲(Scanning Range): 2~45°

(3) 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や搅乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物遺体には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合がある。そのため、珪化組織片の形状により種類が明らかになると考えられる。

漆喰塊2点には、それぞれに植物遺体自体が認められず、植物痕が見られた。この痕跡を試料中から割り出し、痕跡をカッターナイフで削り取り、分析試料とした。これを過酸化水素水で漂白し、灰化した。400倍の光学顕微鏡下で観察し、植物珪酸体を包含する珪化組織片の有無を調べる。

3. 結果

(1) 薄片作製鑑定（図版71）

偏光顕微鏡下における観察に際しては、各構成物の量比を薄片上の観察面全体に対して、多量(>50%)、中量(20~50%)、少量(5~20%)、微量(<5%)およびきわめて微量(<1%)という基準で目視により判定した。代表的な箇所については、下方ポーラーおよび直交ポーラードで写真撮影を行い、図版に示した。以下に鏡下観察結果を述べる。

1) 首里城跡・真珠道跡 H18 シー10 トレンチ8 漆喰溜まり

本試料には、粗粒シルト～細繊サイズの碎屑片が中量程度含まれ、碎屑片の分布の偏りはみられず、概ね塊状を呈する。碎屑片の陶法は不良である。

碎屑片は、石灰岩および炭酸塩鉱物が主体となっており、その他に石英や植物片が含まれる。石灰岩は微結晶質～隠微晶質な炭酸塩鉱物からなり、一部、化石片の形態が認められるものもある。また、ミクライトイ質で泥質なものも認められる。石英はきわめて微量含まれ、細粒砂以下のサイズで破片状を呈する。植物片は、長さ0.5～4mm程度で紐状～針状を呈し、微量程度含まれ、弱い配向性が認められる。

基質は炭酸塩鉱物および非晶質な粘土から主に構成されており、その他、水酸化鉄、炭質物なども含まれる。炭酸塩鉱物は、隠微晶質で微細不定形状を呈し、中量程度含まれる。粘土は少量程度含まれ、隠微晶質で褐色を呈し、炭酸塩鉱物と共生する。

孔隙は微量程度存在し、球状～不定形状を呈して散在する。径0.05～1mm大で充填鉱物は生成していない。
2) セ-11 第1層

本試料には、粗粒シルト～細繊サイズの碎屑片が中量程度含まれ、碎屑片の分布の偏りはみられず、概ね塊状を呈する。碎屑片の陶法は普通で、細粒砂～中粒砂がやや多く含まれる。

碎屑片は、石灰岩および炭酸塩鉱物が主体となっており、その他に砂岩、石英および植物片が含まれる。石灰岩は微結晶質～隠微晶質な炭酸塩鉱物からなり、一部、化石片の形態や組織が認められるものもある。また、ミクライトイ質（微粒石灰岩質）で泥質なものも認められる。砂岩は、石英、酸化角閃石などの鉱物片を含みワッカ質（粘土質基質を多く含む）である。石英はきわめて微量含まれ、破片状を呈する。植物片は微量程度含まれ、長さ0.2～0.8mm程度で針状～板状を呈して散在する。

基質は炭酸塩鉱物および非晶質な粘土から主に構成されており、その他、水酸化鉄、炭質物なども含まれる。炭酸塩鉱物は中量程度含まれ、中粒シルト以下のサイズで隠微晶質なものが多く、微細不定形状を呈する。粘土は少量程度含まれ、隠微晶質で褐色を呈し、炭酸塩鉱物と共生する。水酸化鉄は一部、径3.2mm大で結核状（固結した塊）となっているものもある。

孔隙は微量程度存在し、球状～不定形状を呈して散在する。径0.05～0.2mm大のものが卓越するが、径3mm以上の大型のものも認められる。充填鉱物は生成していない。

(2) X線回折分析

各試料のX線回折図を第61図に示す。X線回折法による鑑定結果では両試料とともに方解石（calcite）の回折線が明瞭に検出されている。このことから、これら試料の材質は炭酸カルシウムからなることが確認され、漆喰として利用された可能性が支持される。

(3) 植物珪酸体分析

各試料からは、珪化組織片が全く認められない。また単体の植物珪酸体も全く検出されない。したがって、植物痕がイネ科に由来することは考えにくい。なお、植物痕の様態から、漆喰が製造される際にはスサとしてイネ科以外の植物（カヤツリグサ科など）の葉部が利用されたと考えられる。

3. 漆の分析

1. 試料

試料は、「H18 セ-11 トレンチ3・4 Ⅲ層 朱漆」という注記のある漆の微細な破片である。

2. 分析方法

ここでは、有機物の物質特定が可能な赤外分光分析法を用いる。以下に分析法の詳細を記す。

1) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性

質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数cm⁻¹で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起るかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる（山田,1986）。

2) 赤外線吸収スペクトルの測定

希塩酸処理（炭酸塩除去）、超音波洗浄処理（付着物除去）後、乾燥させた試料から、微量採取した膜状物質をダイヤモンドエクスプレスにより加工成型し、顕微FT-IR装置（サーモエレクトロン（株）製Nicolet Avatar 370,Nicolet Centaurus）を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アーバーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはCO₂除去、ベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IR（赤外線吸収）スペクトルと共に図中に併記しているので、そちらを参照されたい。

3. 結果

FT-IR（赤外線吸収）スペクトルを第60図に示す。なお、図中には比較試料として供した漆の実測スペクトルを併記している。

本試料のFT-IR（赤外線吸収）スペクトルでは、3400cm⁻¹付近の幅広い吸収帯のほか、2930cm⁻¹、2860cm⁻¹、1710cm⁻¹、1620cm⁻¹、1440cm⁻¹、1270cm⁻¹付近の強い吸収帯や1370cm⁻¹、1080cm⁻¹付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、3400cm⁻¹付近の吸収帯はO-H基の伸縮振動、2930cm⁻¹、2860cm⁻¹付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動、1710cm⁻¹付近はC-O伸縮振動、1620cm⁻¹付近はC-O伸縮振動またはC-C伸縮振動、1440cm⁻¹、1270cm⁻¹付近はメチル基の対称変角振動やC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。

4. 考察

当社では試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつもあるが、遺跡で検出される有機質遺物の代表としては漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などの調査例がある。これらは、いずれも固有の吸収帯があり、漆では3400、2930、2860、1710、1620、1450cm⁻¹、天然アスファルトでは2900、1600、1460、1380cm⁻¹と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また、松脂は1700cm⁻¹、動植物油は1740cm⁻¹、炭化物は1140～1160cm⁻¹に特徴ある吸収帯がある。

今回、調査を実施した試料では、比較試料の漆において確認される3400、2930、2860、1720、1620、1450cm⁻¹付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が認められるなど、類似したスペクトルパターンを示している。このことから、本物質の材質は漆であることが確認される。

IV. 繩の分析

1. 試料（首里城跡・真珠道跡）

試料は、「H19 シー-11 炉跡2 暗灰色混練土層」より出土した繩1点である。極細の繊維が多数集まっている様子が観察できる。シロなどの可能性が指摘されていることから、本分析では現生シロについても同時に観察を実施する。

2. 分析方法（図版72）

実体顕微鏡で観察しながら、繩を構成する繊維をピンセットで抜き取り、横断面と側面が見られるように調製して、アルミ合金製の試料台に導電性テープで固定する。シロの現生標本についても、同様に横断面と側面が観察できるよう調製する。走査型電子顕微鏡を用いて断面および側面の組織等を観察する。

3. 結果

纏を構成する繊維は、横断面の径が40-50 μm で、断面は不定形である。直径5 μm 程度の孔が1箇所あり、これが本来の中心部の可能性がある。この他、1 μm 以下的小孔が20-30箇所認められるが、配列は不規則である。小孔の中には端部で割れた状態のものもあり、断面形態が不定型なことも考慮すれば、元々はさらに大きな物質を裹いて纏の纖維状にしていることが予想される。

現生のシュロは、横断面の径が70-80 μm あり、断面形態は横断面となる。中央部に約7-8 μm の孔があり、その周囲を多数の纖維細胞が囲んでいる。

シュロと纏を構成する纖維を比較すると、大きさはやや異なるものの、中心部に孔がある点では共通する。しかし、その他の組織は全く異なっており、少なくともシュロではない。纏を構成する纖維は何らかの植物素材であることは間違いないが、現時点ではその種類等は不明である。

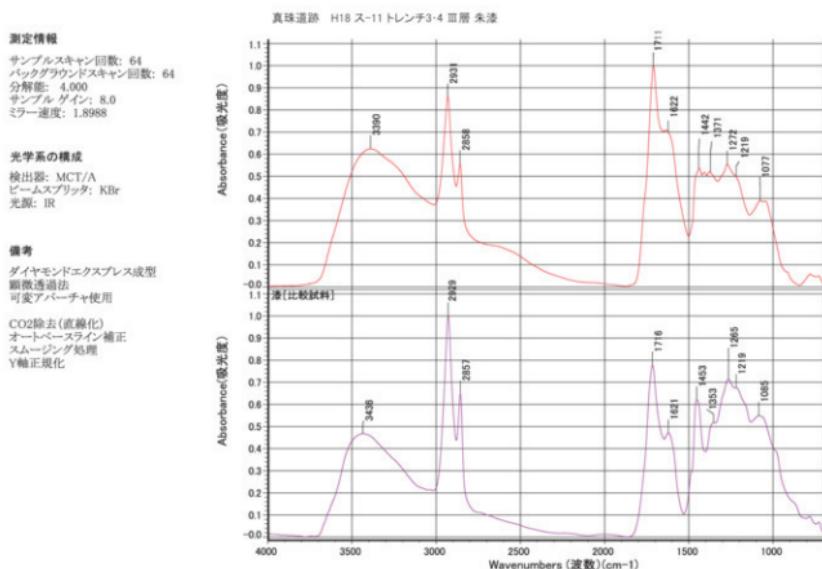
引用文献

辻塚隆保,1995古代ガラスの材質・古代に挑戦する自然科学,クバブロ,94-108.

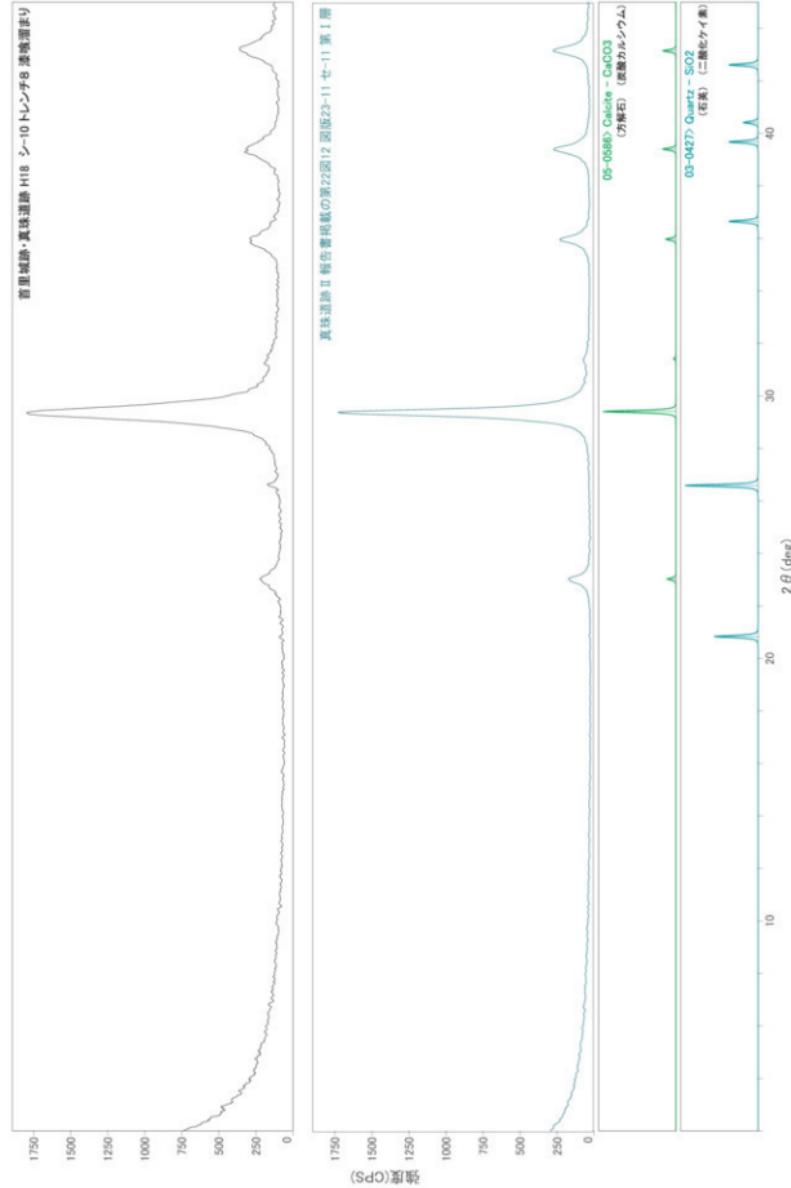
辻塚隆保,1999出土遺物の材質調査:日本で出土した古代ガラスの研究,理学電気ジャーナル,30,1,理学電気工業,33-40.

辻塚隆保,2001古代ガラスの材質と鉛同位体比・同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究,国立歴史民族博物館研究報告,第86集財団法人歴史民族博物館振興会,233-268.

山田富貴子,1986赤外線吸収スペクトル法,機器分析の一歩き第1集,化学同人,1-18.



第60図 真珠道跡 出土の漆のFT-IR(赤外線吸収)スペクトル



第61図 首里城守礼門東側、眞珠道跡出土の漆喰試料のX線回析図



1.陶器製硯(H18 ス-11 トレンチ3・4 IVc層)



2.沖縄産陶器(H18 セ-11 トレンチ7 I a層)



3.ガラス片(H18 ス-11 トレンチ3・4 III層)



4.勾玉(H18 セ-11 トレンチ7 III層)

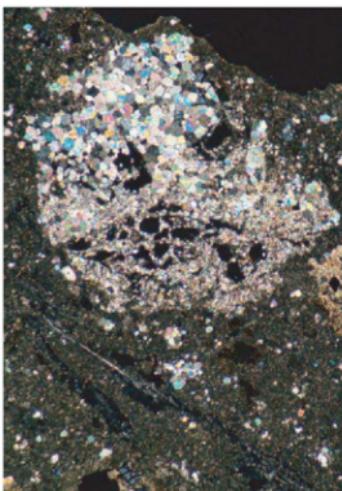
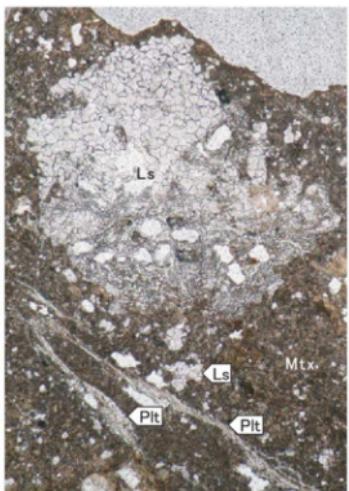


5.銅鏡(H19 シ-10 南側 12層f-1)

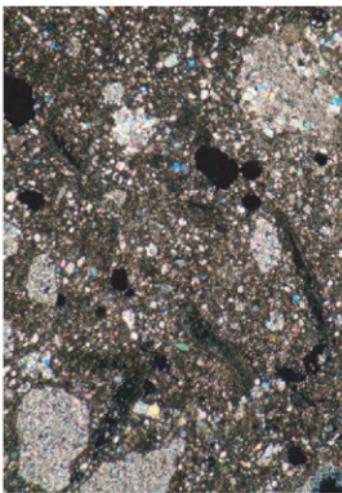
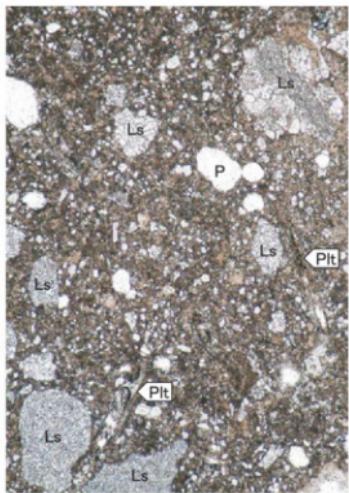


6.銅製装飾品(H19 シ-10 南側 12層f-1)

図版70 蛍光X線分析試料



1.H18 シー10 トレンチ8 漆喰塗まり

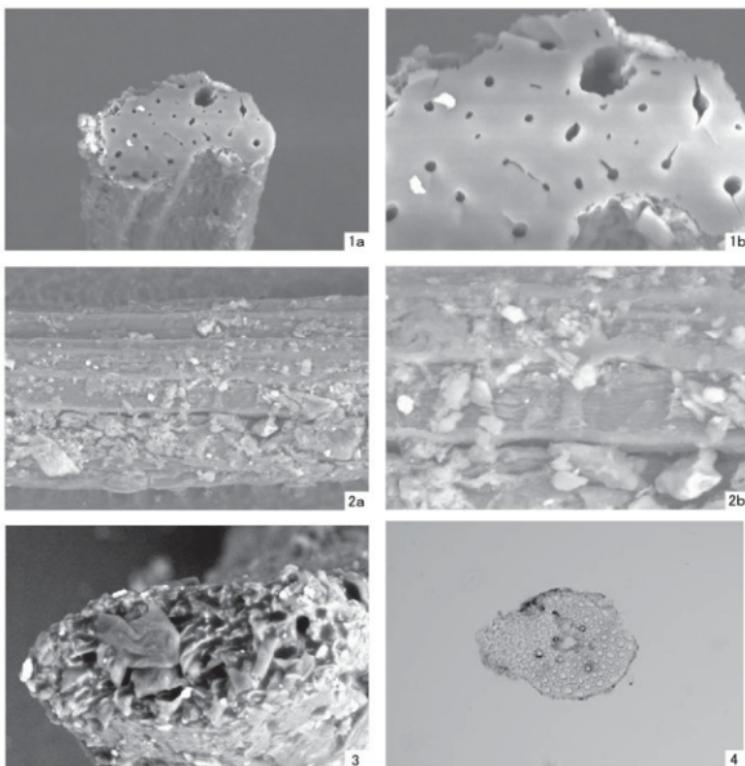


2.真珠道路II 報告書掲載の第22図12 図版23-11 セ-11 第I層

Ls:石灰岩 Pit:植物片 Mtx:基質 P:孔隙
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図版71 漆喰試料の薄片写真



1. 繩(横断面)
2. 繩(側面)
3. 現生のシユロ・SEM写真(横断面)
4. 現生のシユロ・光学顕微鏡写真(横断面)

— 20 μ m:1a,2a,3
— 10 μ m:1b,2b
— 100 μ m:4

図 版



打ち合わせの様子 1



南西側から調査区を望む 1



打ち合わせの様子 2



南西側から調査区を望む 2



守礼門正面側から望む



南側より調査区（左側）を望む



守礼門より調査区を望む



調査区を東側より望む

図版 5 平成 18 年度 調査前の状況



花壇移設の様子



アスファルト剥ぎ



現場フェンス設置作業 1



アスファルト剥ぎ 2



現場フェンス設置作業 2



アスファルト剥ぎ 3



調査区内のアスファルト切り込み



現場の草刈

図版6 平成18年度 調査前の花壇移設、仮囲い、アスファルト撤去等



除草状況



遺構の検出状況



貼芝の除去状況



ミニユンボによる掘り下げ状況



トレンチ2 平裁(西側) 挖り下げ



調査区を西側より望む



発掘調査状況 1



発掘調査状況 2

図版7 平成18年度 調査区内の除草及び発掘状況



遺構検出状況



壁面の割り付け状況 1



発掘調査状況



壁面の割り付け状況 2



光波測量機による測量状況



ミニコンボによる埋め戻し



土層図作成状況



ミニコンボによる埋め戻し後の転圧状況

図版8 平成18年度 調査状況（測量風景、実測風景、埋め戻し）



埋め戻し 1



芝貼り完了後の状況（東側より）



埋め戻し 2



芝貼り完了後の状況（北側より）



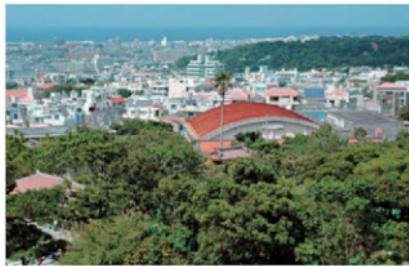
芝貼りの状況



芝貼り完了後の状況（南側より）



芝の貼り直し



首里城跡西のアザナより調査区（中央の赤瓦葺きが守礼門）

図版9 平成18年度 調査区内の埋め戻しと調査区の遠景

木

東壁



木

西壁



図版 10 平成 18 年度 調査区内の各壁面

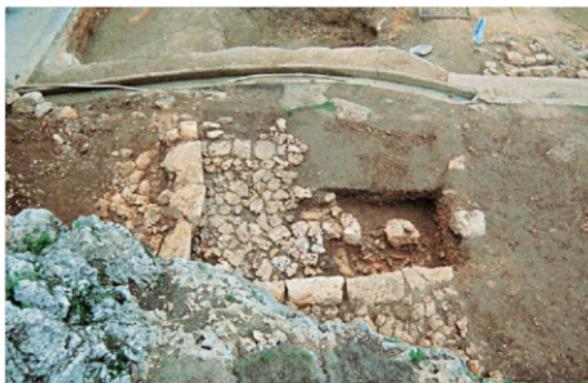




真珠湊碑文台座跡（北側より望む）



真珠湊碑文台座跡（東側より望む）



真珠湊碑文台座跡（南側より望む）

図版 11 平成 18 年度 調査区内検出の真珠湊碑文台座跡



真珠湊碑文台座跡近景



練門大道南側石積みに付属する排水溝ほか



同上 排水溝と真珠道起点部分(右上)

図版 12 平成 18 年度 調査区内検出遺構を西側より望む



遺構検出状況（西側より望む）



遺構検出状況（北側より望む）



遺構検出状況近景（西側より望む）

図版 13 平成 18 年度 調査区内の遺構検出状況



遺構検出状況(北側より望む)



遺構検出状況(北側より望む)



遺構検出状況(南側より望む)

図版 14 平成 18 年度 調査区内の遺構検出状況



遺構検出状況（南側より望む）



遺構検出直後の状況（東側より望む）



遺構完掘後の状況（東側より望む）

図版 15 平成 18 年度 遺構検出状況



塗喰溜まりの状況



砲弾炸裂痕を東側より望む



砲弾炸裂痕を南側より望む

図版 16 平成 18 年度 調査区内の遺構等の検出状況



国王頌徳碑



真珠湊碑文



国王頌徳碑(拡大)



真珠湊碑文(拡大)



国王頌徳碑文（左側）・真珠湊碑文（右側）遠景



碑文解説

図版 17 復元された国王頌徳碑及び真珠湊碑文と碑文解説（平成 18 年 8 月 30 日の除幕式で公開）



守礼門正面を西側から望む



プランター移設状況2



調査区を南側から望む1



仮囲い骨組み組み立て状況



調査区を南側から望む2



同上 組み立て状況



プランター移設状況1



同上 完成後の状況

図版 18 平成 19 年度 調査前の状況と夜間作業(プランター移設・仮囲い)の状況



安全対策後の状況



守礼門排水溝への仮蓋設置状況 1



仮開いの状況（南側より） 1



守礼門排水溝への仮蓋設置状況 2



仮開いの状況（南側より） 2



守礼門排水溝への仮蓋設置後の状況



仮開いの状況（東側より） 3



同上 仮蓋の上に敷いたスベリ止め用のゴムマット

図版 19 平成 19 年度 調査前の安全対策状況



アスファルト切り込み前の打ち合わせ



土盤材の状況



アスファルト切断状況



土盤材の掘前状況 1



アスファルト撤去状況



土盤材の掘前状況 2



アスファルト除去作業



土盤材の様子

図版 20 平成 19 年度 調査前の状況



廃棄された上水道管検出状況（西側より望む）



仮囲いへの説明文等の掲示 1



造成土盤材の撤去後の様子



仮囲いへの説明文等の掲示 2



仮囲いの点検



測量風景



仮囲いの補強状況



調査区内へのグリッド鉄設置状況

図版 21 平成 19 年度 調査区内外の作業状況

南壁



西壁



図版 22 平成 19 年度 調査区内の各壁面





調査区を東側より望む



調査区を西側より望む



調査区を北側より望む

図版 23 平成 19 年度 調査区内の遺構検出状況



調査区を北側より望む



シ一 10 試掘坑4・6を西側より望む



シ一 10 試掘坑3・4・6を西側より望む

図版 24 平成 19 年度 調査区内の遺構及び試掘坑の状況



調査区東側



調査区西側



シ一 10 試掘坑4の北壁近くで
検出された排水溝縁石

図版 25 平成 19 年度 調査区内の遺構等を南側より望む



北壁1



北壁2



北壁3

図版 26 平成 19 年度 調査区北壁近くで検出された綾門大道排水溝延伸部分の縁石と壁面



掘建住居跡西側部分と炉跡



シ一 11 より検出された根固め石のある柱穴1



シ一 11 検出の掘建住居跡の石灰岩等の礫石 (中央より左) 及び根固め石のある柱穴2

図版 27 平成 19 年度 調査区と 11 グリットより検出された遺構 (北側より望む)



掘建柱居住跡の一部と炉跡（右側）



掘建柱居住跡の根固め石のある柱穴2



屋外炉の半裁状況（炉跡1を南側より望む）

図版 28 平成 19 年度 調査区シー 11 より検出された遺構



炉跡2の状況



炉跡4の内部から出土した青磁



炉跡3の内部の状況

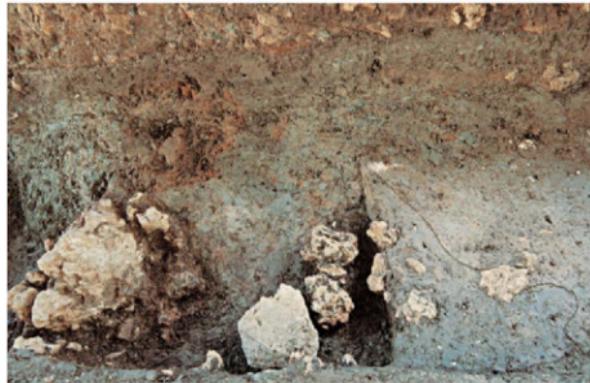
図版 29 平成 19 年度 調査区シー 11 グリット検出の炉跡の半裁状況



調査区を西側より望む



シーケンス 11 グリッドの南側の状況



スケルトン 10 南壁近くで検出された土壌 SK02

図版 30 平成 19 年度 調査区遺構等の状況



シ一 11 南側より出土した青磁碗



シ一 10 南壁近くで出土した高麗瓦(平瓦)



シ一 11 より出土したタイ産半練土器の蓋

図版 31 平成 19 年度 調査区遺物出土状況①



シ一 10 試掘3南壁で検出された
青銅製銘入り鏡



シ一 10 南壁近くで検出された
菊花紋の鍍金鏡



シ一 10 同上 菊花文の留め具と
みられる鍍金の鉢

図版 32 平成 19 年度 調査区遺物出土状況②



青銅製角釘



古錢(寛永通宝)



鉄製品

図版 33 平成 19 年度 調査区遺物出土状況③



骨製サイコロ



骨製の円盤状遊具



炉跡2より検出された縄

図版 34 平成 19 年度 調査区遺物出土状況④



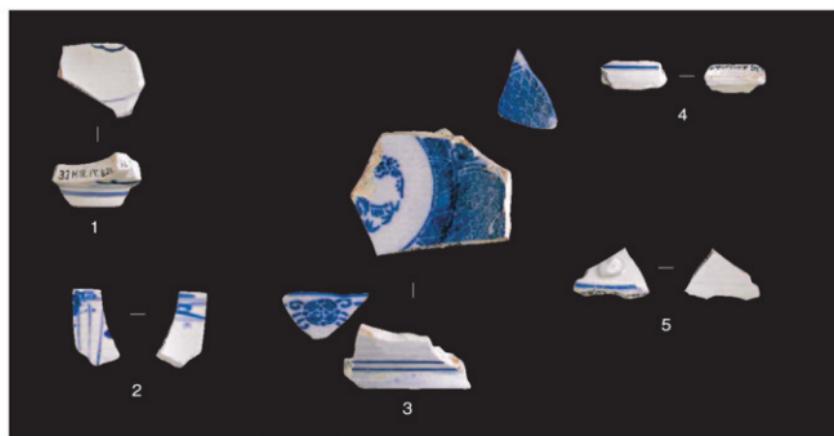
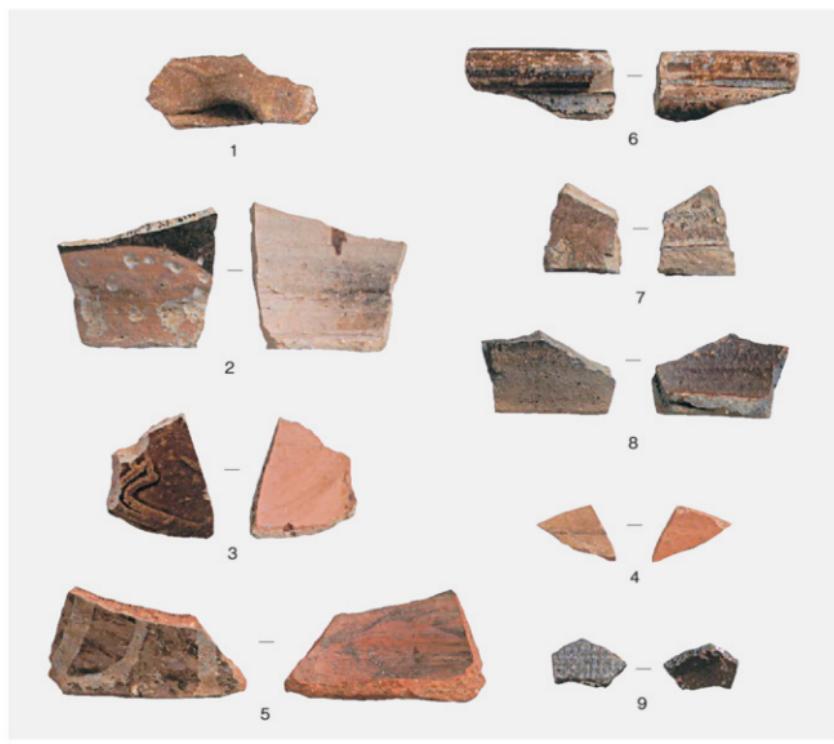
图版 35 青磁 1



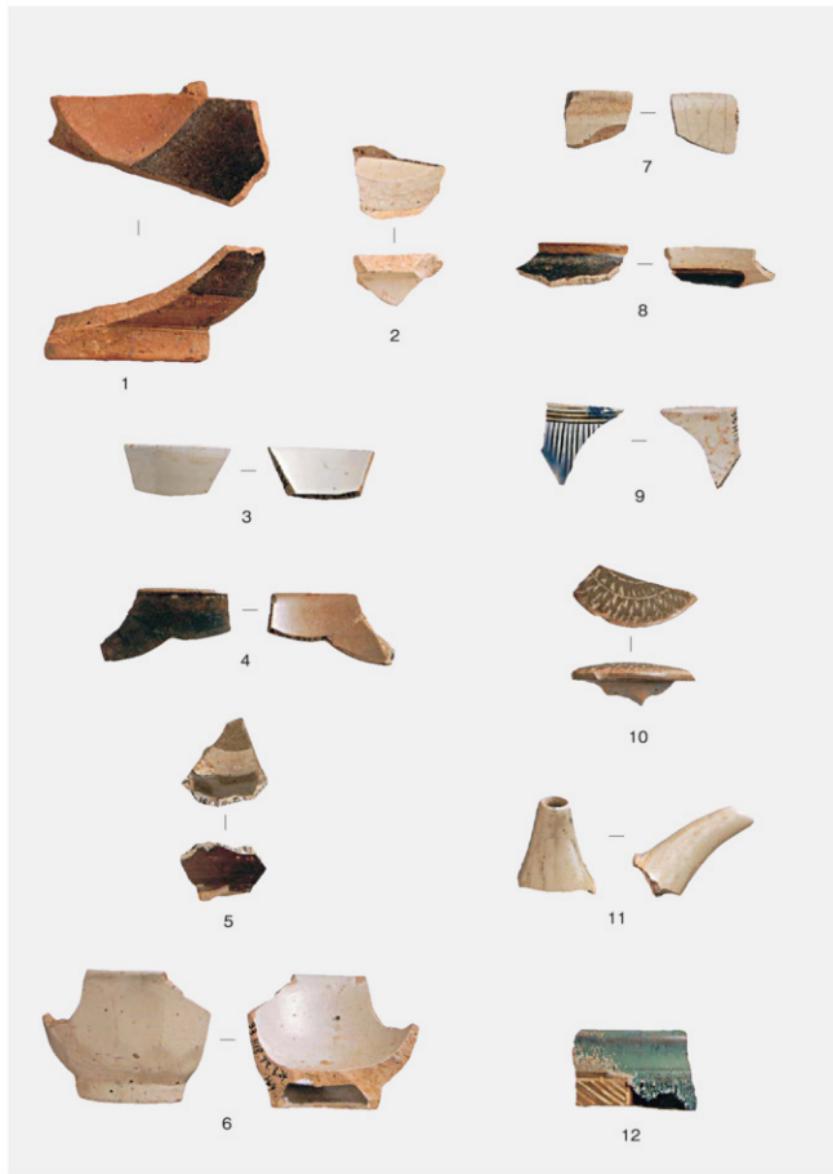
图版 36 青磁 2



图版 37 上：青磁 3 下左：白磁 下右：染付



図版 38 上：褐釉陶器 下：本土産染付



図版 43 沖縄産施釉陶器



図版 44 沖縄産無釉陶器 1



図版 45 上：沖縄産無釉陶器 2 下左：陶質土器 下右：瓦質土器



1



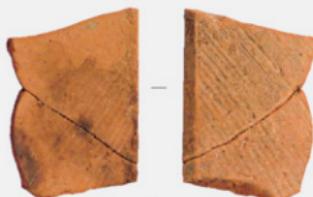
4



3



2



5

図版 49 屋瓦 1



6



7



9



10



8

圖版 50 屋瓦 2



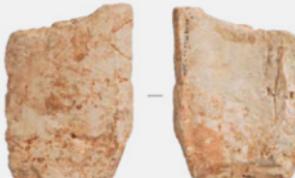
11



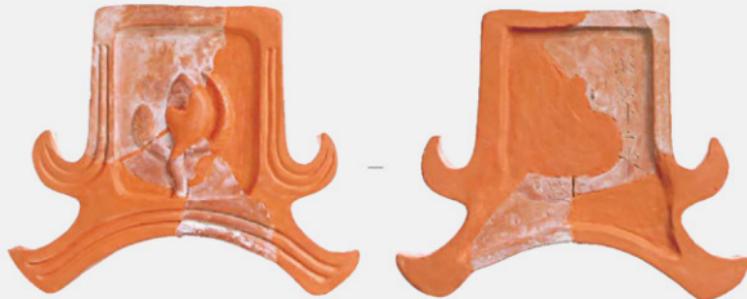
14



12



13



15

图版 51 屋瓦 3



16



17



18



19

图版 52 屋瓦 4



20



21



22



23



24

圖版 53 屋瓦 5



25



26



29



28



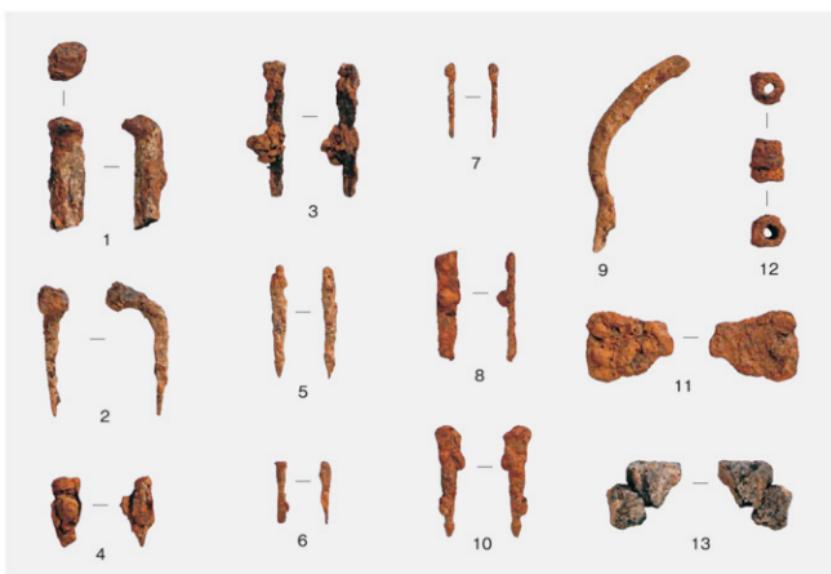
27



图版 54 屋瓦 6



图版 56 塼瓦·炼瓦



圖版 57 上：青銅製品・錢貨 下：鐵製品



図版 58 上：硯 下：石柱・挟み石・石碑



図版 61 加工痕のある木片・木製加工材



4



5



6



7

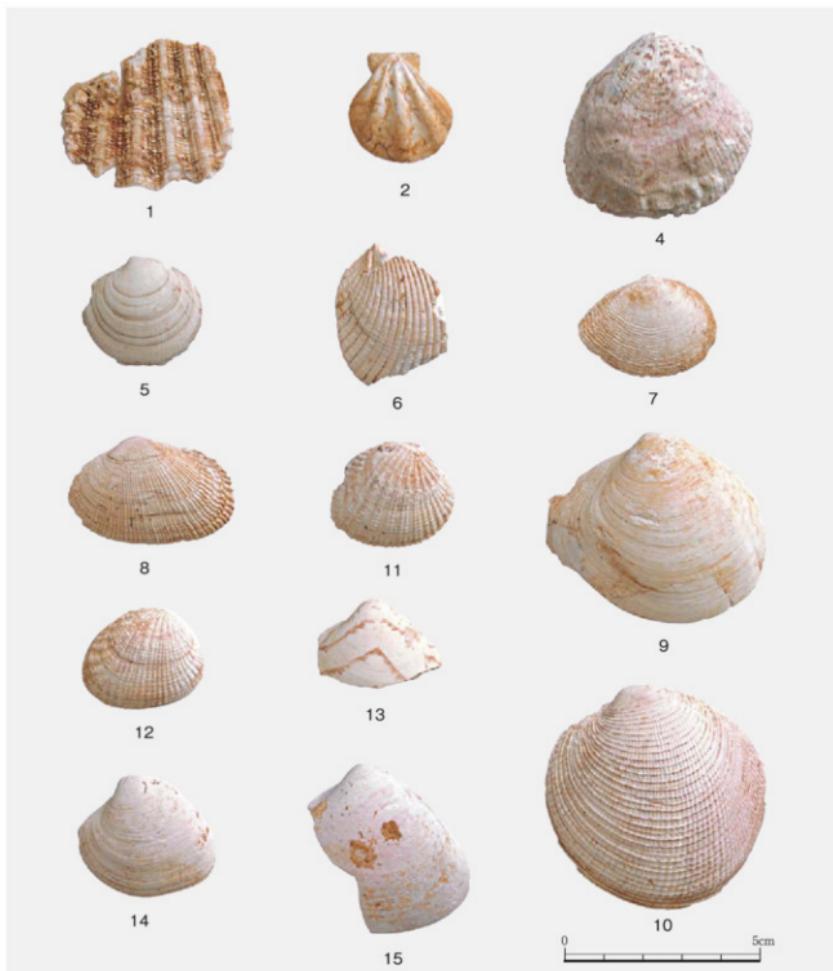


8

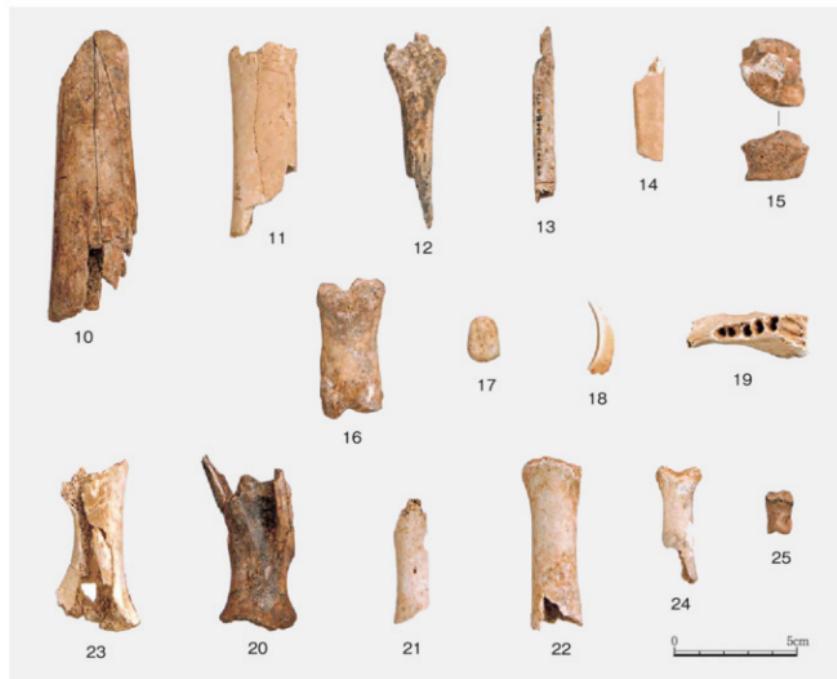
図版 62 木材加工材・燃り縄



図版 65 貝類遺存体 1 卷貝 (番号は表と一致)



図版 66 貝類遺存体 2 二枚貝・微少貝 (番号は表と一致)



図版 67 脊椎動物遺存体

上：メジロザメ 1.脊椎骨 サカナ2.ハタ科 齧骨 右 3.ハマフエフキ 齧骨 右 4.ハマフエフキ 角骨
左 5.種不明 齧骨棘 6.種不明 齧骨血管間線 ニワトリ 7.上腕骨 右 8.尺骨 右 9.脛骨 左
下：ウマ 10.桡骨 左 ウシ 11.桡骨 右 12.棘突起 13.肋骨 左 キズあり 14.尺骨 左 15.手根第4
右 16.基節骨 左 17.種子骨 ブタ 18.下顎骨 左 犬歯♂ 19.下顎骨 左 20.肩甲骨 右 21.上腕
骨 右 22.桡骨 右 23.寛骨 左 腸骨部 24.中手骨Ⅲ 左 25.中節骨 左

附録 琉球王国・首里城関係年表

西暦	日本年号	中国年号	壬午 4	王統	事項	日本・世界
604年	推古12				隋の海師何蛮、流求を訪れる(隋書)	隋の海師即位
605年		13		大業 1	隋の船帝、朱裏を流求に遣わす(隋書)	
607年		15	3		被入人、大和朝廷に朝貢する	
616年		24	12			
618年		26		武德 1		唐興る
625年		33	9		この頃『唐書』(成武天皇)編集(~656年)	遣唐使始まる(~894年廃止)
630年		38	4	貞觀 4		
753年	勝宝 3	天宝 12			眞言、南島(阿児奈島)に憑着	
997年	長承 3	至道 3			太平府、奄美人が島内諸国に丸入りして人物を斬戮したことを書する(小右記)	
998年		4	4		太平府官上す。貴麗島(喜界島)に南面を鋪え進むらぬ山を下すと(日本記勅)大和朝廷より「貴麗島の御施園を美利群島の」貴麗島(喜界島)に設置(被入道解説:8世紀末~14世紀)	
1187年	文治 3	淳熙 14		舜天元	舜天王即位と伝わる	
1192年	建久 3			熙祐 3		鎌倉幕府成立(1192~1333年)
1231年	應永 3			桓祐 4		蒙古、高麗に侵入
1243年	應元 1	淳祐 3		昇麻照順 6	長崎の渡宋者一行、琉球に憑着	
1257年	正嘉 1			義祐 5	義祐 9	タイ、スコータイ朝成立(1257~1350年)
1259年	正元 1			慶慶 1	11	高麗・五島宗、蒙古に降伏
1260年	文定 1			英祖 1	英祖王即位と伝わる	
1261年	弘長 1	(南宋) 延定 2		英祖 2	浦添極楽山に墓を築く(浦添ようどり)	
		(元) 元祐 2				
1264年	文永 1	(元) 至元 1		英祖 5	久米・鹿児島・伊平屋の各島、中山に入貢	
1266年		3	3		7: 大島諫島、中山に入貢。この頃、前に公船建造	
1271年		8	8	12		蒙古、國号を元とする(1271~1368年)
1274年		11	11	15		元軍日本來襲(文永の役)
1275年		12	12	16		マルコ・ポーロ、中国に至る(~1295年)
1279年	弘安 2		16	20		南宋滅ぶ
1281年		4	18	22		元軍日本來襲(弘安の役)
1291年	永仁 4		28	32	元の世祖(ツブリイ汗)浦添を討つが失敗	
1292年	正応 5		29	33		元軍、ジャワ侵攻に失敗
1296年	永仁 4	元貞 2		37	沖繩本島に元軍来襲	
1314年	正和 3	延祐 元		至城 1	この頃から三山对立	
1323年	元亨 3	至治 3		3		日元貿易船、韓国新安神で沈没
1338年	延元 3		4	西成 2		那珂町新原閣(1338年~1573年)
1350年	正平 5	至正 10		應度 1	應度王即位(浦添接任から平となり首里へ)	タイ、アラタヤ朝成立(1356~1767年)
1368年		23	(明) 洪武 1	19		元誠(マハヌル)(1368~1644年)明の海禁政策(私貿易・海外渡航の禁止)
1369年		24	2	20		景徳鎮麻山西山麓に銅器廠を設置し監督官を置き他造。ついでこの年景德鎮銅器廠設置
1372年	文忠元		5	23	明の太祖、蘇轍を遣わし相談。中山王庶度、明へ進貢	
1380年	天授 6		13	31	山南王・東赤度、明へ進貢	
1383年	弘和 3		16	34	山北王則尼芝、明へ進貢	
1388年	元中 5		21	39	明の太祖(朱元璋)、元朝17代元帝の次男「地保奴」と妃・嫡を捕らえ。多くの賛財を与えて琉球に配(明実錄)	
1389年		6	22	40	中山王、領解(高麗)と通好する	
1390年		7	23	41	宮古(=那都禪勢頭費見視)、八重山はじめて中山に入貢	
1392年	元中 9		43	43	中山王庶度、高麗禪頭聘を建造し遊観する 中國商人三十六姓来琉球と伝わる。官生(中國留学生)始まる	李子朝朝成立(1392~1910年)
1400年	応永 4	建文 2		武寧 5	庶度・朝鮮一統者を派遣する(李朝正統)	
1404年		7	永樂 2	9	明(現皇帝)の冊封使。はじめて琉球。シャム(タイ王国)舶襲來し交易	
1405年		12	3	10		鄭和の南洋遠征(1405~1433年)
1406年	応永13		4	11	尚巴志、中山王武寧を滅ぼす(第一尚氏王族始まる)。この頃、首里城堀泉門(1406~1409年の創建)。	
1415年		22	13	10	他魯吉、山南王となる	
1416年		23	14	11	尚巴志、山北王寧安知を滅ぼす	
1420年		27	18	15	シャム(タイ王国)へ遣船	
1421年		28	19	16	パンバラン(インドネシア)との交易はじまる	
1422年		29	20	尚巴志 1	尚巴志即位。次男尚忠を北山監宇に任ぜる 美福門ができる(1422年~1439年に複数)	
1427年		34	宣德 2	6	龍潭を築り安國山を築く。安國山草木之碑記建立。	
1428年	正長元		3	7	建国門(中山門)を創建	
1429年		永享元	4	8	山南王、中山王滅ぼされ三山統一する	
1430年		2	5	9	ジャワ(クンゴネギ)との交渉はじまる。この頃、首里城美福門(1422~1439年に創建)。	
1451年	宝徳 3	景泰 2		尚金福 1	国相椎機、長虹堤を築く	
1453年		享徳 2	4	4	4: 仁宗繼承争い「志魯・布里の乱」起こる。首里城焼失	
1454年		3	5	10	尚泰久 1: 疎球設置、(大武進貢)が初めて開造。	
1456年		康正 2	7	3	3: 丁朝美祖。この年既に漏刻機がおり太鼓で報じる	
1458年		長祿 2	天順 2	5	5: 葵佐丸・阿麻利和の亂。「方国津御門」鑄造され首里城正殿にかける。	

西暦	日本年号	中国年号	王 級	事 項	日本・世界
1459年	長禄 3	天順 3	尚泰久 6	王府失火で倉庫(京の内倉庫蔵)などを焼く	
1461年	寛正 2	5	尚泰 1	琉球銭貨、「世高通寶」が初めて鋳造。	
1462年	3	6	2	朝鮮人入京、宮古島に憑着	
1463年	4	7	3	マラカ(マレーシア)へ使者を派遣	
1466年	文正 1	成化 2	6	琉球銭貨、「世高通寶」が初めて鋳造。	
1467年	応仁 1	3	7	1 金丸、王位に就き尚円と号し、第二尚氏王統始まる。琉球銭貨、「金圓通寶」が初めて鋳造。	応仁の乱(1467~1477年)
1470年	文明 2	6	尚円 1	2 朝鮮洪武帝(朱元璋)に使節として辞去に際して辞表に贈る「火滅」(火矢)を贈らして京人を警かず。尚徳王、喜界島に遠征し、凱旋して八幡宮を建立。	
1471年		3	7	3 尚徳王、喜界島に遠征し、凱旋して八幡宮を建立。	
1472年		4	8	2 朝鮮洪武帝(朱元璋)に使節として辞表に贈る「火滅」(火矢)を贈らして京人を警かず。尚徳王、喜界島に遠征し、凱旋して八幡宮を建立。	
1475年		7	11	3 マラカ(マレーシア)へ使者を派遣	
1477年		9	13	尚宣帝 1 尚宣帝王位に就くが、尚に位を譲る	
				尚宣帝 1 尚鮮洪武帝(朱元璋)に使節として辞表に贈る「火滅」(火矢)を贈らして京人を警かず。尚徳王、喜界島に遠征し、凱旋して八幡宮を建立。	
1490年	延徳 2	弘治 3	14	1 パタニ(タイ)との交易開始	
1494年	明応 3	7	18	16 五陵山に墓園を築く(1494年開工)	
1497年	6	9	21	2 多良間島民慈河伝花らに名、琉球に紅花献納の帰り大風に遭い朝鮮許州島に擱着する	
1500年	9	7	24	8 久重山、オヤケアカハチの乱が起き中山寮に平定	
1501年	文亀 1	14	25	玉陵山に墓園を築く	
1502年	2	15	26	内宮祭の前に御靈池を造り、弁財天堂を建し朝鮮王より贈られた万善蘿藤を納める	
1506年	永正 3	正徳 1	26	久米島、具志川按司を設置	
1508年	5	3	27	百里城(城跡)に石橋千才造(中國の様式)、北殿創建、一对の大龍柱(中國風)舞殿(舞踏殿)を設置	
1519年		16	14	43 国比屋主御殿石門・奈良の右門創建	
1522年	大永 1	嘉靖 1	46	46 与那国島の鬼虎、官吉の御宗祖見親ら征討。	
				真珠漢碑文(仮名書きのミセラードが書かれる)建立、軍事兼用の真珠道傍寺・真玉橋橋架、那覇港防壁を明記、石門(真珠道)の東側へ国王佛塔を建立(宮古の仲宗根豊見親玄孫、宝鏡治丸などを献上し国王の徳讃え、拘死を禁じる)。1522年創建の真玉橋は木橋五座(中央が真玉橋)、その南を世持橋、両端に無名の二座)。この頃(1527~1555年)、龍橋、首里門(守護門)を創建。	
1528年	享禄 1	7	尚清 2 待賀門(後の守護門)建立		
1532年	天文 1	11	6 『まろうき』巻一編集	一向一揆、越前守氏を殺る	
1537年	6	16	11 尚清王、兵を発して大島を征討		
1543年	12	22	17		種子島に鉄砲伝来
1544年	13	23	18	首里城東南側の城壁工事始め	
1546年	15	25	20	百里城東南側御壁工事完成し、城壁が一帯となる。練兵門を築き、赤唐御門(之志)神文建立	
1549年	18	28	23		キリスト教伝来
1554年	23	33	28	那覇港に屋良度森城が築城、碑文が建立される	
1556年	弘治 1	35	尚元 1 尚元即位、倭寇來襲し尚元王、兵を率いてこれを破る		
1562年	永祿 5	41	7 百里城神門前の石橋千才建てる		
1571年	元龟 2	降慶 2	16	16 大鳥を駆逐する。行慶寺に廟宇建立。	
1573年	天正 1	万曆 1	19	尚元 1 万曆即位。	室町幕府滅亡
1579年	7	7	7	7 首里門に「守礼之邦」の扁額を掲げる	
1590年	18	18	尚寧 2		豊臣秀吉、全国統一
1592年	文祿 1	20	4		豊臣秀吉、朝鮮出兵(1592~1598年)
1597年	慶長 2	25	9	9 甫浦から首里に至る道路が開通し、大平橋(平良橋)が右橋に改築。明より甘藷持ち始める伝わる。	慶長の役(1597~1598年)
1600年	5	28	12		圓ヶ原の戦い、イギリス、東インド会社設立
1603年	8	31	15		徳川家康、江戸(幕府を開く)
1605年	10	33	17	17 沖田直義で「萬葉三十三年」跡入り瓦質土器が発見。野国總官、福州より甘藷を持ち始める。	
1609年	14	37	21	17 真摩摩(3000人の兵)侵攻、浦添極楽寺、弁財天窟破壊	幕府、島津家久に琉球を譲り
			向章王(真摩摩)へ進行へ(1611年帰國)	オランダ船、長崎平戸に設置	
1610年	15	38	22	22 琉球使節、尚元王(琉球)家臣に屏開	
1616年	元和 2	44	28	28 真摩モの朝御工、張獻功ら三人来航。池田村に朝鮮式陶法を伝授。弁財天窟再建され、この頃、首里城南殿(1621~1627年)が創建。	廣州王朝興る
1623年	9	天啓 3	尚清 3 『まろうき』巻三以下成る		
1624年	寛永 1	4	4		オランダ、台湾占領(1624~1661年)
1628年	5	顯徳 1	8	8 百里城南殿創建	
1634年	11	7	14	14 伴軍への使節として江戸上り「慶賀使・謝恩使」が始まる。	
1635年	12	8	15	八重山カラシタン事件の石組木将、渡名喜島で処刑	
1636年	13	13	16	16 国吉、明か・櫻額の法(浮彫装飾法)を学んで帰国	廣州王朝、国号を譲とする
1639年	16	12	19	19 地盤が陥り、城壁崩落し、修復工事をおこなう	島原の乱(1638年)
1641年	18	14	尚賢 3 8 久重山に大和在番を設置(~1649年廃止)		
1644年	正保 1	顯徳 1	4	4 各所に通見番(体火の割)を設置	オランダ、マラカ占領
1650年	慶安 3	7	3	3 尚象賢、『中山世紀』著をする	明王朝滅亡、清が興る。
1656年	明暦 2	13	尚賢 9 尚圓(伊地知)重慶、娘日絹を詩説		

西暦	日本年号	中国年号	王 純	事 項	日本・世界
1660年	万治 3	順治 17	尚清 13	里城、火災で炎上し正殿その他の焼失する	
1661年	寛文 1		14	里城寺跡が礎壇に改設されて世持門となる	鄭成功、台湾に帰る(鄭氏台灣)
1665年	5	康熙 4	18	平田典通(諱)の手で里城門上に上級物語伝書を譲り受けける	ジャム、清に朝貢
1670年	10		19	里城 2 里城正殿内建工事により瓦葺に改める。平田典通(宿遷田)中国より「五色玉諸物象掛け」(五焼き)手札を習得する	
1671年	延宝 5		20	9 重苑(御茶屋御所)が創建、里城金城の石橋が完成する	
1681年	天和 1		21	13 中山寺が瓦葺に改修される	
1682年		2	21	14 里城を北彩廊の堂へ飾る。陶工を牧志村邑屋に集住させられ、陶窯が一ヶ所に統合	
1694年	元禄 7		26	26 火矢櫓を石積に改築	
1707年	宝永 4		33	39 真玉櫓石橋に改修	
1709年		6	46	41 里城正殿・北門・南門改築失火。はじめて墨を造る	
1710年		7	48	再び 1 里城石橋はにまと	
1712年	正徳 2		51	3 里城内城が本格化。1715年に完了する	
1714年		4	53	尚敬 2 平野仁、はじめて石碑を造る	
1721年	享保 6		60	9 円覚寺大殿(圓覺殿)などが奉上する	
1724年		9	67	12 仲村栄致元、八重山の山田山等に籠を造り蚕および地を伝授。	
1726年		11	74	14 八重山の山田平等造り「雍正四年丙午」銘入り陶器が完成	
1729年		14	77	17 里城正殿改修され、「御差遣」の位置を中央に移設。	
1730年		15	8	19 仲村栄致元、森野の立野・苗代川において陶器の陶法を伝授。北側櫓の版権を石碑に改修(五座全て石碑となる)	
1731年		16	9	19 仲村栄致元、浦田村に陶窯を構築し、福源を抱く	
1732年		17	10	20 佐敷御殿と世羅門前に築き、世珍宮の東に蔵を建て、宝物を収藏する	
1736年	元文 1	乾隆 1	24	24 里城北門が石化(上川の改修)	
1739年		4	4	27 里城城郭周辺に時計を設置し看守役人を置く	
1743年	延享 2		10	30 「旗場」(武道場)完成	
1753年	宝曆 3		18	尚謙 2 里城城門前・武道御殿が創建される	
1754年		4	19	3 中国の崩に倒れ。里城城門井を改築	
1769年		10	25	9 大地震があり、里城城壁57所が損壊	
1768年	明和17		33	17 地震の被災にあたった里城城門を改修	
1771年		8	36	20 明和の大震災(吉古・八重山で遭難者11,861人)	
1772年	安永 2		38	22 里城北牆改修	
1776年		5	41	25 アメリカの独立宣言	
1789年	寛政 1		54	38 フランス革命	
1797年	9	嘉慶 2	61	里清 3 古吉多貞昌助で英國艦船「プロビデンス号(船長プロートン)」難破し、同年那覇に寄港する	
1798年		10	3	4 里中城御殿に公学校所(国学)創設	
1799年		11	4	5 読名園(南苑)が造営される	
1801年	享和 1		6	7 公学校所を能瀬池畔に移転し、国学に改めら	
1806年	文化 3		11	10 里城城門改修	
1809年		6	14	6 真玉櫓(北側の世蕃櫓)が大雨で決壊	
1811年		8	16	8 里城正殿改修	
1816年		13	21	13 里城船ラング(ラ・ガルセ)号・東丸船、42日間滞在	
1820年	文政 3		25	17 大東島(ボロノブ島)イギリス軍船ボナヴィン・大作に発見	
1827年		10	道光 7	24 英国船「プロテウス号」来航する	
1836年	天保 7		16	尚育 2 真玉櫓重修(北側の世蕃櫓のアーチを大きくし、その北側に世蕃櫓を新たに新設)。北から南へ、世蕃櫓、世蕃櫓、真玉櫓	
1837年		8	17	3 重要文化財真玉櫓文建記(1522年の木造)を石橋に改修した記念碑文、1708年と1837年の二次の記録を碑文に記す	
1840年		11	20	6 アヘン戦争	
1844年	弘化 1		24	10 プラン・ド・リュ・アルヌール号(リュ・アルヌール)、宣教師フォルカードを(=1846年帰仏)を曳いて去る(聖観音に退院)	
1845年		2	25	11 英国艦サウザンドルフ号(八重山島を防削し、那覇に到着)	
1846年		3	26	12 里城船(サウザンドルフ)那覇に到着し、英國宣教師ペーテル・ハイム来航(9年間滞在)。吉良族正殿重修。吉良城外部の鉢込門、久慶門、離世門を二重屋とする。伝松原クオバトル号ほか、隻來航し、フルカードを乗せて去る	
1851年	嘉永 4	咸豐 1	尚泰 4	4 里国人(美国人)が港在につき、城の防備を固めるため城壁の塗み日に石壁を塗り固める	
1853年		6	3	6 米海軍提督ペリー、サスクハハ号以下三隻で来航。里城訪問	ロシア使節チャーチン長崎来航、通商要求
1854年	安政 1		4	7 城末修好条約が調印される。ロシアのチャーチン提督・ペラダ号で来航	
1857年		4	7	10 中城御殿(世蕃櫓)を当麻へ移転。宮古多貞昌高田の高田にオランダ商船「ファン・ゼセ号(船長ハーベン)」漂着、那覇へ輸送後オランダ商船ヤン・ダニエル号(船長ハーベン)が迎える	
1867年	慶応 3	同治 6	20	江戸幕府倒れる	
1868年	明治 1		21	王政復古、明治と改元	
1869年		2	8	22 釜天堂が焼失する	
1872年		5	11	25 旗康膳設置	
1873年		6	12	26 ドイツ商船ペルボントン号(官古島・宮古村沖合で難破し、8名を救出)	
1876年		9	光緒 2	28 ドイツ帝國軍艦クローネ号を浜道し、博愛記念碑を官古島に建立	
1879年		12	5	32 尚泰王、首里城明け渡し(奥藩置県)。450年に及ぶ琉球王国崩壊。縣木舎台分遣隊首里城駐留、琉球処分。沖縄県誕生、鍋島直禪令着任	

西暦	日本年号	中国年号	王 純	事 項	日本・世界
1894年	27	16	明治27		日露戦争はじまる
1897年	30	23		沖縄師範学校、首里城から当蔵に移転	
1904年	37	30			日露戦争はじまる
1907年	40	33		首里城の中山門、老朽化のため売却撤去	
1909年	42		宣統 1	首里城、首里城に払い下げられる	
1912年	45		民國 1	首里城内に第一小学校ができ、広福門、奉神門撤去	中華民国成立
(大正 1)				大正 1	
1914年	3	3			第一次世界大戦はじまる(～1918年)
1923年	大正12	12		首里市会、首里城正殿の解体を決議する。首里城伊東忠太・藤谷芳太郎末期、首里城の調査研究を行なう文部省に保存を訴える	
1924年	13	13		沖縄神社創建、首里城正殿を拝殿とする	
1925年	14	14		首里城正殿を国宝に指定	
1927年	昭和 2	16	昭和 2	国庫補助による首里城正殿の解体修理工事着手	
1931年	6	20		首里城正殿解体修理工事完成	満州事変おこる
1933年	8	22		首里城正門・瑞泉門・白銀門・守門は門は国宝指定	
1934年	9	23		首里城北殿の修復が始まる(～1936年完成)	
1936年	11	25		伊東忠太・藤谷芳太郎の内氏、首里城・道慶城跡・奥屋城跡・南山城跡の発掘調査(～1937年)。他永慶庵、伊江島ガタ原創館遺跡を調査	
1937年	12	26	田辺 泰・高橋不二雄	琉球建築を刊行	
1939年	14	28		骨ヶ歯門、国宝指定	第二次世界大戦はじまる(～1945)
1944年	19	33		首里城地下下に第32軍司令部壕が構築される	
1945年	20	34		首里城正殿に含む建造物群や石積み等、沖縄戦で焼失、崩壊	
1946年	21	35		GHQ、日本と米西諸島を行政分離宣言。ハッカマスター海軍少佐、軍政府長官就任。米軍政府、鹿児の市町村長を頭頭として市町村長に任命	
1951年	26	40		首里城内に琉球大学開学	
1962年	37	41		琉球政府発足、初代行政主席に比嘉秀平任命	
1953年	28			奄美群島日本復帰	
1957年	32			園比屋武御歎石門を復元する	
1958年	33			守礼門を復元する	
1967年	42			首里城跡に含む歴史文化財の復元整備計画立案	
1972年	47			米政府解散後、沖縄本土戻帰(沖縄県となる)。首里城跡会門復元整備着手(～2001年度までに外郭石積み、木戸門、世羅門などの各門が完成)	
1982年	57			首里城跡上に琉球大学本館	
1984年	59			沖縄県立「首里城公園基本計画」策定	
1985年	60			首里城正殿跡の発掘調査着手(～1986年度まで実施)	
1986年	61			首里城内の約1haを「国際外灘記念公園首里城地区」を沖縄復帰記念事業として復元整備をねらうことの閣議決定	
1988年	63			北殿・南殿・御庭地区の発掘調査が開始。	
1989年	平成 1			首里城跡及び利府、番所、北殿、守門復元工事に着手	
1992年	平成 4		首里城正殿、北殿、南殿ほか復元整備完了し一般公開		
1994年	6			首里城跡の内地盤の発掘調査開始(～1997年度)、1450年に大火により焼失した青龍跡が見えられた(現実質)。	
2000年	12			首里城跡の内地盤の發掘調査開始(1597年火災で焼失)出土陶器器518点が戦前、戦後を経て初めて考古資料の部での重要文化財に指定される。沖縄サミット開催。首里城跡、園比屋武御歎石門が世界遺産に登録される	

（参考資料）

- ① 宮城栄昌・高宮廣衛『沖縄歴史地図』(歴史編) 柏書房 1983年。
- ② 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』別巻 沖縄タイムス社 1983年。
- ③ 日本史料叢書会『中国・朝鮮の史籍における』日本史料集成 明実錄之部1『国書刊行会 1979年。
- ④ 池田榮史・津波古聰『灰袖襷の話』『沖縄県立博物館』第17号 1991年。
- ⑤ 沖縄県教育委員会『重新校正 中山世謙』1983年。
- ⑥ 沖縄県教育委員会『湧田吉蔵跡(1)』1993年。
- ⑦ 阿利直治『沖縄県石垣市山田等塙址、慶田川塙址、黒石川塙址』『黒石川塙址』石垣市教育委員会 1993年。
- ⑧ 沖縄県教育委員会『首里城の歴史概略』『首里城 - 南殿・北殿跡の遺構確認調査』1995年。
- ⑨ 兵庫埋蔵歴史調査会『日本出土銭絶観』1996年。
- ⑩ 沖縄県教育委員会『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書(1)』1998年。
- ⑪ 金田明美「多良間沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証」『日蘭学会会誌』第26号 通巻48号 2001年10月。
- ⑫ 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『中世考古学の総合的研究 - 学融合を目指した新領域創生 - 』平成18年度 シンポジウム『古代・中世の境界領域 - キカイマの位置付けをめぐって』資料集 2007年2月10・11・12日 奄美市中央公民館 喜界町自然休養村管理センター
- ⑬ 上里隆史『最新歴史コラム 目からウロコの琉球・沖縄史』有限会社 ポーダーインク 第1刷 2007年2月25日。
- ⑭ 「沖縄の歴史」・「琉球王国とは」(財) 海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター ホームページ 2007年6月

報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと・まだまみちあと						
書名	首里城跡・真珠道路						
副書名	首里城跡守礼門東地区・真珠道路起点及び周辺地区発掘調査報告書						
巻次	一						
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第51集						
編著者名	金城亀信・新垣 力・知念隆博・仲村 純・天瀬瑞美・上原 静・大堀 皓平・菅原 広史・又吉 純子						
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8751・8752						
発行年月日	平成21年3月31日						
ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	発掘面積 m ²	調査原因
しゅりじょうあと 首里城跡 まどまみちあと 真珠道路	市町村 沖縄県那覇市 那覇市 47201 おきなわけんなはい しらさきやまとく しらさきじょうあと まどまみちあと まことじゆうじよ	遺跡番号 —	○° ′ ″ 26° 12' 50.75260°	○° ′ ″ 127° 43' 07.49963°	2006. 7.20 ～ 10.3	139.2	県営首里城公園 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
首里城跡	縫門大道 南側石牆 延長部分 の根石及 び南北の 排水溝。 掘建柱住 居跡等。	中世	排水溝(中世)	中国産 青磁・白磁・染付 揭露陶器・天目茶碗・瑠璃釉 タイ産揭露陶器・半縫 本土産陶器 沖繩產 土器・陶質土器・瓦質土器 瓦・磚・円盤状製品 施釉陶器・無釉陶器 金屬製品・青銅製品 錢貨 埴輪 骨製品 脊椎動物遺存体 貝類遺存体	琉球王国の交易港であった 那覇港及び国場川下流域の種 川(井泉)及び豊見城グスクな どを外敵であった倭寇の侵攻を 阻止する目的で守礼門南東側 の真珠道起点からの道路整備 と真玉橋の橋架までの約4kmの 整備を記念して1522年に建立 された「真珠湊碑文」の台座跡 が発見された。また、縫門大道 南側石牆部分の石積み の根石及び排水溝並びに真珠 道の起点部分が確認された。 その他、14世紀終末～15世紀 前半頃の掘建柱住居跡と炉跡 が確認された。		
真珠道路	石碑 台座跡	中世	石碑台座跡(中世)				
	真珠道路 起点部分	中世	石積み(中世～近・現代)				
要約	昭和61年に首里城公園計画区域約18haの内、首里城内部の約4haが国営公園区域とすることが閣議決定され、残りの約14haが県営首里城公園区域となった。本発掘調査は、昭和63年度に策定された『首里城公園基本設計』に基づく復元整備を目的とした遺構確認調査である。守礼門南東側にあった1522年建立の「真珠湊碑文」は、琉球王国の生命線であった那覇港及び国場川下流域を倭寇からの侵攻や防衛をおこなう目的で、守礼門南東側から真玉橋までの整備及び真玉橋の橋架を記念碑である同時に「歴史の道」でもあった。これまでの発掘調査で「真珠湊碑文」の台座跡が発見され、台座及び平成18年度に復元された碑文の設置が可能となった。更に縫門大道南側石積みの延長部分である石積みの根石や排水溝が検出されると共に真珠道の起点部分が発見された。その他、縫門大道を造成整備する際に地鎮具とみられる銘入りの青銅鏡や鍍金製の菊花文金物が出土した。						

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 51 集

首里城跡・真珠道跡

—首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書—

発 行 年 平成 21（2009）年 3月 27 日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

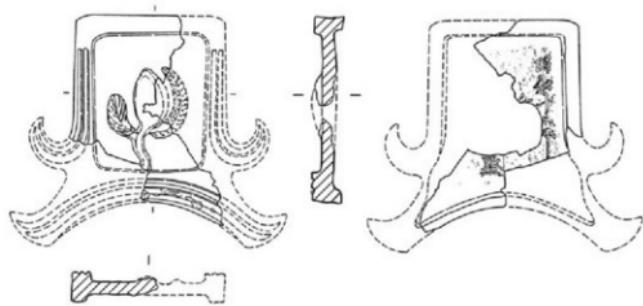
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193 番地の 7

Tel 098-835-8751・8752

印 刷 株式会社 沖産業

〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐 2-1-1

Tel 098-898-2191



首里城跡守礼門東側地区・真珠道路起点及び周辺地区より出土した
「昭和十二年」銘入の鬼板瓦：左側（表）、右側（裏）